



研究報告書

2011.3

平成22年度 市民研究報告書

“熱田神宮に門前街を…”

< 目次 >

I 概要編（本編要約版）

II 本編

第1章 はじめに	1
第2章 門前町とは?	2
第3章 熱田神宮とその周辺の歴史	5
3-1 熱田神宮の祭神	6
3-2 熱田という地名	6
3-3 熱田神宮に対する信仰	7
3-4 熱田神宮の歴史	7
第4章 熱田神宮の門前町考	15
4-1 熱田の場合	15
第5章 調査	20
5-1 参拝者調査	20
5-2 商店街調査	26
5-3 住民等調査	31
5-4 事例調査	40
5-5 その他調査	45
第6章 現状及びその課題と問題点	50
6-1 熱田神宮	50
6-2 商店街	53
6-3 課題と問題点	57
第7章 門前街づくりの方向性	58
7-1 門前町と門前街	58
7-2 熱田神宮前商店街	59
7-3 社寺と地域との関わり	61
7-4 意欲と合意	63
7-5 まちづくりのインセンティブ	63
7-6 コミュニティー	64
第8章 熱田の杜と共生する知と美のまち	66
8-1 熱田神宮の役割	66
8-2 名物・名品	67
8-3 史跡・伝承	68
8-4 歴史まち	69
8-5 イベント	69

第9章 提言に代えて	71
9-1 熱田神宮門前街	71
9-2 熱田の湯（仮称）案	71
9-3 熱田おかげ横丁（仮称）案	73
9-4 駅名変更案	73
9-5 熱田表参道（仮称）案	74
9-6 熱田地下街参道（仮称）案	77
9-7 熱田空中門前町（仮称）案	78
9-8 ペDESTリアン・デッキ商店街（仮称）案	79
9-9 熱田神宮西・門前街（仮称）案	81
9-10 門前街への支援	82
第10章 おわりに	90

III 参考文献・参考資料

概要編

“熱田神宮に門前街を…”

市民研究員 粟田 益生、富永 和良、水野 孝一、小宅 一夫、渡邊 正則

1 はじめに

熱田神宮は、三種の神器のひとつである草薙神剣を奉斎することで全国に知られた神社である。しかし、一般にいわれるような門前町はない。

本調査の動機は、平成21年10月10日に熱田神宮で行われた本殿遷座祭に全国から大勢の人が訪れた時のこと、休憩所、食事をする所あるいはお土産を買う店がないために多くの人が困惑していたからである。

そこで熱田神宮に門前町はなぜないのか、つくれないのかなどについて、研究してみたいと思った。

2 現況調査と結果

調査は、様々な面について実施を試み、興味深い結果が得られた。

(1) 一般（定義・歴史）調査

最初は、熱田神宮やその周辺について知る必要があると思い、踏査から始め、熱田神宮の歴史やかつて門前町があったのかどうかの一般調査から始めた。

しかし、都市センターのライブラリー、市内の図書館はもちろん熱田神宮内にある熱田文庫などにも、門前町に関する文献が殆ど無いことが分かり、冒頭から、前途多難なことが認識させられた。

(2) 参拝者アンケート調査

熱田神宮を訪れる人の実態と門前町をどのように考えているかについて調査した。

参拝者に市内の人が多いのでは当然としても、遠い県外からの人も多く訪れていて、

熱田神宮が全国的に知名度の高いことが裏付けられた。

参拝者は高齢者が多いだろうと予想していたが、30歳代の人が訪れる率も高いことが分かった。また、熱田神宮を訪れるのに正門から入る人が皆無だったことは予想外だった。

最後の門前町については賛成・反対とも様々だったが参考となる意見は少なかった。

熱田神宮の印象には、立派な神社とか緑豊かな森といった好印象が圧倒的だったが、お高くとまっているなど厳しい言葉も幾つか聞かれたのには驚かされた。

(3) 商店街調査

商店街の調査として、周辺を歩いたが商店街らしいところは、JR・熱田駅から名鉄・神宮前駅にかけてだけという状態だった。このため、熱田神宮前商店街について重点的に調査を行った。

その結果としては、なんともしがたい実態が把握できた。

すなわち、約70店舗ある中で空き店舗が27%、住宅として使用しているところが20%で合わせて47%と約半数が営業されていないという事実だった。

しかも、それら空き家や住居としている家主は、店舗を売却や貸付する意思がないということだった。

その後、営業している個々の商店でのヒアリングからは商店街の成り立ちから経緯を含めた実態が把握できた。

次に、商店街組合、個人商店、地域に住

んでいる人、さらにはNPOなどで活躍している人にも地域の実態と将来の展望について聞きたかった。

(4) 住民等アンケート調査

住民調査は、熱田神宮門前すなわち熱田神宮の正門(南門)前の町内である市場町、それと隣接する新宮坂町、さらに国道1号線より南の旧東海道を包含する伝馬本町の3町内会を合わせた275世帯を対象に行った。

回収率は、33世帯~57世帯で、3町内を合わせた平均回収率は50世帯だった。

結果については、興味深いものがあった。

最初にお断りしておくが、3町内とも中小の会社や倉庫、お寺などが混在する比較的静かな住宅街であることである。

結論を簡単にいってしまえば、最も門前に近い町内では門前町に対して拒否反応が強く、もっとも遠い町内会の回答は門前町に積極的だった、ということである。

3町内とも静観する、趨勢を見る、といった回答が多くあったものの、全体的な結果では門前町をつくることに賛成という結果が出た。

また、地域で活躍しているグループに熱田神宮の門前町との関連についてヒアリングも行った。その結果は、大きな意味で門前町を意識していることが分かった。

(5) 事例調査

文献等の資料がほとんど望めないことから、自分たちの目で門前町の実態を調査し、そこから何かをつかもうと事例調査を行った。それらの調査先は、名古屋市内を始め、県内、県外をできるだけ多く回る予定をした。

調査は、全国各地の門前町30余箇所を手分けして訪れた。遠くは西の香川県、東は茨城県までであった。

その結果、門前町の定義やこれから門前町をつくるにあたっての注意、あるいは維持管理してゆくノウハウなど、様々なヒントを得ることができた。報告書では26箇所について述べている。

(6) 名物調査

名物調査では、熱田神宮周辺には結構色々な名物菓子、名物食べ物が売られていることが分かったが、一、二を除けば、その知名度は今ひとつなのが気になった。

その例として、熱田神宮と道一步隔てたところで熱田神宮の名物菓子は隅に押しやられ、他県の名物菓子が山積みとなって売られているという事実は大いに気になるところだった。

各店舗は、組合でつながっていることから、お互いをよく知り合っていた。しかし、それが良い意味での競争意識として作用しているのか、ライバル意識となってお互いの発展を阻害しているのか疑問に思える点もあった。

(7) 史跡・伝承調査

名古屋市内でもっとも史跡等の多いといわれる熱田区だけに、ざっと調べただけでも120箇所を超える史跡等があった。市内随一の歴史的遺産を有する地であることが改めて認識させられた。

その中でも熱田神宮を訪れた人がお参りの後に足を延ばすことを予想して熱田神宮を中心にして約1^キ内にあるものについて調べてみた。

その数は約50箇所、それぞれに興味深いものが多くあったが、一方でそれらを有効に活用しきれない実態も明らかになった。

既に消滅してしまったものや説明看板だけの所もあったし、また、これらを巡るルートマップも幾種類か発行されていたが、

それぞれに何をターゲットにしてマップづくりがされているのかよく分からず、どの地図を基にして歩いたらよいのかと迷ってしまった。

道案内の標識も土地の人には分かっているのだろうが、地方から来た者では迷子になるようなものもあった。

3 門前町の方向性

様々な調査結果などから浮かび上がってきた課題や問題点を整理し、今後どのような目標とすべきかについて考察した。

最初に、熱田神宮についてだが、見事な森を形成している境内は今後も大切にしながらも、気持ちよく参拝者ができるような配慮をしてゆかなければならない。

また、門前町を考えると熱田神宮を無視することはできないのだから、神事や祭典などを通じて、熱田神宮と地域が関わり合っただけでなく、ゆくことが大切であると痛感した。

商店街では、現状を打破するだけの力がないことを勘案すれば、いくら呼びかけをしても無駄になると思われる。従って、大きな区域での開発や活性化を行うことによって、商店街自身が意欲を持つような方法を考えるべきである。

仮に門前町をつくらうという機運が高まったとしても、現在の静かな住宅地の環境を大きく変えるようなことは注意すべきである。

このため、門前町をつくるのは地域がつくるのだという意識を持って、地域の人達の意見を十分に勘案して進めるべきである、などと考えた。

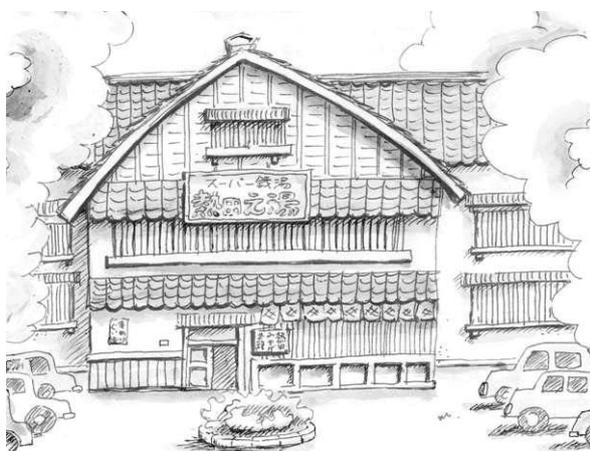
4 結論

熱田神宮とその周辺の界限には、門前町をつくるための大きなポテンシャルを内在している。

これらの可能性を活かした夢物語を議論した場を再現した。

(1) 熱田の湯 (仮称) 案

人を呼び込み賑わいをつくるためにはスーパー銭湯の発想で「熱田の湯 (仮称)」を熱田神宮からほど近い一角につくるという案を最初に発想してみた。



熱田の湯 (仮称) イメージ

(2) 熱田おかげ横丁 (仮称) 案

前項の「熱田の湯」はある程度大きな企業でなければ成し得ないと思われることから、地域の人達でできることはないかと考え議論した。その結果として「熱田おかげ横丁 (仮称)」を考えた。

これは、参道をちょっと外れて横道に入ったら土産物屋やお休み処などがあつたと、思わぬ発見がある袋小路のようなものである。



熱田おかげ横丁（仮称）イメージ

(3) 熱田表参道（仮称）

熱田神宮の正門から入る人がいなかったという事実は由々しきことであり、その対策はと考えると、地下鉄の駅名に問題があるのでは考え、駅名変更をすべきということに思い至った。

さらに駅名が変更されても、駅から熱田神宮への道が分からなければ片手落ちで、道標や案内看板の整備が必要であると考えた。

議論の結果、その整備する道筋を「熱田表参道（仮称）」として想定した。

それは熱田神宮正門を出たら直ぐに右折れし、地下鉄・伝馬長駅へ至るルートを選定した。



熱田表参道（仮称）イメージ・ルート

(4) 熱田地下街参道（仮称）案

地下鉄の伝馬町駅から熱田神宮正門までのルートのもうひとつの案として、駅から地下街を通過して正門へ出ることを想定した。

これによって、歴史遺産としての旧東海道筋を歩く人も増え、街の活性化にも寄与するのではないかと考えられた。

さらには、駐車場を併設することで、熱田神宮の駐車場用地が有効に活用できることも考えられる。



熱田地下街参道（仮称）イメージ

(5) 熱田空中門前町（仮称）案

熱田区は市内随一の史跡等が豊富なところであり、これを活かした門前町あるいは

街づくりが出来ないかと議論した。

そこで、旧東海道と宮の渡しという歴史的遺産を活かすべく、熱田神宮と宮の渡しを結ぶ古道を復元し、合わせて門前町にすることを発想した。

すなわち、この道筋は宮の渡しの宿場町として賑わったとき旅籠や鶏飯屋などが立ち並んだ道であったが、国道1号線や国道247号線によって分断されたものである。

この道筋の上にオーバークリッジを架け、それも従来の横断歩道より格段に広い幅として、そこに門前町をつくるという発想である。これが実現すれば、現在は飛び石状態となっている宮の渡し周辺の史跡なども活かされることになる。

さまざまな規制があって難しいことは承知の上の発想だが、諸外国などの例を参考にして規制緩和されれば実現できると考えた。



熱田空中門前町（仮称）イメージ

(6) ペデストリアン・デッキ商店街（仮称）案

「既存する商店街に活気を取り戻すことが第一」という考えは当初からあり、アンケート等の意見とも一致していた。

しかし、調査の結果では何ともし難いことも分かった。そこで間接的にでも刺激する策について議論した。それにはヒアリングで聞いた住宅供給公社の尾崎理事長の意見が大いに参考になった。

すなわち熱田神宮の東側で、名鉄・熱田神宮前駅にある市バスターミナルの上をデッキにして商店街をつくるという考えである。名鉄電車を降りた客は名鉄パレを抜けてデッキに出て、熱田神宮へ降りることができる。

デッキを北側の道路まで広げれば、熱田区役所南の開発予定地に近くなり、そこからの客が熱田神宮前商店街の前を歩くことになり、店主も手をこまねいていられなくなるだろう、というものである。



ペデストリアン・デッキ商店街（仮称）イメージ

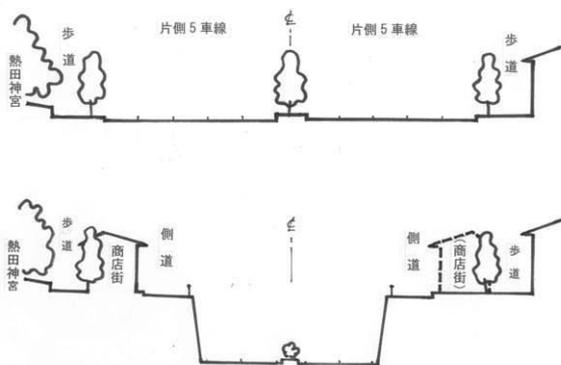
(7) 熱田神宮西・門前町 (仮称) 案

熱田神宮の南と東について案が出たところで、西側についても何かできないかと議論した。

熱田神宮の西側は、地下鉄・神宮西駅で降りた人が熱田神宮の西門へ向かって歩く道である。広い国道 19 号線沿いの歩道は、熱田神宮の石垣に沿っており、味気ない。

国道 19 号線を観察すれば、片側 5 車線の道路に信号の赤・青の間隔に従って車の波が繰り返される。信号が赤の時は広い道路はガランとして、犬がのんびりと車道をうろついている。交通量からみて車線数が多いことが素人でも分かる。単純に車線数を減らせば混雑する道路になるとしても、信号さえなければ車線数を減じても問題のないことが分かる。

そこで中央車線を掘割として大きな交差点は立体交差として信号をなくせば、空いた車線を減じ、そこに商店街や植栽をした土塁を築くことができる。



熱田神宮西・門前町 (仮称) イメージ

(8) 門前町への支援

門前町は、それ自体が単独で機能するものではなく、門前町を取り巻く環境が支援することで、より賑やかになり活気づく。そこで様々な支援策について議論

した。

① 名物を創る

名物は、熱田神宮やその周辺地域を印象づける効果を持っている。「熱田へ行けばあれ」というものがあるといい。

現在、熱田名物といって思い浮かべられるものは限られており、それほど強いインパクトを持っているように思えない。そこで何か新しい名物が考えられないかと議論した。

そのひとつに「熱田鶏飯」を考えた。これはかつて宮の渡しが賑わった頃、軒を連ねて鶏飯屋ができるほどの人気があったという。詳細なレシピは見つからなかったが、鶏肉でなく唐黍で色をつけたご飯に蜆汁を付けて出したのが評判を呼んだという。これを現代風にアレンジして復活させようというものである。

また、熱田神宮は草薙神剣を祀っているほか織田信長が戦勝祈願をし、戦勝のお礼に信長塀を寄進したなど「勝ち」ということのご利益で有名である。お守りに「勝ち守り」というものもある。そこで「勝ち」や信長に因んだものが考えられる。安土城の「負けずの罎」から発展させた「熱田名物・勝ち栗」、「銘菓・信長塀ミルフィーユ」、「銘菓・熱田一番」、「銘菓・氏名が長命」などである。

② 歴史まちづくり

熱田区は名古屋市内で最も史跡などの多いところである。熱田神宮の周辺にも多くあり、これを活用しない手はない。

すでに多くの史跡には説明看板が立てられているし、何種類かのルートマップも発行されている。ただ、看板だけの史跡やどれを見て巡ればよいか迷うマップなのが惜しまれる。

史跡が消滅して説明板だけになった

ところはそのままでさびしい。歴史に因んだ偉人の銅像を建てるのが考えられる。名古屋は銅像が少ない。銅像は観光の目玉にもなる。

また、より簡単に洒落た一枚もののマップをつくり、色々な場所で簡単に手に入れられるようにすれば、熱田神宮の参拝の後に気楽に近くの史跡巡りができると考えられる。

③ イベントの開催

門前町をつくったり街を活性化したりしようとするときに、何か切っ掛けがあるといい。それはお祭りだったりコンサートだったりする。

そこで考えられたのが「戦勝ウォーキング（仮称）」である。これは桶狭間から熱田神宮までを歩くイベントである。

次に考えられたのは「名古屋おもてなし武将隊」によるパフォーマンスである。これは名古屋開府400年を機に始まったのだが全国的に有名になり、似たような武将隊が各地にも出現した。その元祖ともいべき「名古屋おもてなし武将隊の

パフォーマンス」を熱田神宮の大前か長床でやれば大勢の人を呼び寄せる効果は絶大である。

④ 熱田神宮にお願いしたいこと

門前町というからには熱田神宮が欠かせない。熱田神宮も参拝者から親しまれる神社としての努力が必要で、そのための努力をお願いしたい。

それらを列挙すれば、

- ・ 参拝者に配慮した神社となるように努力して欲しい
 - ・ パワースポットをもっと広く世間に知らせて欲しい
 - ・ 登録文化財を一般に開放して欲しい
 - ・ 一之御前社を間近でお参りが出来るようにして欲しい
 - ・ 熱田文庫の整備と拡充をし、閲覧室を設けて欲しい
 - ・ 草薙神剣を奉斎する神社にふさわしい武道館を考えて欲しい
 - ・ 情報誌の発行など情報をきめ細かく発信して欲しい
- などである。

本編

第1章 はじめに

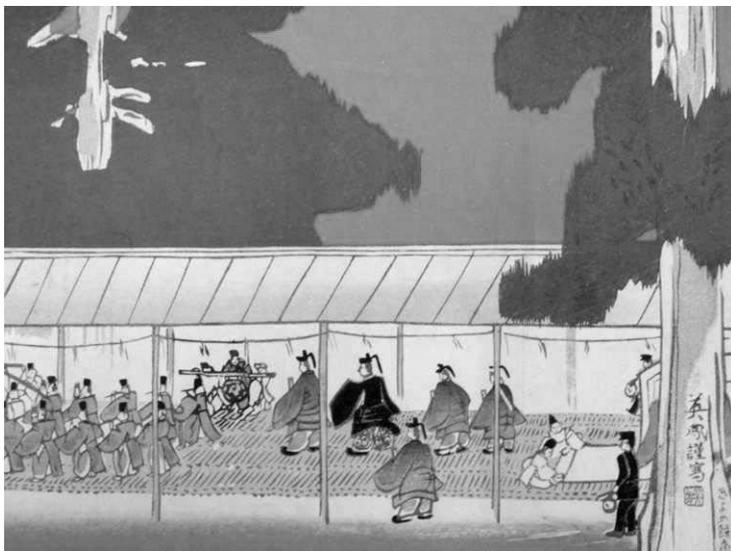
平成21年(2009)10月10日の午後8時、熱田神宮では一斉に明かりが消され、本殿遷座祭が催行された。いうまでもないが、遷座祭とは神社の本殿を造営修理するに際して神体を遷すことである。この祭典で、平成19年(2007)10月22日に仮殿遷座祭で権殿^{かりどの}に遷されていた神体が本殿に帰還したのである。

前回の遷座が昭和30年(1955)であったから、今回は54年振りという、熱田神宮にとっては大変な出来事だった。翌日には臨時奉幣祭^{ほうべいさい}が行われ、さらに社殿の竣功と遷座が無事終了したことを祝う「神賑わい」といわれる奉祝行事が1週間にわたって続いた。

本殿遷座祭に参列した人たちはもちろん、奉祝行事が続いている間、全国から多くの奉拝者が熱田神宮を訪れた。

ところが多くの奉拝者から、休息をしたり食事をしたりする場所を求められても、案内する者は適切な場所を示すことができなかった。このようなとき門前町があれば簡単なのだが、と思ったものだ。全国に名が知れわたり全国から参拝者が訪れている熱田神宮なのに、門前町がないのが奇異に感じられた。何かそれなりの訳があるはずであり、出来ないのか、あえてつくらないのかなど調べて見る価値があるように思われた。

そんな思いで熱田神宮周辺を見渡せば、商店街はある。ただ、賑わいがあるとはいえず、地域はどのように考えているのかも知りたくなった。



遷座の図 石川英鳳画

昭和30年に行われた遷座祭の様子を版画で表している。勅使、神主らに続き、右の樹木の影に「御」(御神体を囲む絹垣)が見えている。

(きよめ餅総本家提供)

そこで、熱田神宮とその周辺地域がどのような変遷をしてきたかを調べ、その中での門前町の位置づけを探ってみたい。さらに、同じ地域の現状と課題から新たな門前町の創造や商店街の再生など地域の活性化への可能性を調べて見たいと考えた。

なお、「神宮」は「伊勢神宮」を意味する言葉であるが、本文及び資料編においては「神宮」と記されていても単に「熱田神宮」または一般的な「神社」という意味で使用している場合の多くあることをお断りしておく。

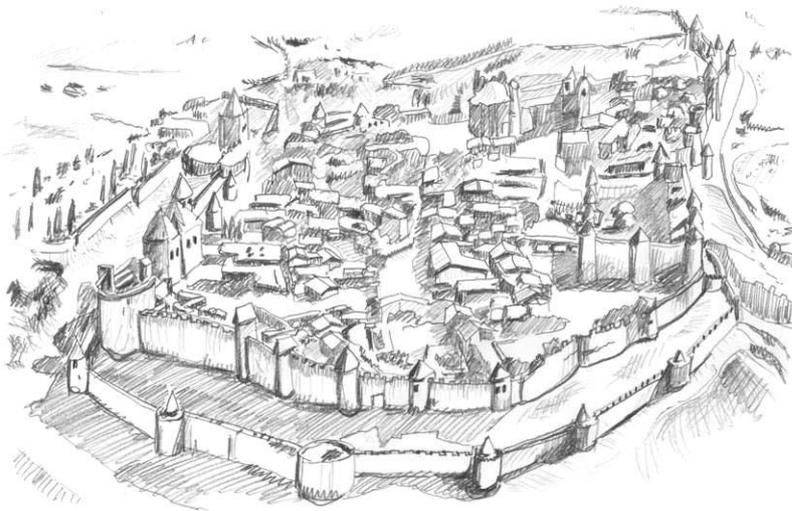
第2章 門前町とは？

門前町というと、すぐに思い浮かぶのは、神社やお寺へ向う参道の両側に並ぶ商店街である。門前町を文字どおりにいえば、神社あるいは寺院の門の前にある町となるのだから、何も商店街に限ったことではなく、もっと広い町あるいは地域として考えればよいのではないだろうか。

そもそも門前町がどのような要因から出来てきたかといえば、第一に、社寺の門前にあるのだから、当然、門前で生活する人たちの中に宗教的な思いや考えがあったはずである。何らかの不安とか動揺を神仏にすぎること、それらを解消しようとしたに違いない。明確な歴史は分からないまでも中世の戦乱が相ついで時代、人々の生活が不安定になった時期あたりに発生してきた門前町が多いようである。もうひとつは経済的な理由である。僧侶、神職、その他の社寺で働く人、参詣人、出入り業者などの消費者が多いこと、そして社寺が保有した座、市などといった権益をあげることができる。

そんな門前町だが、現在でも門前町という言葉は残ってはいるものの実態としては死語に近いようにも思える。人知の及ばぬものはないと思われるような現代、あらゆるものが科学的に証明できるとされる時代において、神仏に頼ることが非科学的に思われるようになってきたからに違いない。しかし、だからといってすべての人に悩み、特に心の悩みが無くなったのかといえば、ある意味では逆で、少し以前の心の安らぎが得られた時代と比べれば、より深刻な時代になっているのではないかとさえ思われる。このようにみれば、門前町というものは、何時の時代にも心の安らぎを与えてくれる癒し空間として必要なもの、求められるものであるといっても過言ではない。

もうひとつ、別な面から門前町を考えると、日本の門前町という形態の町は、どうも日本独特のもののように見える。海外を見てみると、教会やモスクはまちの中心や目立つ場所にあつて、その周辺の集落や町は特に門前に並ぶこともなく周囲を取り巻くような形となつていて、特に門前に限ったことはない。



中世ヨーロッパの城郭(カルカソンヌの市城壁)に囲まれた都市

軍事上の面からも制約が多く、教会や寺院の前に門前町をつくるといった余裕や発想はなかったと思われる。

(デビット・マコーレイ『キャッスル』岩波書店から作成)

この理由を考えるに、中世ヨーロッパでは都市が城壁に囲まれるという特殊性が考えられる。外敵から領土を守る目的に造られた城壁は、その内側の限られた空間を高度に利用せざるを得ず、望む場所に望む街区を造るわけにはゆかなかったはずである。結果的に教会などの周囲を取り巻くような形態になったと思われる。

日本独特の門前町だが、城下町に関する文献は多く見うけられても、門前町に関するものはごく少ない。また、門前町を形成する区域の規模が城下町などに比べて比較的小規模であることや、計画的に造られているものが少ないなどという歴史的背景からか、都市計画の範疇で取り上げられることもきわめて少ない。

これなど門前町が意図的につくられたものというより、人の心が求めるものが昇華して自然発生的に出来てきたものであることが大きな要因であると考えられる。

一方、学術的な面からの門前町の定義について調べて見ると、先にも述べたとおり、わずかな文献しかない。そんな中でも参考になると思われる藤本利治著『門前町』¹⁾を整理すれば次のようになる。

宗教上の社寺の門前にある集落を門前町と考え、大きく分類すれば、社寺に参詣に来た人たち、いわゆる外来参詣者を対象として成り立つ集落と、社寺に関係する者たちで成り立つ集落に分かれる。

また、前者の外来参詣者を対象とするものは、神社前にある鳥居前町、宮前町といわれているものと、寺院前にある寺町、寺前町、巡礼町などに分かれる。

後者の社寺関係者によるものは、さらに社家町と寺内町に分けられる。社家町をさらに分けるなら御師町、巫女町となり、寺内町は里坊、僧坊町、宿坊町、宿院町などに分けられる。

社家町の社家とは、一口で言えば世襲神職の家ということになる。熱田神宮の社家すなわち「熱田社家」は、もともと尾張の地方に古くから住みついていた尾張氏のうち熱田神宮を守ってきた者たちである。そもそも宮簀媛命が創建した氷上姉子神社(熱田の元宮、緑区大高町)が、後に蓬萊の地に移り熱田神宮となってからも神職として仕えてきた者たちのことである。その後、これに天武天皇の時代に朝廷から遣わされた熱田七姓が融合して、明治の初め頃まで熱田社家として熱田神宮を守り続けてきた。

社家の多くは、御師となって全国に檀師(仏教でいう檀家、檀那のこと)を持ってお札を配布したり、参詣者を案内したりしていた。なお、「御師」は一般的に「おんし」と読むが、熱田神宮では独特の呼び方で「おし」と呼んでいた。このように熱田社家は、長い歴史を持っていた。現在も旧熱田社家すなわち熱田社家の後裔は「熱田神宮朱鳥会」という崇敬団体の一つとして活動を続けており、全国的にも珍しい。

また、寺内町とは、ほとんど浄土真宗(中世は、一向宗といった)の寺を中心にして出来た町で、町域の周囲に環濠を廻らせて防御された自治都市としたところが多く、石山本願寺をはじめとして畿内にその例を多く見ることができる。

以上を総合的に勘案すれば、かつての熱田神宮門前町の形態は、宿場町、港町、社家町・御

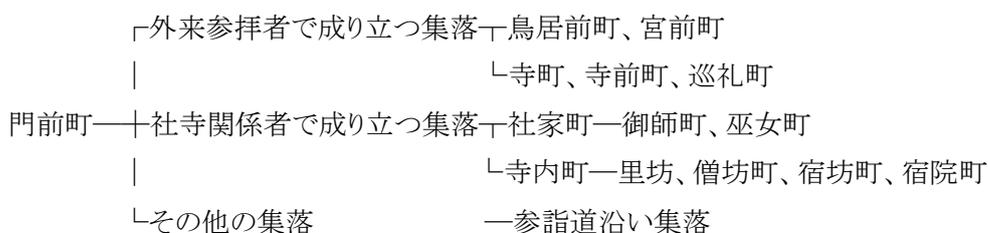
師町といったものが、その時の時代に応じて幾つかが組み合わさった複合的な門前町だったと思われる。

なお、門前町の門前とはどこまでの範囲をいうのかということについては、川村善之著『日本の町並み集落 1300』²⁾が参考になる。

宗教上、参詣のためにできた街道があり、その街道沿いにできた集落も大きな意味では門前町の範疇と考えてもよいとして、その他の集落に分類している。

その例としては、伊勢街道、熊野街道、金比羅街道などがある。これらは、それぞれ伊勢神宮、熊野三山(本宮・速玉・那智の三社)、金刀比羅宮へ参詣するための街道である。それらの具体的町並みは、伊勢街道沿いでは亀山市西町、津市上浜町、伊賀市などが、熊野街道では、阪南市山中溪、海南市下津町、田辺市中屋敷町、田辺市中辺路町などが、金比羅街道沿いでは高松市、丸亀市藤元町、多度津町東浜、琴平町などがある。

門前町の分類



(藤本利治著『門前町』、川村善之著『日本の町並み集落 1300』を参考にして作成)

これらの様々に定義される門前町は、それが形作られる過程において、色々な要因が作用して来た結果である。それらの要因には信仰、経済、政治、観光、後援者がいたなど色々なものがある。

第3章 熱田神宮とその周辺の歴史

3-1 熱田神宮の祭神

熱田神宮は、古くから「五神さま」とか「熱田さん」とか親しみを持って呼ばれている。

熱田神宮の祭神は「熱田大神」といい、三種の神器のひとつ草薙神剣を御霊代とする天照大神である。これに相殿として祀る4座の祭神と合わせて5座からなるため「五神さま」と呼ばれるのである。それら相殿の神は、素盞鳴尊、日本武尊、宮實媛命、建稲種命である。

「天照大神」は、天を照らす至高至大の神格を有し、人々に慈しみの徳を授けられた神である。同時に日本国民の象徴である天皇の御祖神としても知られている。

「素盞鳴尊」は、天照大神の弟であり、高天原で乱暴を働いたために追放された。その後、出雲国簸の川におもむき、その上流にある船通山に住んでいた八岐大蛇を退治した。その折、尾から得られた「天叢雲剣」は際立って優れていたため天照大神に献上された。

「日本武尊」は、第12代景行天皇の皇子で、天皇から絶対の信頼を受け、弱冠16歳で熊襲退治を命ぜられ、それをみごと成し遂げて帰還した。

それが終わるやいなや、日本武尊は、またしても景行天皇から東国征伐を命じられた。尊は、伊勢神宮に参拝し、叔母の倭比売命（初代斎宮）へ父の厳しい命令を嘆き訴えた。倭比売命は、尊に「慎みて怠ることなかれ」という言葉とともに当時は伊勢神宮にあった天叢雲剣と燧袋を授けられた。



日本武尊草薙靈剣図・猪飼嘯谷画

(熱田神宮蔵)

その後、尊は、尾張国吾湯市の氷上の里（現在の緑区大高町）にあった尾張国造の乎止余命の館に立寄ってから、三河遠江を過ぎ駿河国に入った。駿河国の賊らは尊をいつわって野に誘い四方から火を放って焼殺そうとした。これに対し、尊は神剣で草を薙ぎ、燧石で向え火を焚

いて難を逃れた。このときから神剣は「草薙神剣」と呼ばれるようになった。

東国から帰った尊は宮簀媛命を妃とした。あるとき伊吹山の賊退治をしてから都に帰るために、これまでの戦勝の連続に気持ちが緩んだのか、妃に神剣を託して出かけた。

しかし、叔母の「慎みて怠ることなかれ」という言葉を軽んじた結果か、山中で山の神の毒気にあたり伊勢国能褒野^{のぼの}で亡くなり、尊の亡骸は白鳥となって飛び去った。その先は、大和国琴弾原^{ことひきのほら}や河内国旧市邑^{ふるいちむら}あるいは尾張国熱田区の白鳥などと伝えられており、それぞれに^{みささぎ}陵がある。

「宮簀媛命」は、尾張氏の長である乎止与命の娘であるとともに建稲種命の妹にもあたる。日本武尊が東国征伐の途次に立寄り大高の地で契りを結び、後に妃となった。



宮簀媛・勝田哲画

尾崎久弥『熱田神宮史料考』の挿画から転載

「建稲種命」は、宮簀媛命の兄にあたる。妹の宮簀媛命とともに農業を始めとする尾張地方の繁栄の基礎を築いた。日本武尊の東征征伐に従い、軍功を上げたが、駿河の沖で鳥を追って海に沈んで亡くなった。³⁾

3-2 熱田という地名

研究テーマの対象としている一帯の「熱田」という地名は、かつて「厚田」とも書かれていたことからよく肥えた土地を意味しているとも、また大きな楓の木に落雷して燃え上がり何日も燃え続けたために水田が熱くなったとも伝えられている。また、尾張の「お・「はり」という国名で「はり」は開墾や開拓を意味するとの説もある。平らな所を開拓したという天白区の平針や、高い所を開拓した名東区の高針などにも通じるもので、尾張の土地を開拓したとか、尾張族が開拓した所という意味になるのだろう。

開墾や干拓と関係するのが熱田神宮の祭神の1座である建稲種命である。名前が、稲を播き、五穀豊穰に努力した功績を称えたことから付けられたものなど一連の事柄が示す様に、古くから農耕の神として知られ崇められてきた。現在も続けられている熱田神宮の神事や祭典の中に世様^よ神事、封水世様^{だめし}神事、歩射^{ふうすい}世様^{よだめし}神事、歩射^{ほしや}神事、豊年祭、御田植祭は農耕と深い関係を示すものがあるというのも、それらを裏付けている。⁴⁾

3-3 熱田神宮に対する信仰

一方で、熱田の神は尾張地方だけのものではなく国民的信仰を集めてきたことでも知られている。それは祭神に日本国民統合の象徴としての天皇の祖神である天照大神を始め、建国の初期に大きな役割を果たしてきた日本武尊を祀っていることや三種の神器のひとつである草薙神剣を安置していることから明らかである。

神社を格付けして云々することは、現在においては余り意味がないかも知れないが、ひとつの指標であり、信仰の対象としての神社の歴史を知る上では重要である。

熱田神宮の社は、康保4年(967)に施行された延喜式で、「^{じんみょうちょう}神名帳」に示された「^{みょうじんたいしゃ}名神大社」に並ぶ。これは、本宮の熱田神社を始め、同じ境内にある日割御子神社、孫若御子神社、高座結御子神社の4社、「小社」には上知我麻神社、下知我麻神社、御田神社、八剣宮、氷上姉子神社、^{あおぶすま}青衾神社の6社で、ともに国司の祭る神社とされていた。これは尾張国にあった官社 121 座のうち8座が名神大社であったが、愛智郡に限れば、その半数の 17 座の大社・小社のうち 10 座が熱田神宮関係の神社が占めていたことになる。

また、摂末社についても「尾張国神名帳」、「熱田講式」、「粟田文書」によれば、素盞雄名神、今彦名神、乙子名神、氷上名神、日長名神、水向天神、東西の八百万神など 12 社が並んでいた。

近代になって、明治元年(1868)6月に熱田神社に神宮の号が宣下せられ「熱田神宮」と社号が改められた。また、同4年(1871)5月には全国 29 社の官幣大社のひとつに並べられた。同 14 年(1881)5月、熱田神宮と出雲大社の2社だけに宮司以外に権宮司を置く制度が設けられた。同 23 年(1890)と同 35 年(1902)の職制の定めにおいては、伊勢の神宮以外にはない^{くじょう}宮掌と^{えじ}衛士が置かれ、待遇上でも、次第に伊勢に次ぐ神社であることが実現されて行った。続いて大正6年(1917)2月1日に勅祭社に定められた。⁴⁾

このような熱田神宮であるが、来る、平成 25 年(2013)には創祀 1900 年を迎えるというから、その歴史は古く『記紀』の時代にまで遡る。

3-4 熱田神宮の歴史

(1) 創成期

宮簀媛命は、日本武尊から託された神剣を守るために^{ひかみむら}氷上邑(尾張氏の本拠地・現在の名古屋市緑区大高町火上山)に熱田神宮の元宮となる氷上姉子神社を創建した。

その後、年齢を重ねてきたことを憂えた宮簀媛命は、神剣を末永く祀るにふさわしい地を尾張一族に諮り、大化3年(647)、かねてから尾張氏の斎場であった蓬萊の地(現在の名古屋市熱田区神宮一丁目)に移され、名称も改められた(「熱田神宮」が正式とされたのは明治元年)。

宮簀媛命は尾張国造乎止世命の娘であったことから、この地方に土着して勢力を持っていた尾張氏一族は、神主や^{はふり}祝などといった神職を司り幾世代もこの神社を守り続けたのだった。

(2) 大事発生

天智天皇の7年(668)に、新羅の沙門道行が^{どうぎょう}草薙神剣を盗むことを図ったが、事無くして終

わるという驚天動地の大事があった。このことがあってから、神劍は宮中に留められ、宮城の鎮護とされた。

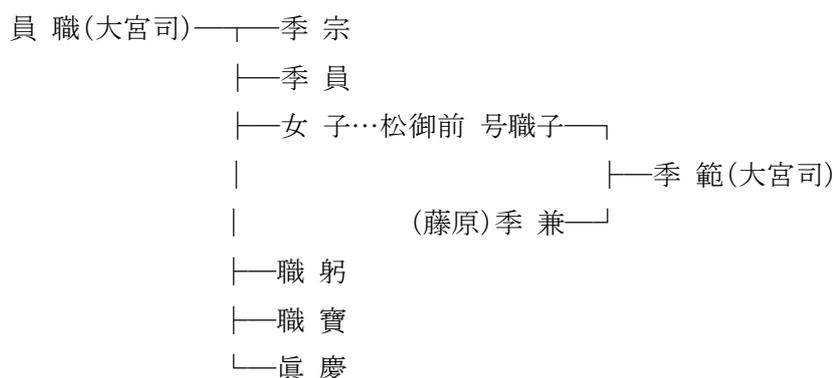
およそ19年後の天武天皇の14年(686)に天皇が病に倒れたことから^{うらな}卜いを行うと神劍を熱田から取り上げた崇りだと判明した。天皇は、即日、神劍を熱田神宮へ還座(返却)されるとともに、改元して^{あかみとりはじめのとし}朱鳥元年と改めた。このとき神劍が「都を離れ熱田に幸すれど永く皇居を鎮め守らん」という神約があったといわれている。

命を帯び、時の都^{あすかきよみはらのみや}飛鳥浄御原宮から神劍を捧持してきた7名は、そのまま社守として熱田の地に残り、創建以来からの尾張氏一族と融合して社家となった。後に「熱田七姓」と呼ばれるようになった家々である。

(3) 第二の大事

代々熱田に奉仕する尾張氏に、平安時代の中期になって変化が現れてきた。それは、白河天皇(1072~1086)の頃である。そして上古以来続いてきた尾張氏による熱田神宮の大宮司職が田島家から藤原家が変わった。当時、大宮司だった尾張員職^{かづもと}の娘松が、藤原季兼^{すえかね}(藤原南家の系統)と結婚し^{すえのり}季範を生んだ。この季範が外祖父である員職の跡を継いだのである。

千秋家略系図



(付箋)「この季範より、尾張姓を改めて、藤原姓となれり、これは大神宮の神詠の告なり、桜花ちりなんのちの形見には松にかかれる藤を頼まん、とある神詠なり、…」⁵⁾

古文書の付箋によれば、神託があったとか、姻戚の関係だったからとされている。しかし、地方の絶対的権力を有していた豪族の尾張氏が政治的な圧力に押されたという事実は、熱田神宮やその周辺に住む者にとっては大きな変革だった。

藤原家は、後に千秋家と名乗り、明治まで大宮司家を継いだ。

(4) 武将の時代

建武2年(1335)12月25日、足利尊氏^{あしかがたかうじ}が熱田神宮へ戦勝祈願に訪れた。当神宮に残された書状の日付と署名から、尊氏が官軍にはむかい数十万の大軍を引き連れて鎌倉から京へのぼる途中のことと思われる。

ここで注目すべきことは、書状の宛先が^{ごんぐうじ}権宮司となっていたことである。なぜ、大宮司宛とせ

ず、大宮司に次ぐ権宮司に宛てたのか。それは当時の大宮司であった摂津守昌能^{まさよし}が武将の一人として尊氏を追討する官軍に従事していたのだから、当然のことであった。

また、季範の娘、由良御前は、在京の折に源義朝^{みなもとのよしとも}と結ばれ、実家である熱田大宮司家で頼朝^{よりとも}を生んだ。これは源頼朝にとって熱田神宮は外祖父の神社ということになり、敬神の篤い頼朝が鎌倉に幕府を開いたとき鶴岡八幡宮の境内に熱田社^{かんじょう}を勧請し祀ったということも頷ける。なお、義経が熱田神宮で元服したという説もある(『義経記』、『尾張名所図会』)。



頼朝生誕の地誓願寺

熱田神宮の西に道路を挟んで位置している。

この辺りの詳細は、南北朝時代の戦乱を綴った『太平記』にゆずるとして、もう少し調べて見れば、大宮司の武将としての活躍はまだあった。

大宮司季忠^{すえただ}は、永禄3年(1560)5月、信長に従って桶狭間の戦に参加し、その前哨戦で戦死している。この戦いで信長は、足利尊氏と同様、出陣に先立って熱田神宮に戦勝祈願を行っている。大勝の後、そのお礼として築地塀^{ついで}を奉納したのが現在も境内に残る信長塀としてよく知られている。



信長塀

織田信長が桶狭間の合戦を前に熱田神宮に戦勝祈願をした結果、勝利したことから寄進したものといわれている。

尾張国中村の出身である豊臣秀吉も当神宮との関わりが深い。秀吉は、天正18年(1590)に

熱田町に伝馬を出すことや喧嘩口論を禁じるなどの禁制を発令している。天正 19 年(1591)には秀吉の母が参拝し初穂料が奉納されている。また、文禄2年(1593)には社殿の造営を命じ、さらに慶長3年(1598)5月、秀吉が病気となった際には平癒の祈願も行っている。

徳川家康は、幼年期に人質として熱田の豪族加藤氏の屋敷に幽閉され、大宮司の庇護を受けている。その家康は、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利し天下を掌握したその年に、熱田神宮の境内整備や社殿の造影・修復を命じている。その造営の中でも特筆すべきは、鎮皇門^{ちんこうもん}を家臣の加藤清正に建てさせていることである。また、熱田社家の田島家や馬場家は信長、家康の御師^{おし}として毎年恒例の祓えを行った事実も、受け取った礼状が両家に残されていることで知られている。^{4)、6)}

(5) 荒廃する社殿

長い戦乱の時代を過ぎて平和が続く時代になると、熱田神宮を崇敬する武将も少なくなり、社頭は荒れるにまかせるようになって来た。境内とは裏腹に、目の前の宿場町は大いに賑わっていた。だが「伊勢のちよい参り」という言葉があったと同様に、ここ熱田においても、遊女らにうつつを抜かす旅人が落とす賽銭は、社殿修理費の足しには及ばなかった。

事態を憂える社家だったが、もともと社家は、わずかな神領田からの禄米だけでは食べてゆくにも十分でなく、御師として全国を行脚して御札を配布しながら禄を食んでいたのだから、社頭が荒れても手を出せる状態ではなかった。

熱田の社家らが窮状を訴えても、当時の尾張藩にはそれに応えるだけの財力がなく、徳川幕府からも現状維持が基本方針という消極的な回答しか返ってこなかった。社家の言い伝えによれば、幕府への陳情に出掛けても旅費を支弁できず、帰るに帰れず江戸で年を越した者もいたという。⁷⁾しかし、およそ 50 年にわたる飽くなき悲願はついに届き、五代将軍綱吉になってそれは達成された。この貞享2年(1686)に行われた大規模な遷宮は、明治 26 年(1872)の社殿改造まで続く 11 回の修復の基礎となった。

(6) 港町・宮の宿

江戸時代初頭の、慶長 6 年(1601)、熱田の地に東海道五十三次の宿場が制定された。これが制定された裏には、徳川家康が関ヶ原の戦いに勝った後も天下統一のために全国の街道整備の一環として、東海道に駅伝制度を設けるとするのが大きな理由であった。

五十三次の中で唯一海路を持つ宿場が「宮」と「桑名」間である。その「宮」はもともと美濃街道、木曾街道、佐屋街道あるいは中山道へ通じる街道などの要所であるとともに、尾張藩の表口であったため、極めて重要な宿場でもあった。

東から延びてきた東海道は、正面に源太夫社のある丁字路で右に曲がれば熱田神宮の正門、左へ曲がれば「宮の渡し(「七里の渡し」ともいわれていた)」であった。この正面にあった源太夫社は昭和 24 年(1949)12 月に正参道入口東側に移動したが、これは初えびすで有名な熱田神宮摂社のひとつ上知我麻神社のことである。左に曲がって海岸まで出ると目の前が熱田港であった。いわゆる港町としての「宮の渡し」であり、同時に宿場町「宮」でもあった。

東海道沿いには、東から築出^{つくだし}・伝馬町^{ごうど}・神戸町と続き、多くの店や旅籠屋が賑やかな町並み

を形成していた。その中でも有名なのが鶏飯屋である。最初、ある店で鶏飯に蜆汁を付けて出したら当たったことから、その店にならい次々と鶏飯屋が出来ていった。鶏飯といっても鶏肉が入っていたわけではなく、唐^{もろこし} 黍^(とうきび) で色をつけたものだったというから質実な気風の名古屋らしい。

鶏飯屋の女中の中には遊女も兼ねる者も多く出てきた。その中でお亀という女中が評判となり、女中の代名詞がお亀となった程である。そんなお亀と遊ぶ男を揶揄して都都逸^{とといつ}が生まれた。宮の宿は都都逸発祥の地でもある。



宮 熱田港・米年画

版画の「宮 熱田港」には「しゃちほこを まずあおぎ見ん わたつみの 宮の鯛屋に 案内 たのみて 米年 作」という戯唄が付いている。「熱田の宮のお参りはすませた。これから舟に乗るまでの貴重な時間をどうやって過ごそうか」と思案している旅人を思い浮かべて頂きたい。「遊女のいる店も知っているが、真っ先に飛び込むには気が引ける。そうだ、尾張名古屋はシャチ見物からだ。案内はあの鯛屋のお亀に頼めば…」⁸⁾

歌からはこんな旅人の独り言が想像される。こんな歌が読まれる時代であり、町並みだった。

(7) 伊勢神宮に次ぐ神宮へ

改めていうまでもなく、熱田神宮は三種神器^{さんしゆのじんぎ}のひとつである草薙神剣を奉斎している。

この歴史的な背景により、幕末における国情騒然たる中であつたが、孝明天皇（1846～1866）が神器奉斎の社である伊勢と熱田の両宮に国体安穩、天下泰平の祈願の要旨を出している。また、明治元年（1868）の王政復古に際し、6月に明治天皇が両宮へ勅使を遣わせて奉告している。

これらのことから当時の宮司であつた角田忠行は、熱田神宮は神器奉斎の社に相応しい形態でなければならぬと確固たる信念を抱くようになった。

『角田忠行翁小伝』⁹⁾には、<当時の熱田神宮の社殿は尾張造という地方的な社殿形式で、忠行からすれば伊勢の神宮に次ぐ神社としてはあまりにも貧相に思えたらしい。これは千秋季福も同様であつたようで、社殿形式も待遇も神宮に準ずるように太政大臣に建白している>と。

<そこで忠行は、明治 23 年に予定している熱田神宮の遷宮に際して、その御用材は伊勢の

神宮同様に木曾の官有林を使用することを願い出、さらに御下賜金をも願い出ている。政府も、この熱田神宮遷宮を重視し、伊勢の神宮の遷宮に要する御用材の共用を認めた。

その結果はくきわめて異例の措置というべきであるが、木曾の官有林から熱田神宮の遷宮のための御用材が伐採された」とある。

現在の熱田神宮が、何かにつけて伊勢神宮と同等にという考え方に則っているのは、この時から始まったのではないかと思われる。

(8) 第三の大事

明治元年(1868)の太政官達による廃仏毀釈に続き、明治4年(1870)の太政官布告で「神社は国家の宗祀にして一人一家の私有でなく、中古以来の神官、社家のもの世襲にて家禄となしていたが、御政体の改新で祭政も改正、伊勢両神宮を始め、世襲の神官を始め、全ての社家にいたるまで、今までの制をやめ、神官、神職は政府の官吏と同様に、適任者を選びて任用する」と⁷⁾旨が告げられた。翌、明治5年(1871)6月には教部省から世襲姓度の廃止の旨とともに、熱田大宮司始め社家の全ての名を連ねた書状が巻物にされて送られてきた。社家制度の終焉だった。

当時180家ほどあった社家は、従来どおり熱田神宮の神職として残った者もわずかにいたが、ほとんどが住み慣れた境内地を出て、新たな職を求めて各地に離散して行った。

(9) 戦後

戦後は、名古屋はもちろんのこと、日本全国が疲弊していた。そんな中であって熱田神宮でも荒廃した境内の復興を始めたものの、昭和20年(1945)12月にGHQ(連合国軍総司令部)が日本政府に発した神道指令によって復興事業は滞った。

これというのも、神道指令の内容が、国家神道の禁止とともに政教分離の徹底的な実施を命じたものだったからで、この影響が今日においても続いているのだから、当時は復興事業の組織をどこまで政教分離すればよいのかなどといったことなど、すべてが大変だったことは想像に難くない。

昭和24年(1949)5月に発足した熱田神宮造営会は、昭和26年(1951)の講和条約の発効を契機に本格的な造営計画をたて復興事業を再開した。参詣者休憩所、西門鳥居などが整備され、それと同じ時期、名古屋市都市計画局からの要請を受けて摂社上知我麻神社を始め旧宮庁、白鳥職員宿舎、大津町線石垣の移転などが行われた。

これらの大事業は、昭和30年の遷座で頂点に達した。かねて戦災で傷んでいた本殿の用材として、伊勢神宮の古殿がそのまま譲渡できることが昭和29年(1954)5月に正式に認められた。これは、熱田神宮が世間においても伊勢神宮に次ぐものであることが広く認められた大きな出来事だった。

一方、空襲を受けた名古屋の市街地には住宅が極端に少なく、名古屋市の住宅政策のひとつである簡易住宅(市営住宅)の建造は急ピッチで進められていた。ところが住宅を建てるための用地が不足する中、熱田神宮境内地の空間は市の担当者にとっては魅力的だった。それが、さびれた境内に何か活気が欲しいと願っていた熱田神宮の考えと一致した。その結果、昭和22

年(1947)9月、住宅部分は名古屋市が、店舗となる増築部分は熱田神宮奉賛会がと分担し合って14戸の住宅が境内地に造られることとなった。

たかだか14戸(約2,300㎡)の簡易住宅であったが、そこにはいまでも有名なきよめ餅や蓬萊軒を含む商店が並んでいた。当然のように参拝者の流れはこの小さな商店街の狭い通路を通るようになった。また、年々増え続けた初詣によって混乱する人々の流れをさぼくためにも、この商店街の間を抜け、東門から本殿へ向う一方通行が当たり前となった。

豊かな時代となり、熱田神宮へ訪れる人が多くなるにつれ、この市営住宅の建つ一画は、あたかも門前町であるかのような景観を呈するようになってきた。

世相の安定と住宅の老朽化から、市は昭和34年に市営住宅としての用途を廃止した。ところが、そこで生活や商売を始めた人達にとっては、世間が安定してきたからといっても立ち退くことは容易でなかった。店舗部分は市と関係がないこともあって、市は店主らを追い出すわけにもゆかず、事実上の占有状態が続き商店はその後もそのまま居続けた。



熱田神宮境内にあった簡易住宅(昭和28年撮影)

道路の向こうが境内で、こちら側には名鉄神宮前駅がある。

中日新聞社発行『昭和の名古屋・平成の名古屋』(平成17年10月1日)から。

熱田神宮は「復興住宅としての使命は終わり、境内の景観を損なうし、東門から観光バスが入れず、参拝客に支障をきたしている」などを理由に名古屋市に土地の明け渡しを求めたが、ことは簡単ではなかった。店主らは「終戦でさびれていた熱田さんを復興させようという神宮奉賛会の誘いに応じ開業したのに、いまになって立ち退けといわれても」と譲らなかつた。混乱期にあつて境内地に市営住宅を建てるにあつての契約書らしいものが何も残されていなかったことも一因だった。結局、昭和49年(1974)7月、熱田神宮が建築主の名古屋市と入居者の店主ら21人を相手に裁判を起こすまでになってしまった。

思い返せば、名古屋市としては「雨露をしのげる家」を1軒でも多くとを考えていたことでもあり、熱田神宮側も神職の生活を守ることもままならない混乱の中にあつて、お互いがそれほど深く考える間もないできごとだったに違いない。

解決までに11年半という長い年数を要したが、最終的に「店主らは昭和71年(=平成8年)

までに立ち退く」、「入居時の保証金 1 万円を返すとの趣旨で熱田神宮が百万円を払う」ことなどで熱田神宮と居住者側との和解が成立した。

また、熱田神宮と名古屋市は法廷外で別途の協議を行った結果、熱田神宮の市に対する請求はすべて取り下げることとなり、この一時的に門前町を呈したミニ門前町は境内から消えた。

10)

なお、平成7年(1995)5月に㈱ゼンリンから発行された住宅地図には、未だ立退きの済んでいない蓬萊軒、きよめ餅、おでん屋貝孫、飴音本舗、ミヤ美容室、出口商店、片倉健太郎、岩田商店と8戸が掲載されていた。

第4章 熱田神宮の門前町考

4-1 熱田の場合

熱田神宮とその周辺の歴史からみて、かつての熱田神宮の門前町は、どのような位置づけであったかを考察してみる。

最初に考えられるのは、かつて東海道五十三次の宿場町が熱田神宮と非常に接近していたことから、宮の渡し前に発達した賑やかな港町が熱田神宮のすぐ門前にあったことになる。また、東海道を東から来た旅人は、現在は新堀川となっている精進川で禊を行い熱田神宮に詣でたといわれている。その精進川を越えた辺りから宮の渡しまで飯屋や旅籠屋が多くの軒を並べていたから、これが門前町といえる形態だったかも知れない。

これら港町の賑わいや旧東海道沿いの飯屋や旅籠屋が門前町だったといえる確たる根拠は見当たらない。熱田神宮の中に熱田文庫があるので門前町に関する文献はないかとたずねたが、関係者は「門前町は熱田神宮の境内から外の問題であって、関係する文献は見当たらない」という。

尾崎久弥著『熱田神宮史料考』¹¹⁾の中にある「熱田宿発達史」の項をみると幾つかの参考となる記述が見える。それらの引用部分を箇条書きで示しておく。

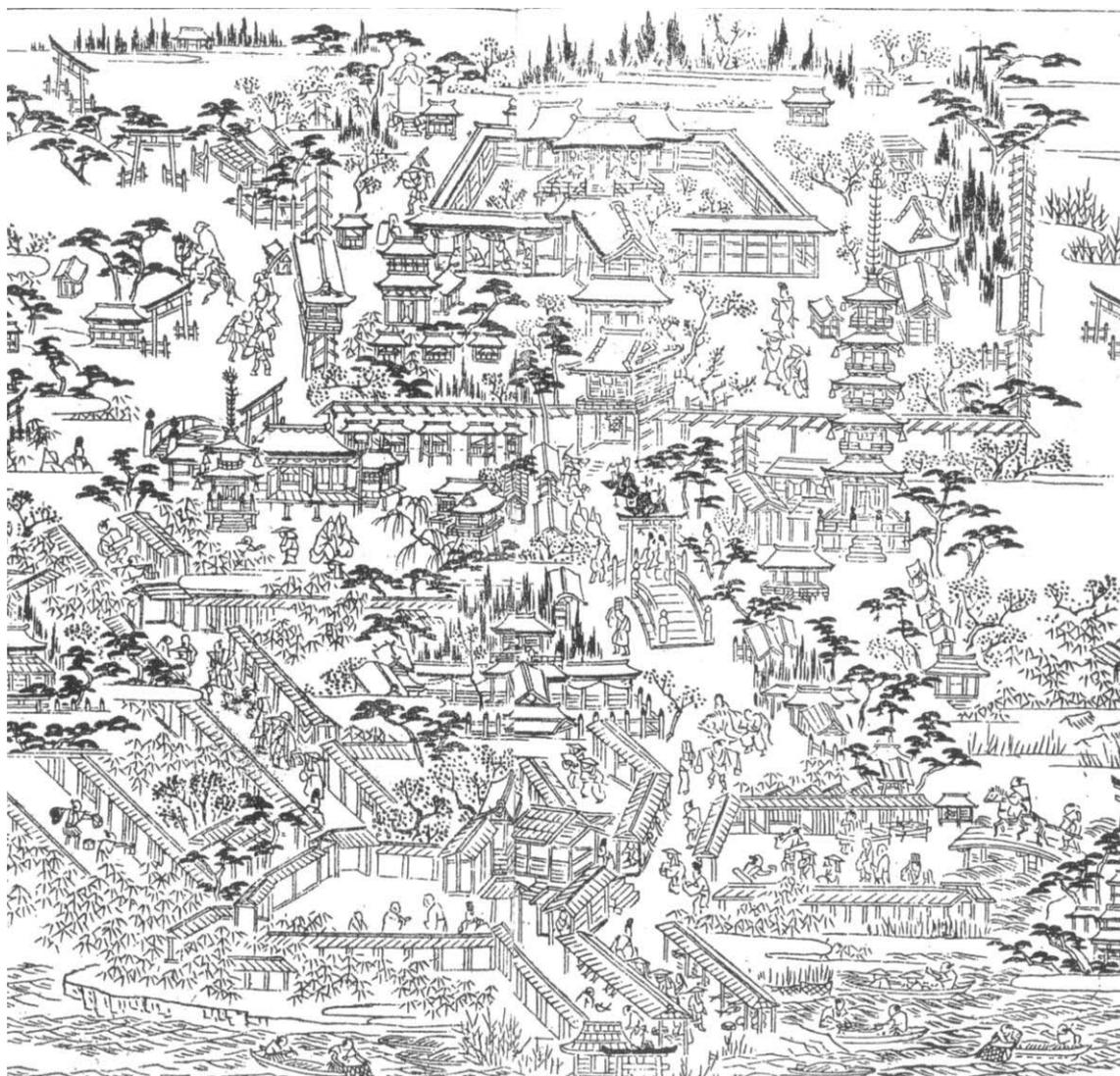
- ・ 室町時代末までは、熱田は宿駅としての存在は無かったと見、但し熱田神宮みますお蔭を以て、武将はじめ必ず立ち寄った。
- ・ 熱田の伝馬町の古名に、「宿」なる名が伝えられりとの説である。…所詮間の宿の如きもので、単に旅人の休憩に當つ、駅馬又は宿泊の十分なる設備は、未だ無かったと見るのである。それは、往古、交通が頻繁ならざりし事と、特に熱田の存在が、熱田の宮の為のものであった、その為道に迂回するも苦しなかつたので、根元は宿駅としての存在ではない。
- ・ 然し熱田の勃興は、江戸時代初期を以て最も目覚ましとすべきである。その後間もなき慶長15年16年に互る名古屋築城開府の事があり、此の大工事のためにする海路運送の到着地として、熱田は、雑踏を極めた事は想像に難くない。
- ・ 神戸が今日の形態を為した最初は、江戸時代初期既に然りといふべきであろう。上知我麻神社より南方に、上神戸町と神戸町とあり、神戸町の西側宝勝院より南には、御殿・会所・番所などが並んだ。その北には、上神戸町まで旅籠屋が並んでゐたろう。

海岸大瀬子浦の北側、即ち海に正面して、旅籠の一区画を為した。こゝは後に築地といはれ、文化年間以後は、殷賑を極めた。当時神戸に興った遊女をこゝに招く事を許され、遊興の拍手、弦歌の声絶ゆることがなかつた。一九の作にもある鍵屋、へうたんや、銭屋などは、こゝにあったものであらう。

また、『新修 名古屋市史』第二巻¹²⁾では、熱田の周辺について次のように述べている。

- ・ 「享祿古図」として知られる「熱田社参詣曼荼羅図」をみると、上半分に熱田社本宮、摂社や神宮寺の南に、家並みのつらなる町場の光景が描かれている。江戸時代中期の熱田絵図と比べてみると、下馬橋の南は、文字どおりの門前で、熱田社に仕える神職、社僧の住

む社家の町御所前であるが、「亨禄古図」では明確ではない。



「亨禄古図」 (『尾張名所図会』から転載)

この古図には、神仏習合の時代を反映して、神宮寺の多宝塔(左)や五重塔(右)が描かれている。
また、パワースポットの言い伝えの根拠となった楊貴妃の供養墓も本殿の裏(左上)に見られる。

その南八剣宮から源大夫社(上知我麻神社)にかけての南北の通りは市場、それより南に続く通りは神戸で、その先はもう海浜である。「亨禄古図」右端の精進川にかかる裁断橋から源大夫社にかけての東西の通りは宿、今道に当ろう。画面左側に斜めに並行して走る通りは、少しわかりにくいですが、中瀬(中瀬子)と須賀ではなかろうか。往来する人々が賑やかな通りの両側に家並みがつらなり、繁栄した町の姿が描かれている。

- ・ 熱田の町は熱田社の門前町として始まったと思われるが、その商工機能の核として町の発展にかかわっていたのが熱田の市である。(中略)

江戸時代中期成立と思われる「熱田曲輪図」をみると、源大夫社の南、「上神戸町」の通りに、南北に細長い区画が2カ所描かれ、どちらも「中座^{なかざ}」と記されている。位置からみても、これが『熱田町旧記』の「中座」であり、魚店の集まる市の施設であった。この場合の「座」は、中世の商工業者組織を指すのではなく、商工売買の場所を意味し、通りの中に設けられたので「中座」と呼ばれたのであろう。

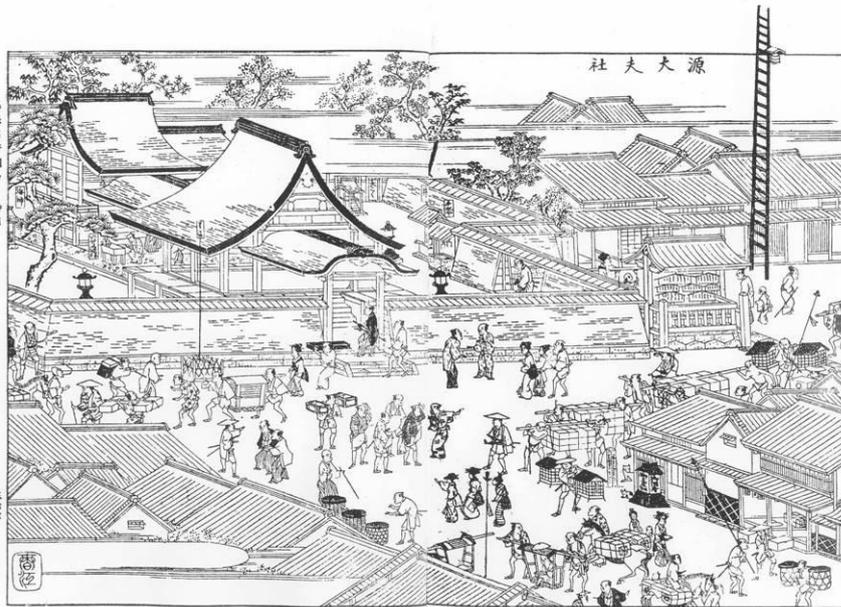
- ・『名古屋市要』によれば、元禄以前の人口として、熱田町では家数 1,798、人数 8,734、三ゲの浦では、家数 736、人数 3,763、社人の家数は、232 で人数 1,101 人、社人支配町の家数は、106 で人数 402、合せて家数 2,872、人数 13,999(男 7,518、女 6,481)であったという。

さらに近世の熱田界限について『大正・昭和 名古屋市史』巻 9¹³⁾には、名古屋市の代表的な7商店街についての記述があり、その中で広小路、大須、円頓寺に次ぐ4番目が熱田伝馬町となっている。さらに、その熱田伝馬町の状況についても述べられている。

- ・熱田の宿場は、鎌倉室町の時代から諸書に現れ、江戸時代には東海道五十三次の宮の宿として最盛期に達し、ことに桑名との宮渡の渡船場であったから泊まり客が多く、参観交代の際はすこぶる賑わった。熱田はまた神宮の門前町の色彩を持っていた。宿場は、渡船場から神戸町・伝馬町につづき、神戸町には本陣や上級の宿屋が建ち並び、宿場としての娯楽設備もあった。幕末の頃 124 戸のうち、遊女屋 35・29%、宿屋 30・24%、商家 20・16%、飲食店 10・9%という職業構成であったから、純宿場町の特性を持っていた。しかし、明治維新後は、さしも栄えた宮の宿も、封建制度崩壊と鉄道開通による結節点の移動とによって、宿場の生命を絶たれたが、伝馬町は、発展会を組織して熱田の中心盛り場として復活し、今日に至った。伝馬町の中心は 1、2 丁目で、昔宿屋・遊女屋が多かった関係上、客の範囲がかなり広く、沢上以南・築港・笠寺方面・知多郡の北部を含み、付近の工場地帯と郊外の農村を背後地とするところに強みがある。昔の宿場町神戸町・須賀町もまた、これに接続した商店街として復活した。

以上の 3 文献からの引用を要約すれば、『熱田神宮史料考』では、室町時代末までは熱田神宮に武将や旅人は必ず立ち寄っていた、旅人たちは熱田神宮へ行くのに道を迂回することを苦にしなかった、江戸時代になると名古屋城の築城や開府で熱田は雑踏をきわめたなどとなる。『新修 名古屋市史』では、享禄の時代いわゆる戦国時代の曼荼羅図には、下馬橋の南には神職や社僧の住む社家の町があった、中瀬町と須賀町と思われるあたりは往来する人々や賑やかな通りの両側に家並が連なって繁栄した町が描かれていた。『大正・昭和 名古屋市史』では、熱田伝馬町が名古屋市の代表的な7商店街の4番目に位置づけられ、鉄道の開通まで、熱田は門前町の色彩を持っていた。

以上のことと合せ、東海道の曲がり角には熱田神宮の摂社源太夫社(現在の土知我麻神社)があったことや、現在の熱田神宮正門から宮の渡しまでが 500 歩ほど、東海道の曲がり角までなら 150 歩ほどしか離れていないことを知れば、もはや熱田神宮には門前町、あるいは門前町に相当するまち並みがあったといえよう。



源太夫社

手前から源太夫社へ
伸びるのは、東海道。

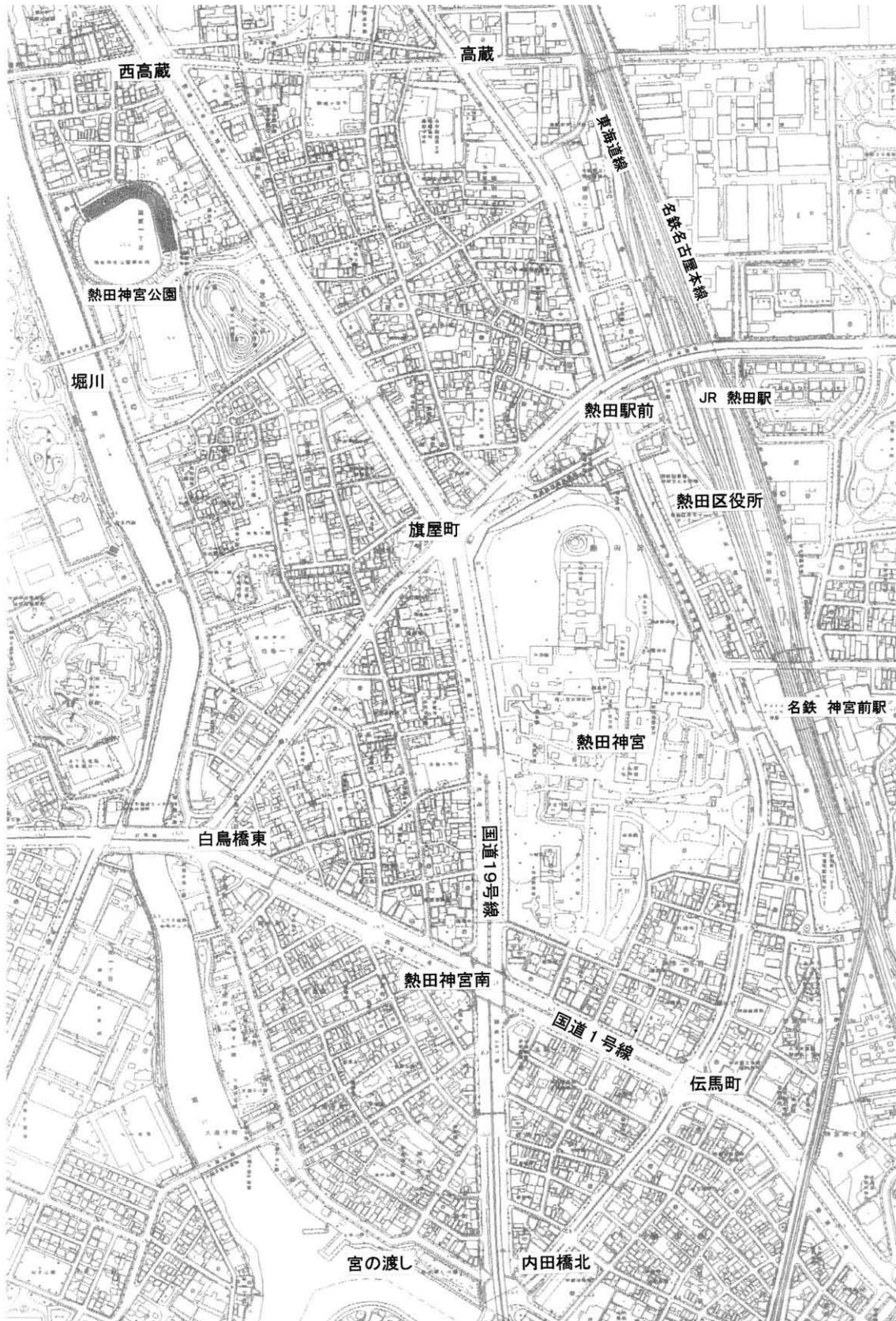
左へ曲がれば宮の渡
し。右へ曲がれば熱田
神宮。

『尾張名所図会』から
転載

『熱田神宮史料考』で旅人が熱田神宮に迂回することを苦にしなかったということだが、旅人が旅の安全を願って神社に詣でることは古今とも当たり前のことであった。「宮」は東海道の海路の宿場であるが、脇街道として陸路の佐屋路が寛永 11 年(1634)に開設されているから東海道だけの宿場でもなかった。佐屋路あるいは佐屋街道のルートは熱田から古渡に至り、そこから北西に行き津島付近を東西行する通称津島街道に入って西へ向い、日光川を渡って後に佐屋の方へ南下したものであった。¹⁴⁾熱田神宮の北西角に下知我麻神社というのがある。ここは広く、旅の安全をお守りする神様と知られているのもこれと関係があるのかも知れない。

また、熱田神宮をお参りしたのは街道を旅する者だけがではなかったはずで、当然、地元の人々のお参りでも賑わったに違いない。明治 27 年(1894)、堀川の洲崎橋から白鳥橋まで乗合船が就航し、船運賃が4銭だったと記録に残っている。¹⁵⁾この船着場の場所を考えれば、現在の市中心部から乗合船を利用して熱田参りなどをしたものと思われる。

さらに付け加えるならば、明治の頃(太政官布告)まで、熱田神宮の境内には社家の集落があった。その当時まで約 180 家あったという社家が住んでいた場所は、かつては熱田神宮の南一帯の広い面積を有していたようだが「大正 15 年度新版」とされる熱田神宮周辺の地図¹⁶⁾や「朱鳥たより」第 12 号¹⁷⁾の「社家の町並み」を見ると、熱田境内の清雪門の前(東)から秋葉山円通寺周辺となっている。



熱田神宮とその周辺地域

第5章 調査

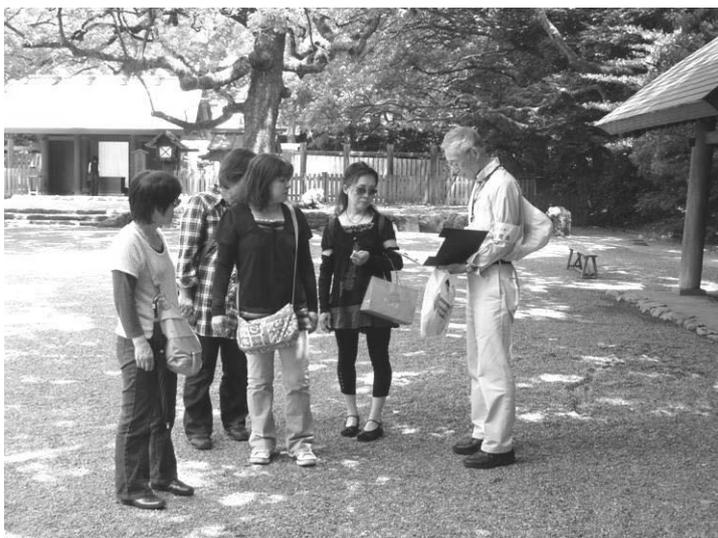
5-1 参拝者調査

参拝者に対する調査は、アンケート調査を実施した。これは、熱田神宮を訪れる人々の実態と門前町に対するニーズを知る目的で実施したものである。実施にあたっては、事前に熱田神宮総務部に境内使用の申請を行い、許可を得てから行った。

調査日時については、普遍的な結果が出るように平日・日曜、午前・午後などを取り混ぜて行うように心がけたが、研究員は、各々の都合から何時でもできるという訳でもなかった。しかし結果においては、概ね望んだような日時のデータを取得することができたと思っている。すなわち次に示すように平日2日、土・日が各1日の計4日間で、それぞれ午前・午後という結果だった。

調査日時は、6月2日(水)の午前9時から10時頃まで、4日(金)の午前10時から12時頃まで、5日(土)午後1時から3時30分頃まで、および6日(日)午後1時30分から2時30分頃までである。

なお、質問した内容(アンケート用紙)は、巻末の参考資料に掲載しておいた。



熱田神宮境内で参拝者へのアンケート調査を行っている様子



アンケート結果 集計表

		南 門	東 門	勅使門	西 門	計	割合(%)
件数(件)		29	21	31	11	92	
総数(人)		57	52	62	17	188	
住まい	市内	31	35	29	14	109	58
	県内	3	7	12	0	22	12
	県外	22	10	21	3	56	30
交通	自動車	11	28	11	0	50	26
	地下鉄	11	10	2	15	38	20
	観光バス	0	0	0	—	—	—
	市バス	1	4	8	0	13	7
	名鉄	1	0	13	0	14	7
	JR	15	2	18	1	36	19
	徒歩	0	8	2	1	11	6
	その他	10	0	20	2	32	16
目的	参拝	45	43	52	7	147	63
	観光等	7	24	0	3	34	15
	その他	0	22	21	9	52	22
年代	20歳未満	0	14	6	8	28	13
	20代	4	3	2	0	9	4
	30代	5	16	12	5	38	18
	40代	6	4	4	0	14	7
	50代	11	5	9	0	25	12
	60代	13	2	7	3	25	12
	70歳以上	13	8	21	27	69	34
来社	初めて	11	15	16	2	44	25
	複数回	37	37	46	15	135	75
予定	ない	10	23	19	0	52	30
	ある	30	29	43	17	119	70
行き先	買物	8	18	27	6	59	34
	食事等	19	9	17	0	45	26
	史跡等	2	0	0	44	46	26
	その他	6	10	4	5	25	14
印象	<p>緑が多い・森・自然・静か・壮大・明治神宮と比べてもよい森と思う・気持ちがいい・涼しい・心が引き締まる・落ち着ける・お参りすると心が安らぐ・立派・大きい・広い・素晴らしい・由緒のあるお宮・(遷座で)綺麗になった・賑わっている・木の中を歩くのが好き・昔からお参りに来なければと思っている</p> <p>休む場がない(少ない)・休憩所が閉じられたまま・参拝者への配慮が足りない・お高くとまっている・ベビーカーは辛い・情報がない(少ない)・観光らしさがない・参道の石が大きい・駅から近くて良い・駐車場が広い・参道にお店がない・外国人が多くなった・食べる所がない・池の水が汚い</p>						
要望	<p>情報をもっと欲しい(土俵入りの日時など)・情報の得られるところを知りたい・このままを残してほしい・自然を残して欲しい・参道が長いので要所にベンチのような簡単なものを設けて欲しい・門前町が欲しい(あればいい)・門前町があれば普段からくる・縁日をもっとあるといい・門前町は駅前にあるのでなくても良いのでは</p>						

・買い物のできる所がほしい・食事のできる所がほしい・今までどおりでいい・門前町は必要ないのではないか…・お参りだけで満足・車で来るので商店がなくてもよい・駐車場の増設(イベント時に不足)・龍神社の横にトイレがあるのは失礼・お守りを増やしてほしい(人が増え神域が荒れるから)

注:一印は、観光バスで来た人を削除したことを示す。

(1) アンケート集計

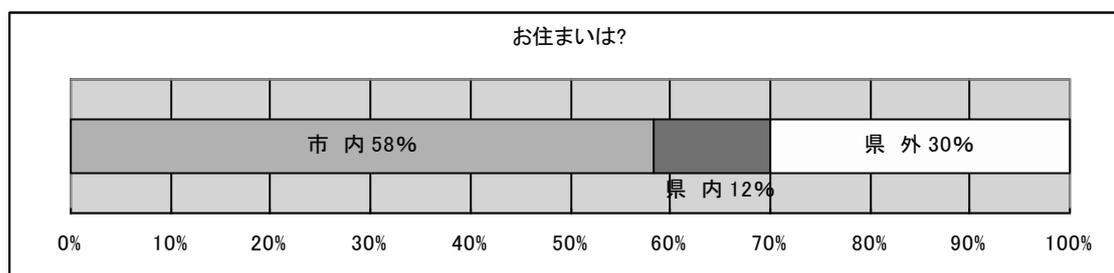
アンケートの集計について述べる前に明記しておくべきことがある。すなわち、熱田神宮の入口(門)は、現在4箇所ある。アンケート結果からそれぞれの門での件数及び総数に違いがあるが、調査に要した時間、調査に携わった人数、また調査日などから、入口の利用率を判断する指標にはなっていないことである。

これに関連していえば、南門での調査で分かったことだが、南門から入って来た人は皆無で、南門(正門)の脇にある上知我麻神社や八剣宮をお参りに来る人のすべてが参道の奥(北)から来ていた。聞いてみると、地下鉄の伝馬町駅や神宮西門駅で降り、遠回りして来ている人もいた。伝馬町駅で降りた人に、どうして南門から来なかったかと訊ねると「遠いから」とか「道がわからない」という。中には、地下鉄で野並方面から来ても、伝馬町駅を通り越して神宮西駅まで行き、西門を経由して南門まで来たという人もいた。

なお、観光バスで来た人の扱いについてどうするかであった。当初、バスガイドや運転手を通じて人数などを聞いていたが、個々人の意見を聞くのは困難であったことと単純に数が増えるだけになるため、あえて集計から外した。しかし、観光バスで来た人たちからは「熱田神宮には、お土産を買うお店はないのですか?」と聞かれ、なるほど観光バスで来た人は東門の方は知らないのだということに気がついた。

(2) 回答の分析

最初の「お住まいは?」という質問では、市内から来た人が 58 人と最も多かったが、県外から来る人も 30 人と県内の 12 人に比べ予想外に多かった。

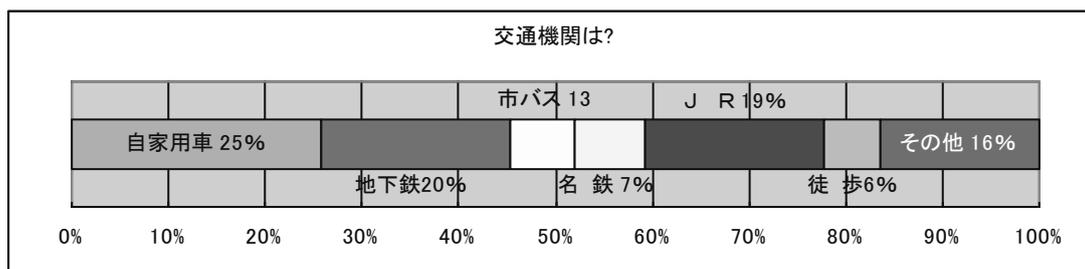


参拝者アンケート・居住地

この県外からの来訪者が多かったことから「全国に名の知れた熱田神宮といわれている」ことが裏付けられた。すなわち、わずかな期間の調査でも、県外からの参拝者、それも東海三県などという近場ばかりでなく、遠く離れた都道府県からの参拝者がいたことであり、さらにそれら遠隔地から来た人も「複数回来ている」という人が少なくなかったという印象である。

ちなみに県外からの人の内訳は、岡山県 15 人・東京都 11 人・三重県 7 人・埼玉県 5 人・北海道 3 人・滋賀県 3 人・栃木県 2 人・山梨県 2 人・神奈川県 2 人・福岡県 1 人・長野県 1 人・岐阜県 1 人・スペイン 2 人・韓国 1 人だった。

次に、熱田神宮に来た「交通機関は？」の質問では、先の観光バスで来た人を除けば、圧倒的に自家用車が 25 人と多く、次に、地下鉄の 20 人とJRの 19 人がほぼ同数で続くが、その他も 16 人と多かった。



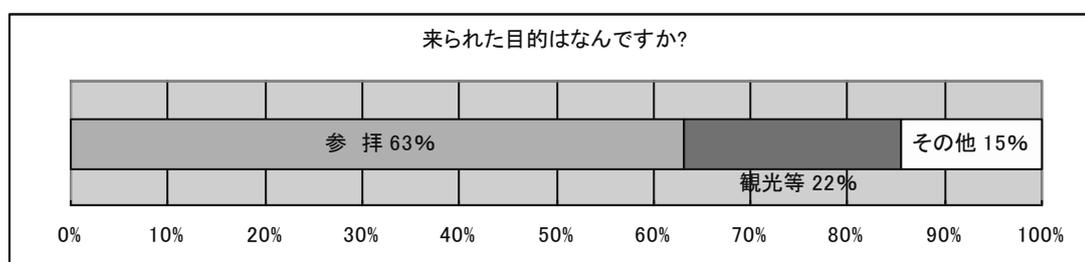
参拝者アンケート・来社手段

その他の内容は、自転車・タクシー・レンタカー・友人の車のついでに乗せてきてもらったなどであった。

市内など近場から来る人達の交通手段が圧倒的に自家用車であったことは、熱田神宮のひとつの特徴だろう。その理由には、車社会の時代だから当然ということもあるだろうが、駐車場が十分にあることが知られているのが大きな理由と思われる。遠隔地から車で来た人もいたが、事情を知らないそれらの人が「近くの有料駐車場に停めてきた」という回答が気になった。

JR・名鉄・地下鉄・市バスと公共交通機関が周囲にありながら、なおかつ自家用車で来る人が多いのは、車が便利だという理由とともに、やはり駐車場があるからにほかならない。地球環境汚染の見地から自家用車に乗るのを控えるようにいわれる時代に一考を要することである。

その次の熱田神宮に来た「目的は何ですか？」の質問では、参拝が第一の 63 人は当然だが、質問の目的が参拝以外の目的を聞いたことからいえば、観光や史跡巡りが 22 人と、その他の 15 人よりやや多かった。



参拝者アンケート・来社目的

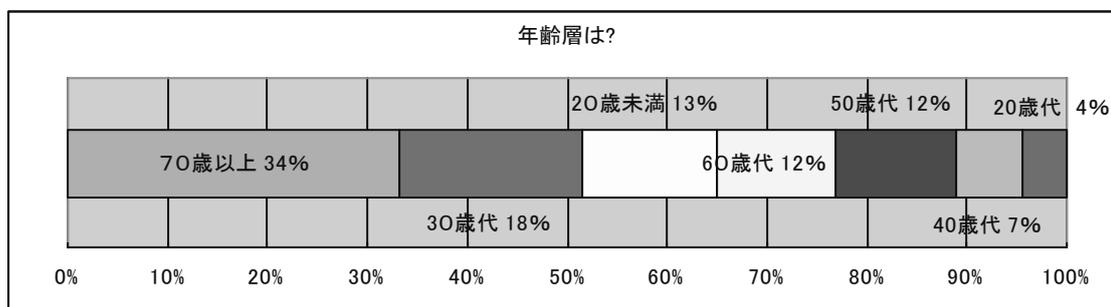
その他の内容は、学校の勉強で・通り抜けのために・パワースポットを訪ねて・熱田祭見物に、

などであった。

この質問から門前町に対するニーズが聞き出せないかと期待したものではあったが、「パワースポットを目当てにきた」という回答が2例もあったことは驚きだった。それも県外(栃木県)という遠方からの人もいたことにはさらに驚かされた。最近のブームとってしまえばそれまでだが、これが門前町の起爆剤にならないかとも考えた。

「年齢層は？」の質問では、70歳以上が34歳と最も多かったが、30歳代の18歳と20歳未満の13歳も案外多いことが分かった。

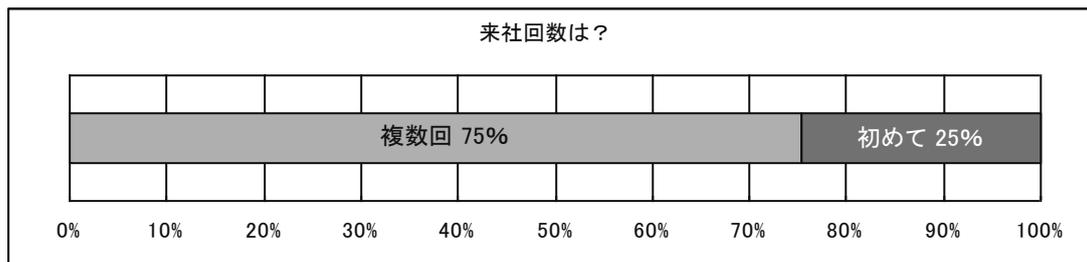
結果は、予想に近かったが、いずれにせよ最も少なかった20歳代の若い世代にもっと来てもらえたらよかったという思いは残った。



参拝者アンケート・年齢層

また、熱田神宮へ来たのは「何回目ですか？」との質問では、複数回が75歳と圧倒的に多く、初めてという回答には県外からの人が圧倒的に多かった。

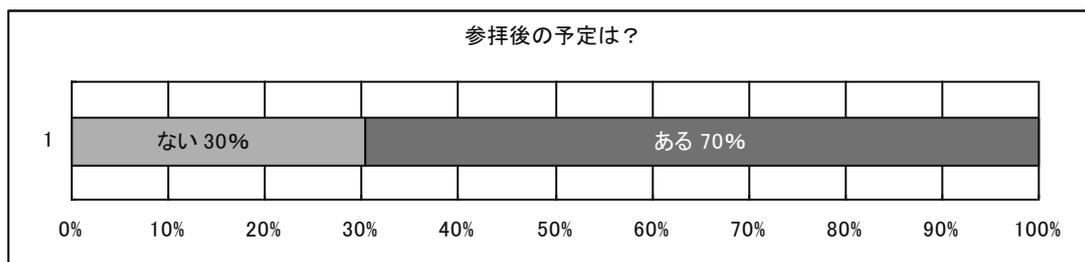
ただ、市内など近郊から来る人は、毎日とか週何回とか複数回が多いのは当然だが、県外から来た人の中でも複数回という回答がかなりあったのは意外だった。



参拝者アンケート・来社回数

次の質問で「お参りの後で、どこかへ行く予定がありますか？」という問いに対しては、「ある」との回答が70歳と圧倒的に多く、お参りに来たついでにどこかへ行くとか、あるいはどこかへ行く途中でお参りに寄るといったパターンが多いことが裏付けられた。

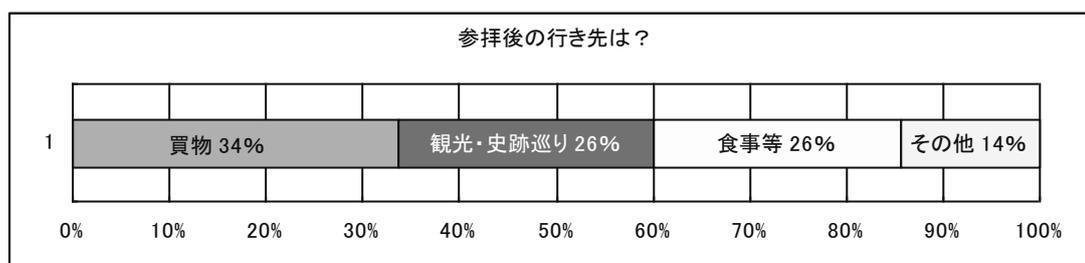
このことは、門前町があったならもっと多くの人が熱田神宮を訪れるのではないかと感じた。



参拝者アンケート・参拝後の予定の有無

前項に続けて「では、それはどこですか？」との質問では、買物に行くという回答が最も多い34%で、史跡巡りも食事と同じ26%と結構多かった。買い物先で具体的な記入のあった所では名鉄パレがほとんどだった。

その他には、水族館、科学館、名古屋城、伊勢、まちの散策、ミッドランドスクエア、おじいちゃんの家、友達と相談して決める、病院、仕事…など様々である。



参拝者アンケート・参拝後の行き先

最後の「熱田神宮の印象はどうですか？」や熱田神宮に「要望などがありますか？」という質問では、突然にも関わらず多くの回答が得られた。圧倒的に熱田の森や木々の緑に好印象を持ったという回答が多く「これを末永く残して欲しい」という要望につながっていた。

一方では「玉砂利のため車椅子やベビーカーに辛い」とか「参道に休めるベンチがない」などといった苦情とも思える要望とともに、「参拝者に配慮が足りない」とか「お高くとまっている」という厳しい批判の声があったのも意外だった。

なお、門前町に関して誘導的な質問を向けてみたが、結果は賛否両論だった。すなわち「ここまで周辺が市街地化されているのだから無理ではないか」という悲観論から「周辺に商店があるから必要ないのでは」という楽観論(?)があるかと思えば、無責任というか、思いつきなのか「あればいい」、「しゃれたグッズの買える店が欲しい」などという意見もあった。

また、若い人をターゲットにして熱田神宮について知っていることを聞いてみた。これについては、予想はしていたものの、予想以上に何も知らないというのが実態だった。「日本武尊に関する神社」とか「草薙の剣がある」という回答があるとほっとするのだが、日本武尊と草薙の剣の関係になるともう「分からない」という。ましてや草薙の剣がどこで発見されたかなんていうことになる、ただ目を白黒させるだけだった。現在の学校教育では教えていないのだから仕方が

ないといえはそれまでだが、家庭で親も教えていないということが明らかだった。

逆に、明らかに参拝者ではないとしてアンケートの対象からあえて外していたが、小学生の登下校に参道を使っているのが多く見うけられた。彼らの多くは正参道を横断する時、鳥居の前でぺこんと頭を下げた後から通り過ぎてゆくのが印象的だった。学校の先生が指導しているのか、親が躡っているのか知りたかった。

繰り返すが、調査の結果から、興味深いことだったのは、地下鉄で熱田神宮を目指して南からくる人も伝馬町を通り越して、神宮西まで行き降りているということである。これは伝馬町が便利なことを知らないからにはほかならない。

熱田祭では、多くの人が熱田神宮を訪れるため名古屋市交通機関も相当に混乱する。交通局では混雑緩和対策の一環として、地下鉄の車内放送で伝馬町の乗降が便利である旨を案内している。この例を別としても、熱田神宮の参拝に伝馬町が神宮西駅と比較しても、何ら変わらず、便利であることをもっと知らせるべきであると痛切に感じた。

5-2 商店街調査

(1) 熱田神宮前商店街

本調査では、熱田神宮前商店街に対してアンケート及びヒアリングの調査を行った。調査範囲は、JR熱田駅の西交差点から南へ、名鉄神宮前駅の西側にある市バスターミナルの手前までである。

1店舗ずつ屋号を記入し、営業している店舗には○印をつけ、シャッターの下りている店舗には×印を付けていった。その結果、4月の平日・昼間に実施した時の調査では70店舗中21店舗(30%)が営業していたが、逆に閉店していたところは47店舗(67%)もあり、まさにシャッター街であった。

その後、熱田神宮前商店街の代表者にヒアリングを行った。ヒアリング内容(質問状)は、参考資料に掲げておいた。

ヒアリングしたのは、熱田神宮前商店街振興組合理事長の金田忠久さんである。商店街の名は、アーケードの両端に掲げられた「神宮前商店街」が正式と思っていたが、実際には「熱田神宮前商店街」だった(なお、本文中では「神宮前商店街」が多く使用されている)。設立は、昭和38年と聞いて、予想よりも設立の新しい商店街だということが分かった。

現在の会員は38店という。これは、全体の約70店舗から見ると、多いのか少ないのか難しいところである。会費は月額で徴収しているということだが、その後の質問項目である「最近の主な活動は？」や「今後予定している活動や事業は？」というのに対し「何もない」という回答は残念だった。質問項目にはなかったが、気になる市と地元とのやりとりについて、さらに質問してみた。

- ・市と地元との話し合いも何度か行われた経緯もあったが、地元との意見は速やかにまとまらなかったために、区役所の整備は先行され平成13年には区役所は完成した。
- ・地元との意見交換はその後も継続して行われたが、なかなか意見が一致するまでには至らなかった。
- ・平成19年になり、用地の有効活用について市側で具体的な検討を開始し、平成20年度以降には開発提案競技などを行って具体案の作成から設計へ進め、平成23年頃には事業に着

手するような予定を定めていた。

- だが、市長が交替し様々な事業の見直しの中に「熱田駅前地区における未利用地の有効活用について」の事業も動きを止めた。



熱田神宮前商店街

この商店街は、熱田神宮の東側に位置し、約70の店舗が並んでいる。

理事長のヒアリングから何ともし難い商店街の実情が予測できたが、個々の商店主は将来のことをどの様に考えているのかを知りたくなった。

そこで再び商店街を歩き、春と同じ様な営業している店舗と閉めている店舗について調べてみた。すると営業している店舗数が春の調査より1店舗多かった。

店舗状況調査を終えて、再び金田理事長を訪ね、先に聞いた住居としていているところ、空き家となっているところなどについて聞いてみた。

すると次の表にあるとおり、この区域の全店舗数の69店舗あるなかで、常時営業している店舗は23店舗(33%)で、閉店しているように見える店舗でも、夜だけ営業する店が3店舗、土・日だけ営業する店が1店舗、午後だけ営業する店が1店舗、時々営業する店が2店舗、また住宅としていているところは14軒(20%)、空き家は18軒(27%)ということだった。

熱田神宮前商店街の現状

(JR熱田駅西交差点から名鉄神宮前バスターミナルまでを北から南へ)

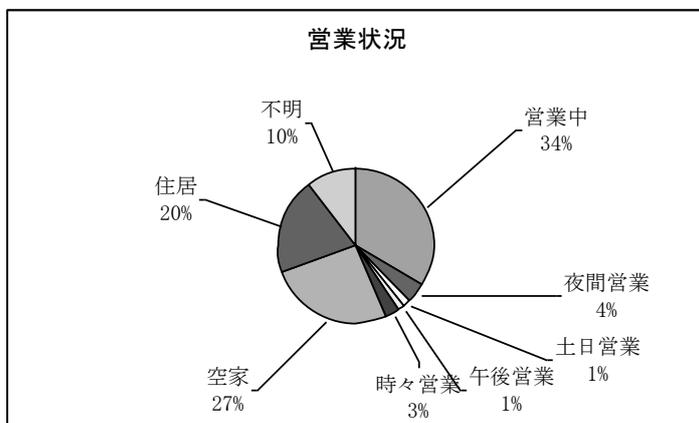
No	屋号等	営業
JR熱田駅西交差点		
—	駐車場	—
1	スッポン堂(アパート1階)	○
熱田区役所入口		
2	(大橋カメラ)	空屋
3	てつ平 串焼き	夜間○
4	(中村屋 はきもの・合羽)	空屋
5	洋品の今	○
6	(小松洋装店)	×
7	(極楽屋 神具・仏具)	空屋
8	竜馬 たこ焼き道場	夜間○
9	(ミヤ薬局)(自販機あり)	空屋
10	(岡田屋 靴)	空屋
11	(たがみ 鉄板食事処)	空屋
12	(成田書店)	住居
13	藤原時計店	○
14	一力菓子舗 長崎カステラ	○
15	(花・熱田の森の花屋さん)	×
16	しゅうまい・ぎょうざ	土日○
17	(さんさんコーヨー)	×
18	(紀州屋靴店)	住居
19	G・L ブティック	時々○
20	(ものかき 賞状・目録…)	住居
21	(伊藤電気機商会)	空屋
22	山田屋 はきもの	○
23	(宮きしめん)	住居
24	ファーストタイムズ	○
25	(美芳園 カネボウ化粧品)	住居
26	(ファルコンボーイ TVゲーム)	×
27	(東海防犯ロックサービス)	空屋
28	(OTSUKA カット布地)	住居
29	神宮前商店街事務所	時々○
30	伊藤電気商会	○
31	金田洋服店	午後○
32	(アサダ カジュアルショップ)	空屋
33	(靴のマルヒロ)	空屋
34	(大栄社 名刺・ハガキ印刷)	空屋
35	(本田 財布・ベルト)	住居
36	(アサダ カジュアルショップ)	空屋
37	ポポ 焼きたてメロンパン	○
ゲート(奥に広場)		
38	Speech Used shop	○

39	(?)	×
40	(入居募集中)	空屋
41	(スギ ブティック)	空屋
42	神屋カメラ	○
43	(菱屋 おしゃれバッグ)	住居
44	(伊太利屋 スパゲッティハウス)	住居
45	オスカー ビデオセンター	○
46	(紀州屋 草履専門店)	空屋
47	(大岩たばこ店 自販機)	住居
48	焼きそば・お好み焼き 伏見屋	○
49	宮前食堂 お好み焼き・焼きそば	○
小路		
50	(ニューヨーク)(風俗)	×
51	榊加藤電気商会	○
52	(お食事・お酒処 富士屋)	住居
53	ギャラリー 花ふく(小物屋)	○
54	焼きたてパンの店 SUZUMEYA	○
55	(サンドイッチ サイドウェイ)	住居
56	Good Times Roll(楽器屋)	○
57	(Public Café Shrine)	空屋
58	T'BAR DISTANCE	夜間○
59	聴覚障害者支援事業所 ほっとくろ	○
60	ナショナル 補聴器センター	○
小路		
—	名鉄協商パーキング	—
61	コーヒーハウス YUKI	○
62	シャッポー ワタナベ	○
63	(加藤カバン店)	空屋
64	(服部文具店)	住居
65	(洋品の萩原)	住居
66	(お食事処 各種めん)	空屋
67	ファッションヘルス(風俗)	○
68	(アンティークショップ熱田)	×
—	空きビル	—
69	きよめ餅	○
小路・バスターミナル		

注:○は常時営業、×は不明

なお()は、かつての屋号を参考までに掲げた

常時営業している店舗に夜間とか土・日などに営業する店の計 30 店舗を勘案すれば実質の営業店舗率は 43 店舗ということになった。ただ、空き家と思われるが確認できないものが 7 軒もあるのが奇妙だった。



熱田神宮前商店街の営業状況

店舗数の割に、空き店舗や住宅として使用している店舗数が多いため、営業している店が少ない。

一方、各店舗のヒアリングだが、営業時間帯に比較的手すきに見える店舗を探し 10 店舗ほどを訪れた。訪れた店舗の店主によっては、昔話を聞かせてくれた。なお、質問内容については、巻末の付録に掲載しておいた。

ヒアリングとはいうものの、世間話のように話してくれる断片的なことから色々な事柄も分かってきた。

- ・ この商店街は、もともと名古屋市が鉄道省から買った土地を昭和 35、36 年頃に民間に払い下げになったものだった。
- ・ 市電が通りを走っていた頃は、通勤客の多くが商店街の前を歩いていたから賑わっていた。
- ・ それは、昭和 49 年 2 月 16 日に沢上町・大江町間 (6.1km) の路線が廃止される迄続いていた。^{18、19)} その後人の流れは金山へ移って行ってしまった。
- ・ 現在は、商店主も高齢化したため何かをやろうという気もなくなり、あきらめの状態になっている。
- ・ 景気のいい時の備蓄が結構あり、生活に困っていない。
- ・ 何度も同じ様なアンケートを経験しており「またか」という思いは誰もが持っているだろう。
- ・ 区役所が移転するという時には市から色々な話があったが「得になる話ではないのだから、誰も賛成するわけがない」という。その例として「現在は表通りに面しているのに裏通りへ行け」とか「土地は等価交換だから金は掛からないというが、店舗改装費は貸すだけという。だけど返済できるだけの稼ぎが保証されなきゃ返せっこない」などだった。
- ・ だが、そうはいついても、一様に「何とかしたい」という気持は多くの店舗でも持っている。ある店では「明治 23 年に親父が創業し、俺の代になってからここに移ってきたんだが、俺の代で潰すわけにゆかない」と意気込んでいる人もいた。
- ・ 「お正月には交通規制の関係で多くの人が歩き、結構お客も多く、実入りもある。だから人

が歩けば店もやってゆける」、「かつて歩道でフリーマーケットを開いたことがある。そんなことなどやって見るべきじゃないの？」という人もいた。

(2) 伝馬町交差点付近の商店街

熱田神宮の南端から伝馬町交差点までの間には飛び石のように商店が並んでいる。神宮前商店街に続いて、この伝馬町交差点付近の状況を踏査の形で実態調査した。



伝馬町付近の商店調査

熱田神宮の南東から伝馬町交
差点まで

伝馬町交差点北商店街の現状

(熱田神宮南端から伝馬町交差点の角を曲がった所までを北から南へ)

No	屋号等	営業
熱田神宮(小路)		
—	名南経営第5ビル	—
—	ビル	—
1	川芳(ビル1階)	○
2	渡邊商店(ビル1階)	○
3	おむすび 待庵(ビル1階)	○
小路		
—	秋葉山・円通寺	—
—	名南経営センタービル	—
—	株泉機工商会	×
小路		
—	日本生命熱田ビル	—
4	Mamma Maria's Pizza	○
—	伊東商店・ワイヤロープ	×
—	住宅	—
小路		
5	お茶の石野園	○
6	松浦写真館	○

—	熱田森ビル	—
—	名南経営第2ビル	—
7	若不老園 菓子(自販機あり)	×
8	ヘアメイク	○
—	ネオゾネ駐車場	—
9	ヘヤサロン オオゾネ	○
10	Mini mini(熱田泰文堂ビル)	○
11	吉野屋(牛井)(2F歯科医)	○
12	ほった お食事処	○
13	クレープとタピオカドリンク	○
伝馬町交差点(北西角)		
14	宮本むなし(南陽ビル)	○
小路		
—	鉄鋼120ビル	—
15	カレーハウス CoCo 壱番館	○
16	台湾料理 天龍	○
—	(有)ロータリースポーツ	?
小路		

凡例:○は営業、×は閉店

結果からも分かるように、この辺りは会社ビルが多く、商店街というイメージとはほど遠い。

商店の付随していないビルを除くと店舗は16店あった。その中で営業していたのは15店で、商店数が少ない割には営業率が高かった。

5-3 住民等調査

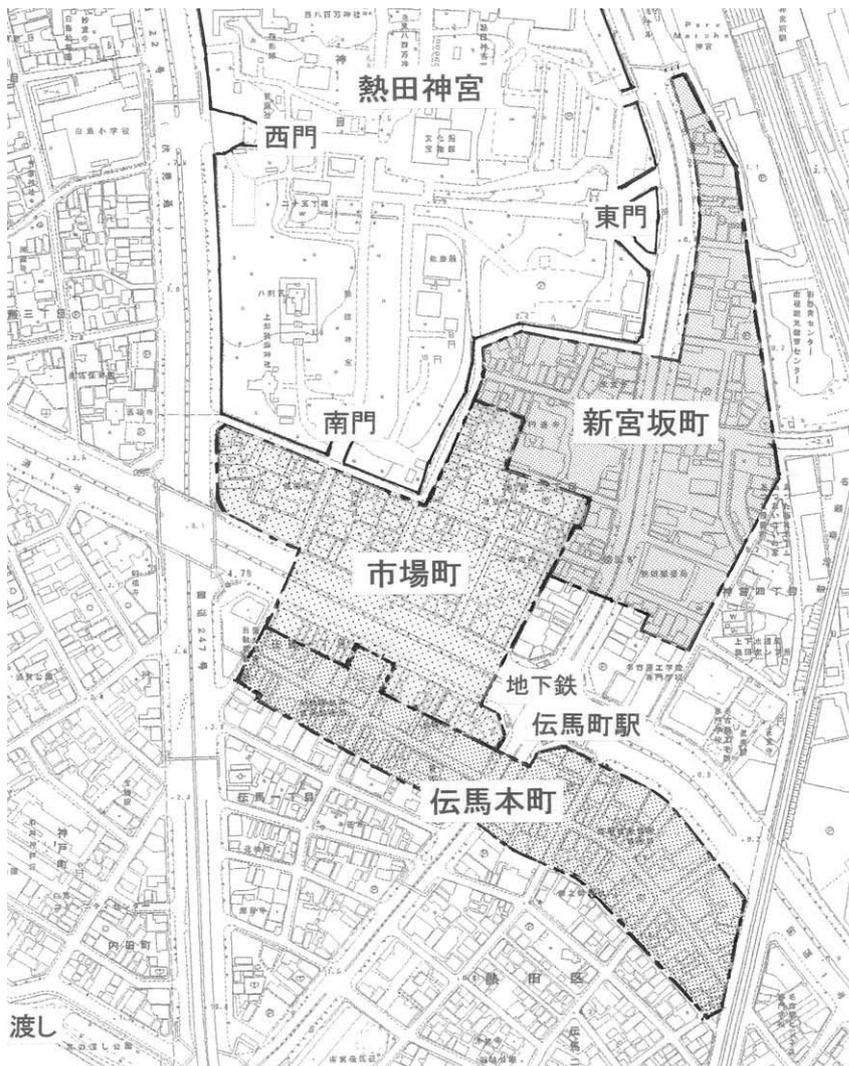
(1) 住民地域

住民に対する調査は、どこまでの範囲の住民を対象とするかが問題になる。熱田神宮に隣接する周囲すべての地域を対象にすることは理屈にはいるだろうが実行することは難しい。

門前町ができる可能性の高い地域に範囲を絞ったとしても、とにかく人数が多い。抽出して戸数を絞ろうにもどのようにしたらよいか分からない。結局、地元の人の協力が欠かせない。

結果、住民調査の対象とした範囲は、熱田神宮の正門に接する「市場町」、この北にあって熱田神宮と接している「新宮坂町」、反対に南の国道1号線を越えた旧東海道沿いの「伝馬本町」の3町内会とした。戸数は、それぞれ75戸、90戸、110戸を合わせた275戸である。

調査に先立って、それぞれの町内会長に面談して趣旨を説明し、調査の協力を依頼するとともに合理的な調査方法の相談を行った。幸いなことに、どの町内会長にも協力が得られた。町内会長から町内の三役など主だった人と相談していただき、その結果、こちらが準備した依頼文書とアンケート用紙を町内会長に託せば、各組長に分配し、そこから各戸に配布してもらえることになった。回収には配布と逆の方法をとり、最終は町内会長宅に留置きしてもらい、まとまった時点で町内会長宅から集計されたアンケート用紙を受け取ることができた。



住民アンケートを実施した町内会の位置

住民アンケート集計表

質問	回答	新宮坂町	市場町	伝馬本町	計	%
1 門前町がある といいと思いますか？	はい	19	8	35	62	51
	どちらでもない	19	7	9	35	29
	いいえ	5	9	5	23	19
	無回答	1	0	1	2	2
2 どんな門前町 を考えますか？	商店街的	19	7	16	42	29
	遊び・見る所	23	9	25	57	40
	古い町並みの	8	5	19	32	22
	その他-1(枠外)	2	2	3	7	5
	無回答	1	5	0	6	4
3 なぜ1の質問 で「いいえ」で すか？	すでにある	1	0	0	1	3
	可能性なし	0	0	4	4	11
	騒々しくなる	3	8	1	12	34
	熱田神宮にそぐわない	1	3	2	6	17
	既存商店街の活性化で	3	0	1	4	11
	その他-2(枠外)	3	1	4	8	23

4 もし、家の前や地域が駅前町になるとしたらどう思いますか？	よいと思う	16	3	20	39	30
	困る	8	11	2	21	16
	特に何とも思わない	6	1	5	12	9
	どんな駅前町かによる	21	8	2	49	38
	その他－3(枠外)	1	1	5	7	5
	無回答	1	1	0	2	2
5 駅前町に決まったらどうしますか？	積極的に協力する	15	3	18	36	28
	反対運動する	4	5	0	9	7
	静観する	23	13	17	53	41
	自家で商売を…	1	1	4	7	5
	貸付などを考える	0	1	7	8	6
	引越しを考える	0	0	0	0	0
	その他－4	3	1	4	8	6
	無回答	5	1	4	10	8
6 その他意見	(枠外)	5	9	12	26	
回収件数／配布件数		51／90	25／75	50／110	138／275	
回収率 %		57	33	45	50	

(2) アンケートの集計と分析

アンケートを集約した一覧表を見てみると、少しずつだが、3町内会での思いが違っていることが分かる。

設問1では「熱田神宮の近くに駅前町があるといいと思いますか？」という漠然とした質問だったが、肯定的なのは伝馬本町で否定的なのは市場町であった。特に、伝馬本町で肯定的な回答が35件(56%)と市場町の8件(13%)に比べて圧倒的に多かったのは、かつての旧東海道の宿場町の賑わいを復活させたい気持ちの表れではないかと想像できる。しかし、3町内全体で見ても「駅前町はあった方がよい」という肯定的な回答の方が62件(51%)と否定的な回答23件(19%)の3倍近くなっていた。

設問2では「駅前町という、どんな駅前町を考えますか？」という駅前町のイメージを聞く質問である。3町内とも「伊勢のおかげ横丁のような遊ぶ所や見て楽しむ場所がある駅前町」が57件(40%)と高い回答率になっている。しかし、「長野県善光寺や東京浅草のような両側に商店が並ぶ駅前町」(42件・29%)や「長野県妻籠宿のような古いまち並み再現などで落ち着いて歩ける駅前町」(32件・22%)もそれなりの高い回答数になっていた。

設問3では「1の質問で「いいえ」と答えた方は、なぜですか？」と駅前町を否定的にみる人にその理由について訊ねたものである。「騒々しくなるから」というのが12件(34%)とトップで、やはり市場町の率が多い。静かな住宅地という現在の状況は新宮坂町と市場町ではほとんど変わらないように思うが、熱田神宮の門前により近接している市場町の方が「もしも」であっても、より危機感を感じているのかもしれない。

設問の4では「もし、あなたの家の前や地域が駅前町になるとしたら、どう思いますか？」と実際に自分の家の前が駅前町になった場合についての質問だった。「どんな駅前町かによる」が49件

(38%)と圧倒的に多く、様子見のつか、いかにも日本人らしい解答となっている。これはアンケートをお願いするときに「分からないことや判断できないことは記入する必要はない」ということで影響されて、無理にイエス・ノーと判断しなかったとも考えられる。しかし、それを除けば「(門前町になると)よいと思う」(39件・30%)とする方が「困る」(21件・16%)の倍に近い回答であった。これを町内別で見れば、新宮坂町や伝馬本町では肯定や協力的な回答が多いのに反し、市場町はもっとも肯定する回答が少なく「困る」という回答が多くなっている。これも前の回答と同じく住宅地を侵されたくないという気持ちの表れではないだろうか。

設問5では「また、あなたの家の前や地域が門前町に決まったら、どうしますか?」という質問である。これに対し「静観する」という回答が53件(41%)と、前の質問と同じように中庸の精神を持つ日本的回答がトップになっている。しかし、それを除けば「積極的に協力する」(36件・28%)という回答が最も多かった。「反対運動をする」(9件・7%)というやや過激とも思われる回答を示したのは市場町が5件、新宮坂町が4件で伝馬町は0件だった。

設問6では「お差し支えない範囲でご記入下さい」として、学区又は町内名、氏名、年齢の欄を設けておいた。これについてはすべてきちんと記入した人もいたが殆どが無記名だった。ただ、集計は町内毎に行ったので町内の傾向は把握できた。

設問7では「その他、何でも気の付いたことをお書き下さい(裏面でも結構です)」という自由に発言してもらう場を設けておいた。これについては、数もさることながら細かく記載してくれた人が多くあって驚かされた。

(3) 個別意見

設問6や各設問の最後に「その他」として具体的な解答や意見の記入されていたものについては、集計表の中で(枠外参照)と記載して処理しておいたが、以下に原文のままですべてについて提示しておく。

その他－1：設問2の「門前町という、どんな門前町を考えますか?」に対する「その他」に記述された内容。

- ・ 京都伏見。
- ・ なにもない。
- ・ 覚王山。
- ・ 上記3地域の様な街並みは理想ですが、少なくとも熱田商店街をなんとか魅力ある商店街にお願いしたいです。因みに鳥居周辺のみでもそれらしい店があると良いと思います。
- ・ 熱田神宮は戦前から官による町作りはなされて来なかった。
- ・ 東海道の整備の充実。少し売店(茶屋など)があってもよいのでは。所々、腰をかけることが出来るような。静かな夜にすることや更なる街路灯(裏通りの)の充実、警備も回数を増やしたい。種々の用意があれば実現可能ではないでしょうか。名古屋の、熱田神宮の発展になると思います。

その他－2：設問3の「1の質問で「いいえ」と答えた方は、なぜですか?」に対する「その他」に記述された内容。

- ・ JR 熱田駅から伝馬町の道路沿いが現実的に思う。
- ・ 四方にメイン道路があり商店街はできない。
- ・ 以前のように神宮の一角に作るべき。
- ・ 老齢で静かに暮らしたいから。
- ・ 大きな道路で交通がはげしいので出来にくい。
- ・ 町は自然発生的にできるもので、人の集まらない所に造るのは無理です(大曾根の失敗例あり)。
- ・ 自然に出来上がるなら良い。
- ・ 必要なし。今ここで門前町という発想がどこから、誰が、出て来たのか？(昔から宿場町はあったが門前町はなかった。なぜ今なのか)

その他－3：設問4の「もし、あなたの家の前や地域が門前町になるとしたら、どうしますか？」に対する「その他」に記述された内容。

- ・ 神宮内で店があるといい。
- ・ 駐車場が心配。
- ・ かんがえがうかばない。
- ・ 家の前はやめて頂きたい。
- ・ 明治神宮に門前町はあるか(善光寺、浅草などは信仰、歴史的な背景があり熱田神宮とは異なるものと思う)。
- ・ 当然、おこってくる問題(ゴミとか、若者のマナー)に対しての対応をどう管理するか！地域のボランティア活動をもっとピーアールして若者や中高年の意欲を盛り上げたい。名古屋は横の連絡が少ないように思う。

その他－4：設問5の「また、あなたの家の前や地域が門前町に決まったら、どうしますか？」に対する「その他」に記述された内容。

- ・ 今のままでは淋しすぎる。
- ・ 応援する。
- ・ 状況による。
- ・ これから考えます。
- ・ 夜もさわがしくなるのであれば引越しを考える。
- ・ 熱田神宮の本質的な歴史的意義をどのように解釈しているのか。
- ・ 分からない。

その他意見：設問7で「その他、何でも気の付いたことをお書き下さい(裏面でも結構です)」に対する自由に記述された内容。

- ・ 神宮商店の店舗を明るくして店を増やす。神宮駅とJR 熱田駅との間ならいいのでは。
- ・ 豊川稲荷や伊勢神宮などに行くたびにまわりに何も無い熱田神宮が残念に思えたもので、何か協力できることがあつたらお手伝いしたいと想います。
- ・ 戦前は南門から堀川の神戸橋に商店があり西門は本町通があり東門には電車通りまで土

産物店がありました。戦後は広い道路ができたので神宮を囲んでの商店はなくなりましたね、東門から北へ熱田駅までと南へ伝馬町駅まで位がどうにか続いた街並みです、お店は少ない。

- ・ 伊勢神宮や長野の善光寺のように 1 年中参拝客がある所では商店やみやげ物やも経営できるけど熱田神宮は正月・祭に集中する都市型のお宮さんでは無理でしょう、遠くから来る人も少なく地形的にも南門・東門・西門と三方にありどこに焦点を集めるか問題と思いません、此を逆転する様に考へるのでせうが戦前・戦後の様に境内にみやげ物屋や商店を作るならともかく現在の神宮ではそれも考えられないし現在の神宮前の商店街を活性化するより方法はないのでは。
- ・ 伊勢おかげ横丁の計画に携われた元竹中工務店名古屋支店設計部長の小川清一氏に助言を仰ぐことも一案かと想います、なお、小川清一氏への橋渡し程度なら、ご協力します。熱田神宮周辺に人が住んで欲しい。
- ・ 神宮周辺の電線地中化にして景観をよくする。
- ・ 子供を外で遊ばせられなくなる。
- ・ 治安が悪くなる。
- ・ プライバシーは守られるのか？
- ・ 住みにくくなると思います。
- ・ 今のままでよい。
- ・ 神宮の回りは寺町でもあります。先のバブルで引越しをしたお寺も数寺ある。明治の廃仏毀釈により追い出された(神宮拡大により)お寺もあった。今でも 30 寺近くあります(市場町は3寺)。消えてしまった街並みもいくつかあった。伝説の辻が花地区(今はうちの町内)も神宮に飲み込まれて消えてしまった。私たちの町内が市場町というのは、門前町の名残。戦前は信長もお参りした様に戦勝の神として1日、15 日の月々のお参りはすごい人出だったとの事。私の家でも1日、15日は店を出したりしていた。本業の他に1日、15日は店を出していた家はけっこうあった(神宮から秋葉山円通寺への通り道でしたから)。名古屋の道路の広さは有名だけど、戦後はその道の拡張のための立退きで、うちの町内は半分へってしまった。戦前は一応門前町の型をしていたと思います。時代の変遷で仕方ない(今、私の組の半分以上が 70 歳以上に、将来は駐車場、空地かマンションか？それとも門前町?)。門前町の一番ネックはいかに車を入れさせないか。我が町内は 19 号線と 1 号線と大津町線に囲まれた町内。神宮南交差点(旧市場町交差点)と伝馬町交差点という2大交差点の信号をカットするために町内の2大メインロードがそれらの車の通り抜け道になっています。お参りにくる人の不法駐車にもけっこう気を病んでいます。相手が変わっても主が変わらず、ですからね。乱筆乱文で申しわけありません。
- ・ 治安が悪くなる。
- ・ いまのうちにやめてください。
- ・ 神宮前の商店街をもう少し新しく集客力のある魅力的な商店街にした方が良くと思います。

す。

- アンケートの内容を見る限り何を考えているのか疑問です。門前町とは中世以降の人の集積した場所を機能的に区分してつけた名前のひとつであり城下町、宿場町、漁師町などと同類の言葉、今に至って門前町にするとか、なるとか、決めるとか、そのような次元の言葉ではないはず。さらには、近辺は「東海道五十三次宮の宿」と言った全国に通用する宿場の名前を持った地域である。神社の前にある門前町より宿場のほうが呼称としてはありがたいみがある。なぜ今、門前町なのでしょう。多分、門前町に名を借りて賑わいのある商店街を作ることを模索しているかと思うが、今の時代に神社が年中人並みの途切れない名所になることはないでしょう。ましてやその恩恵を受けて商店街が繁盛するとは夢にも思えない。そのような恩恵があれば東の入り口名鉄神宮前の商店街もパレもこれまでもっと発展していたはず。この、白鳥学区は交通の要衝の地、国道2本、堀川、名鉄、JR、に挟まれさらに熱田神宮があり、交通至便ではある反面、橋、歩道橋など行き来の制限も多い地域です。道路両側に商店があるなど、とてもこの近辺では想像も付きません。アンケートで模索しているような集客能力を持った地域を考えるにはあまり適した土地とは思えません。
- 熱田神宮に門前町ができる事はとても良い事だと思います。以前からそのような構想が浮かんでいました。でもなかなかうまくいかないのには熱田神宮の地形にあると思われま。それは神宮が3つの主要道路に囲まれている事です。国道1号線・19号線・南大津通りの3本です。名古屋は車社会といわれま道路ありきです。特に19号線は名古屋を南北につなぐ重要道路で、南部へは247号線とむすびトラックの往来も多く大動脈といってもいいくらいです。その3本の道路にかこまれた神宮は、まさに1つの島のようになっています。その為、神宮へむかう参道も長く造ることができず。お正月や熱田まつりなどで出店する屋台もやむをえず神宮のまわりをかこむ歩道に出さざるをえない状態で、とても全国にあるような参道をいかした門前町をつくるという事は不可能に近いと思われま。以前、19号線を高架にしてその下に門前町をつくるという案も出ましたが、大規模な工事と予算の前に立ち消えになったような記憶があります。主要の駅(名鉄神宮前や地下鉄)も神宮から近く、人々がそぞろ歩きする程の距離もなく、大変むつかしい状況ではないかと思われま。駐車場の確保も重大な事だと思います。今は、神宮の中につくられている為、台数も限られてしまつて、南大津通り沿いのコインパーキング頼みです。伊勢神宮などのように、駐車場から神宮へ行くルートを整備し、人の流れをまとめるのも門前町づくりにはかかせないのではないかと思います。あと、東門、西門、南門と3つの出入口があり人々の流れが、散ってしまいまとまりがないのも、むつかしい要因の1つかと思われま。
- 神宮の場所を考えても出来る可能性は薄いと思えます。今の交通量等を考えに入れるところ思います。1号線、19号線、大津線に区ざられた場所にできるとはむつかしい考えだと思えます。
- 神宮に門前町が無いのは、戦後神宮と本来門前町だった伝馬町が国道1号線により寸断され、以後まったく計画性がないま、ほとんど省みられることなく、さびれるまとなつてい

たことによるものと思われます。私の母などは戦前の伝馬町を非常になつかしんでいました。ぜひ門前町を再現してほしいです。

- ・ 熱田の歴史をもっとアピールしたい。
- ・ 名古屋に門前町があると絶対良いと思うが道路(19号1号)で不可能であると思っています。
- ・ 門前町があったほうが活性化していいと思うが、家の前などに出来て騒々しくなるのは困る。なので何とも言えない。
- ・ 門前町は、昔からあり出来上がって行く物であって、これから作る物では無い。
- ・ 税金をもっと大切に使ってほしい。
- ・ 神宮前商店街が外国の方も喜ぶような、落ち着いた道になると良いと思う。
- ・ 熱田神宮が離れすぎて居り国道が有るためなかなかむつかしいと思いますが？

以上の個々の意見を見ると、批判的・否定的な意見がある中にも、全体的に門前町を作るのは難しいが、できれば門前町に賛成したいという気持ちが現れているようにも思える。一方で、作るにしても自分たちの住宅地域に作るより、シャッター街化した商店を活性化の方が先ではないかという思いも読み取れる。

(4) その他のグループ

熱田神宮への参拝者、商店街、住民などに対するアンケートやヒアリングを行ってきたが、より積極的にまちづくりに関心を持ち、あるいは実行しているグループについてヒアリング等を行った。

熱田神宮周辺地域すなわち熱田区内で門前町あるいはまちづくりに取り組んでいるグループを調べて見た。その結果「熱田区まちづくり協議会」、「熱田にぎわいづくり専門委員会」、「NPO法人堀川まちネット」などのあることが分かった。

最初の「熱田区まちづくり…」は、熱田区役所が平成13年に提唱して結成されたもので、その中に専門委員会という形で「熱田区にぎわいづくり…」が作られたという。

さっそく「熱田区まちづくり…」の委員長を訪れようとしたが、熱田区役所・まちづくり推進室からの勧めもあって、これらすべてに精通しているという川口正秀さんを訪れた。

川口さんは、熱田区内で会社を経営するかたわら、先の「熱田区まちづくり…」の専門委員であるとともに「NPO法人堀川まちネット」の理事長、「クリーン堀川」の会長も務めるという多彩な人である。

訪問した場所が「堀川まちネット」の事務局だったので「堀川まちネット」の話が中心ではあったが、それぞれグループがお互いに連携していることが理解できた。

「熱田区まちづくり…」と「熱田にぎわい…」は熱田区役所の主導ということもあって、もともとは熱田区の歴史・文化のPRについての検討、企画、実施をすることが目的となっている。具体的にいえば、区役所から委託されたものを行うということだが、これについては、すでにイベント的に熱田区内のウォーキングを実施していることと堀川一斉清掃などの実績がある。一方「クリーン堀川」は、「熱田区まちづくり…」や「熱田にぎわい…」の実施する事業に協力や協賛をするという形を取っている。

「堀川まちネット」についていえば、大きな目標に熱田神宮の門前町も視野に入れたものだという。その大きな目標のためには「幅広い視点でものを見、幅広い人に呼びかけて参加してもらい、ひとつひとつ実現させていって最終目標に到達できればいいと思っている」という。

それらの具体的な事業は、「大山祭」の復活、「福島コレクション」の整備、「宮の渡し」復活、「熱田ぐるりんマップ」の作成、名古屋城築城・堀川開削 400 年記念行事「まきわら船」…などである。

このうちの「熱田ぐるりんマップ」は先の「熱田区まちづくり…」と「熱田にぎわい…」からの発行として既に平成 22 年(2010)3月に実現しているが、これの協力団体の1グループとして「NPO法人堀川まちネット」も参画している。また、「まきわら船」もすでに同年8月6日～7日、成功裏に実現済みである。

「大山祭」は「宮の渡し」復活などと連動しており、さらに「熱田神宮～宮の渡し：参道プロジェクト」を包含している。この「参道プロジェクト」は熱田神宮正門と宮の渡しを結び、そこを「大山祭」の山車を通すことを想定している。その場合、途中にある国道 247 号線を斜めに横断しなければならないが「宮道に架かる橋」として横断歩道橋が考えられている。このプロジェクトに関しては、すでに「熱田大山実行委員会」が4町で立ち上げられているともいう。

「福島コレクション」については、浜御殿を復元してコレクションの展示をすることを考える一方、同じ場所で観光案内や土産物を売る場所としての機能も付加することを考えているという。これは、すでに熱田生涯学習センターが平成 21 年度に講座～手づくり資料館を造ってみませんか～を開設して受講生が整理を始めている。

ちなみに「福島コレクション」とは、江戸後期から昭和初期までの熱田を中心とする尾張の古文書や古地図など郷土資料千余点を昭和 59 年(1984)6 月、当時の熱田社会教育センター(現在の熱田生涯学習センター)開設にあたり、故福島重夫氏が同センターに寄贈したものである。

「宮の渡し復活プロジェクト」は、宿場町としても「宮」の位置づけはもちろんだが、桑名市との交流も大切と考え、年1回の交流を始めて、すでに4年目を迎えているという。

これらのプロジェクトを熱っぽく語る川口さんの夢は膨らむ一方である。しかし、夢を単なる夢に終わらせるだけでなく、これらのプロジェクトを実現させるためのノウハウを裏に秘めている語り口である。言葉の端々に「(一般の活動者は)後継者へ受け継ぐことを忘れている」、「現に、熱田祭も熱田神宮がお膳立てしなければやってゆけない状態になっている。もっと地元が積極的に関わらないといけない」、「自立して成し遂げる感覚を持たなければならない」などなどである。

さらに「こうすることで多くの人が動けば、国を動かし、行政の賛同が得られ、大山の山車が通る道筋の電線地中化なども実現してゆくはず」と説得力のある説明が続いた。

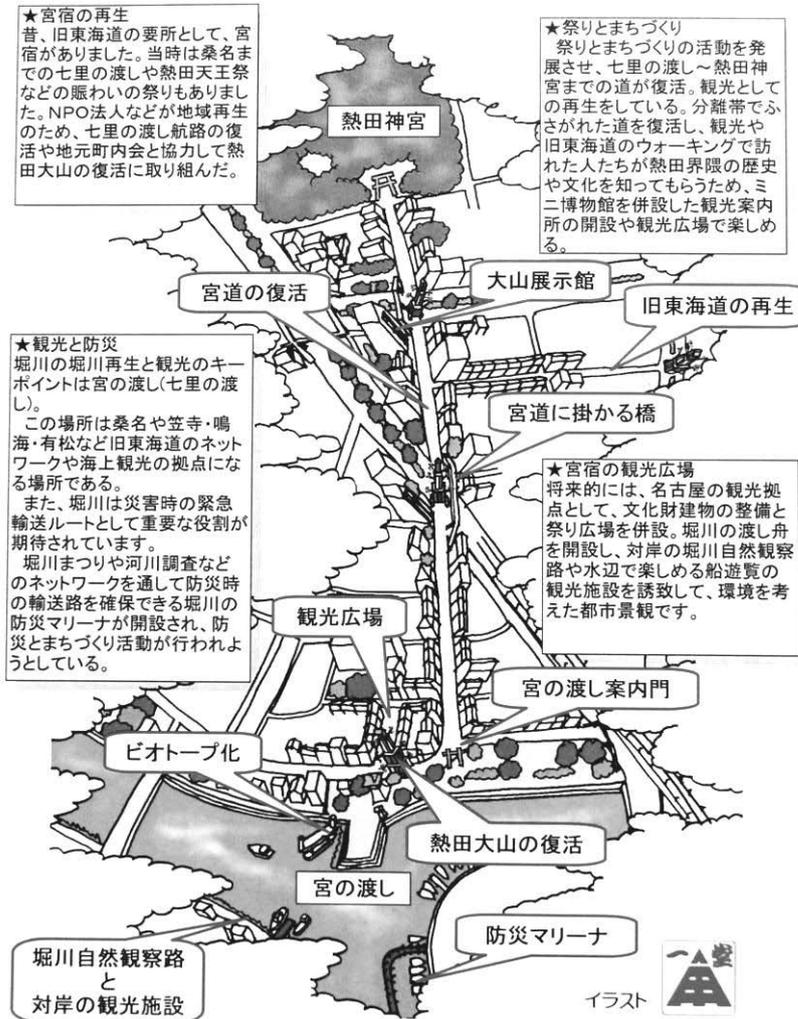
2007 名古屋：堀川未来名所図会(案)

宮宿の再生の巻

NPO法人
堀川まちネット

「宮の渡しプロジェクト(案)」

提供:NPO 法人堀川ま
ちネット



5-4 事例調査

(1) 調査の目的

門前町というものの実態を知ること、調査の結果の中から熱田神宮の門前町を考えるにあたって参考となるものを掴みたいという意味で、各地の門前町へ足を運び調査を行った。

ここでは調査を行った門前町の項目と簡単なコメントを述べるだけにとどめ、報告の詳細は参考資料へまわした。

(2) 調査先

(2)-1 名古屋市・覚王山日泰寺

縁日に行ったが、縁日とは、かくも多くの人が集まるのかと驚くほどの人出であった。

門前町には多くの人を訪れることでさまざまな弊害もあり、地域に住む者すべてが必ずしも

歓迎していないところもあることがヒアリングできた。

(2)－2 名古屋市・真福寺(大須観音)

全国に1万3千ある商店街の中から、平成18年(2006)、経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれている。

もともと全国的にも有名な門前町だったが、現在は大きな商店街区に発達した観があるが、そのパワーには学ぶべきものがある。

(2)－3 愛知県・豊川閨^{とよかわかくみょうごんじ}妙嚴寺(豊川稲荷)

この門前町も経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれている。また、平成22年9月に開催されたご当地グルメの祭典「B-1 グランプリ in 厚木」で初出場した「豊川いなり寿司」が東海3県では最高の6位に入った。

8年ほど前から始めたまちおこし活動が徐々に成果を上げていること、豊川稲荷との関係、行政の協力のあり方などに力づけられた。

(2)－4 岐阜県・千代保稲荷神社

田圃の真ん中にある小さな神社である。商売繁盛の神様だが、なぜここまで人気があるか不思議な門前町であり、多くの人が訪れれば門前町は賑わうということを描いたような門前町である。

(2)－5 三重県・伊勢神宮・豊受神社(外宮)

寂れた門前町という認識を持っていたが、きれいに整備されて快適な歩行者空間となっていることに驚かされた。

(2)－6 三重県・伊勢崎商人館・河崎まちなみ館

放置すればいずれ消えてしまう古いものをまちづくりの資源として活用した考えと努力に感銘を受けた。新たなものを創ることも大変なことには違いないが、それを誰が、どのように管理するかということをきちんと整理しておかなければならないことが改めて認識された。

(2)－7 三重県・伊勢神宮・皇大神宮(内宮)

おかげ横丁といえば、あまりにも有名なところなので説明は必要ないだろうが「いせびとニュース」という情報紙から、いろいろなヒントが得られた。

(2)－8 滋賀県・摠見寺、安土城(負けずの鰐)

織田信長が桶狭間の合戦に先立ち熱田神宮に参拝、その折に永楽銭を投げたところすべてが表を向いた。信長は己の刀の鰐に永楽銭を象嵌したところ、その後の戦には負けず知らずであったと言い伝えられている。

この鰐は、彼が築いた安土城の跡にある摠見寺にあり重要文化財となっている。この故事にのっとり、菓子司「万吾楼」から「負けずの鰐」と名付けられた最中が販売されている。熱田神宮の周辺で販売すべきものではないかと思うもののひとつ。



負けずの鐔を模した最中

菓子司「万吾楼」で売られている。

(2) - 9 京都市・平安神宮

特色のある門前町という考え方もある、と思わせる芸術文化に特化した落ち着いた商店街を形成していた。

(2) - 10 京都市・粟田神社

毎年、体育の日に行われる粟田祭は、初日に知恩院とともに夜渡り神事が行われ、翌日は、神幸祭が行われる。

夜渡り神事も翌日の神輿渡御も、各町内の大人から小さな子どもまでが祭に参加して大いに賑わい、かつての日本の祭の姿が色濃く残っていた。

(2) - 11 京都市・清水寺

門前町を云々するには余りにも有名であるが、新しい横丁が出来ているなど、それなりの努力が続けられていることが伺われる。

(2) - 12 大阪市・住吉大社

全国にある住吉大社の総本宮であり、紀州街道と熊野街道が通る要衝の地であったというから、かつては往来が激しく門前町も賑わったに違いない。

だが、現在は門前町らしいまち並みもなくなって、境内で行われる青物や盆栽などの市やセリが行われて賑わいを見せるだけになってしまった。



住吉大社境内

(2) -13 大阪市・四天王寺

ここも住吉大社と同様に、過去にあった門前町は跡形もなく消えてしまった。その原因は道路拡張が主因で、その後の商業構造の変換が追い打ちをかけたといえるだろう。

救いは、歴史的に弘法大師との結びつきが強かったことから、縁日やお彼岸などには出店で大いに賑わいを見せるということだった。

(2) -14 大阪市・大阪天満宮

大阪天満宮の参道の商店が発展した天神橋筋商店街は、全国に先駆け 25 年前からも商店街の対策を行っており、現在も手を抜くことがなくコツコツと商店街活性化のまちづくりを続けている。

大阪天満宮と協力し落語専門の寄席を建設するなど互いに連携した面的な活性化を進めており、その結果として昭和 50 年頃は1日の来街者が 8,000 人前後であったのが、現在では 25,000 人にまで増加している。

(2) -15 大阪市・今宮戎

神社周辺には商店がほとんどなく、人通りもほとんどない状況である。距離は少しあるが、通天閣のある通天閣本通商店街が近い。

1月9日から11日まで3日間の祭礼(十日戎)の日には100万人くらい集客があり大変賑わうが、その日を除くと来訪者はほとんどいない。参拝者が特定の日にはしか集まらないので神社周辺の門前町的な商店街ができないが、周辺に通天閣を中心とした観光地的な商店街があるので、門前町商店街の持つ楽しみ方を享受できる。

(2) -16 兵庫県・大石神社

赤穂浪士を祀った大石神社周辺には観光客を対象にした土産物店や観光バスの駐車場も整備されている。そこから JR 播州赤穂駅に繋がる道路は歩道も整備され、駅から1^キ程度の距離であるが、大石神社に近づくほど、旅館や飲食店、土産物店などが集積していて門前町らしくなる。道路の拡幅整備に伴い建て替えが行われた店舗のため、新しく綺麗な店舗が多いが、人通りは少ない。

(2) -17 兵庫県・西宮神社

西宮神社は、日本に約 3,500 社ある戎神社の総本社であり、地元では「西宮のえべっさん」と呼ばれている。毎年、1月10日前後の3日間で行われる十日戎では、開門神事福男選りなどの行事で100万人を超える参拝客で賑わう。

阪神電鉄西宮駅と西宮神社の間に西宮中央商店街があるが、商店街は阪神大震災で商店が半減し道幅の狭い道路を挟んで商店が集積している。街路灯には西宮神社の門前町を PR する提灯が掲出されており、門前町らしい雰囲気伝わってくる。

(2) -18 香川県・善通寺

四国八十八ヶ所霊場の七十五番札所となっていることから「遍路宿」と呼ばれるホテル、旅館が残っている。また、創業百年を超える菓子店が善通寺名物「カタパン」を売っていたり、寺院の中でお遍路関連商品が多く売られていたりするのが門前町としての証と思われる。

た。

(2) - 19 香川県・金刀比羅宮

観光のまちらしく、これぞ門前町といえる程の様子を呈していた。

特に「五人百姓」という家々が、かつて当神社の重要な役割を担ってきたという歴史的背景から、特別に境内での商売が許されていることに興味をひかれた。



金刀比羅宮の「五人百姓」

かつて神社に多大な貢献をした五人百姓にだけ境内で店を出すことが許されている。

(2) - 20 東京都・足立区・西新井大師

かつて大きかった門前町も、開発で狭くなってしまった。しかし、限られた道路延長でも若い人の集まる祭やイベントを行うとともに昔ながらの門前町を維持している。熱田神宮の門前が短くても、何とかなるのではないかという思いを持った。

(2) - 21 東京都・渋谷区・神社本庁

全国の神社の大半を統括する神社庁で門前町と神社のあり方などについて聞いてきた。そして、門前町と神社は切り離して考えるべきだが、神社として受け入れられるものを提言したらどうかとか、最近のパワースポットを始めとする神社ブームを好機と捉えるべきなど励まされた。

(2) - 22 東京都・渋谷区・明治神宮

神社本庁の人から「元気な門前町の心意気を見ておくべきだ」といわれて足を向けた。一般的な門前町とは様相が異なるが、現在の若者の気質を捉えて常に変化させるバイタリティーには学ぶべきことが多かった。

(2) - 23 東京都・台東区・浅草寺

国際観光地としての位置づけは、平日の午後遅くでも大変な賑わいを見せており、改めてそのすごさを見せ付けられた思いだった。しかし、そんな一画にもシャッター街があり、どこも苦労しているのだという実態も垣間見られた。

(2) - 24 千葉県・成田山新勝寺

昔から変わらぬ門前町もよく見れば変化していた。「まちづくり発祥の地」を誇りに道路拡張、電線の地中化など毎年のように事業を着実に進め、最近では成田空港をターゲットに取

り込み国際観光都市づくりを目指している。



成田山・新勝寺の門前町

(2) -25 千葉県・香取神宮

文字通り神宮の参道両側にしっかりと商店街がならび、店の人の人当たりのよさとともに、昔ながらの門前町を髣髴とさせる。

(2) -26 茨城県・鹿島神宮

近代的な門前町が整備され、さらに新しいまちづくりを目指して取り組んでいる。その一方で境内にある 11 店舗との共存など課題もありそうだ。

5-5 その他調査

(1) 名物調査

既存の熱田名物として知られているもの、あるいはかつて名物だった食べ物について調べてみた。菓子でいえば熱田神宮周辺でよく知られた店として「きよめ餅総本家」、「亀屋芳広」があるが、その他にも小さな菓子屋が点在している。また、かつて熱田神宮の前(南)に「つくば祢屋」があったが現在は他へ移ってしまっている。

これらの店で販売されている品目の中でも、熱田神宮あるいはこの地域に因んだものについてたずねてみると、各店で3~6種類の菓子が製造・販売されていた。主なものを列挙すれば次のとおりである。

「きよめ餅」は、誓願寺の北にあったきよめ茶屋の名に因んだものといわれている。

「宮の渡し」は、言わずもがなで、東海道五十三次の宮の宿に因んだもの。

「二十五丁橋」は、熱田神宮の境内に現存し、板石が 25 枚並び名古屋市内最古といわれている石橋に因んだもの。

「^{だんじり}車菓」は、かつて大山祭りに出た山車に因んだもの。

「あつたの杜」もいうまでもなく、熱田神宮の森を表したもの。

「おほほ」は、熱田神宮で5月4日の夜に催行される^{まよゆうど}酔笑人神事の別名に因んだもの。

「^{つくばね}築羽祢」は、お正月に女の子が遊ぶ追羽根・衝羽根に因んだもの。同様に追羽根の形に実がなる植物にも通じる名であり、菓子の形がこれらに似ている。

「春^{しゅんこう} 敵門」は、かつて熱田神宮の東にあった門で、小野道風の筆と伝えられる扁額が掲げられていた。その扁額の形を模している。言い伝えでは、楊貴妃亡き後も忘れられない玄宗皇帝が蓬萊の地にいるという楊貴妃へ使いを出し、その使いが熱田の地で叩いた門だといわれている。

「籐^{とうだんご} 団子」は、大宮司職が藤原に代わったのを祝ってつくられたとか、熱田神宮の特殊神饌の「まがり」を模したものとかいわれている。

「そぶくめ」は、日本武尊の妃である宮簀媛命がそのように呼ばれていたことに因んだもので、かつて熱田の町名にも曾^{そぶくめ}福女というのがあった。



小さな菓子屋



菓子以外では「蓬萊軒」のひつまぶしや「宮きしめん」の宮きしめん、さらには熱田神宮御用達の清酒「草薙」などが知られている。

(2) 史跡・伝承調査

熱田神宮周辺は名古屋市内でも史跡・伝承の多くあるところである。熱田神宮を中心とした熱田台地は古くから主要な街道の交錯する場所であったことなどからさまざまな言い伝えなども残されている。

これらについて名古屋市教員委員会で説明看板を設けているものやその他の文献を合わせると120余箇所もあることが分かった。このうち約50箇所について現地調査を行った。この50箇所程度に絞った理由は、熱田神宮に参拝に来られた人が周辺の史跡巡りをする場合、それほど遠くまで見て歩くことはないだろうということと、高齢者社会も配慮して無理なく歩ける距離として熱田神宮を中心とした半径1^{キロメートル}を目安とし、さらに堀川とJRや名鉄の線路に囲まれた区域としたものである。

調査の結果では、すでに現地で確認できなかったものもあった。その例をあげれば、旗屋町にあったという源家発祥地の白旗碑やきよめ餅の由来となったきよめ茶屋、憶念寺にあるという奇縁水人石^{きえんひょうじんせき}は寺自体がなくなっていたし、伝馬町の鈴木そろばん博物館は事実上閉館となっ

ていた。中瀬町にあるという^{かつしき}喝喰石は近くに住む人も聞いたことがないなどということが分かった。名古屋市の『指定文化財目録』で調べた結果、憶念寺の奇縁氷人石は昭和 53 年 4 月 27 日に名古屋有形民族文化財に指定されたこともあったが、昭和 63 年 11 月 1 日に春日井市へ転出のため解除となっていた。

また、熱田神宮の正門前にある^{はやしとうよう}林桐葉屋敷跡、伝馬一丁目の徳川家康幽閉の地、神戸町の西浜御殿などには、現地に何もなく、ただ名古屋市教育委員会の説明版だけが立っているだけというものも幾つかあった。



説明板だけが立つ林桐葉宅

説明看板等について、名古屋市教育委員会文化財保護室で聞いてみた。この看板は名古屋市内では 293 箇所を設置されているという。16 区で単純平均すれば 1 区当たり 18.3 箇所となる。熱田区だけに限れば 32 箇所ということから、熱田区は平均の倍近い史跡があることになり、名古屋市内でも史跡の多い区であることがこれによっても裏付けられる。

また、設置の指針や今後増設の予定などについて聞いたが、どちらも「ない」という回答だった。ただ設置については、各区役所の「まちづくり推進室」に任せてあり、同室が地域の人達の意見に基づいて決めたものを教育委員会の予算で措置しているのだという。

維持管理に関しては、かつて 10 年経つと取り替えるという基準があったが、最近は適宜とし、壊れたり、汚されたりした時に、修理や取り替えを行っているという。見回りは、1 区 1 名の文化財パトロール員を委嘱して、4 ヶ月に 1 回の見回りを行ってもらい報告を受けている。昨年度の報告件数は少なく全市で 10 本の取替を行った。従来、ヒノキの板を使用していたものを最近アルミ板に変えていたので寿命が長くなったという。

調査のために、歩きながら各所の説明を読んで、簡潔で要領を得た文章に感心していたので、一体誰が作成しているのか聞いてみた。すると職員が作成しているという回答だった。昨今、何でも外注してしまうご時世に、当たり前のこととはいえずれしかった。

ルートマップについては、各区が昭和 56 年～63 年にかけて設置されたものを平成 6 年 (1994) 12 月に『歴史と出会う道 名古屋市内史跡散策路 案内・地図』として発行している。その後も改訂されていないが、現在も資料室で販売しているので手に入れることができる。これには市内すべての各区のルートマップだけでなく、それぞれの解説が掲載されている。しかし、現地の説明

看板にある説明とは違っていた。さらに、色々なところがルートマップ的な物を発行しているが、それらと協力して制作や改訂をするなどの考えはないかを聞くと「それぞれの作成意図が異なっているために無理だろう」という回答だった。

伝承の方では、都々逸発祥の地の逸話、姥堂の俗にいう「おんぼこさん」や熱田神宮境内にあるならずの梅の話は面白いし、同じく境内のパワースポットで全国的に有名(?)になった清水社裏にある清水にまつわる楊貴妃伝説などは史実を織りまぜてまことによくできた話だと感心する。これらの詳細は長くなるので参考資料の概説や他の文献に譲る。

なお、調査にあたって色々なウォーキングマップを参考にしたり、道路脇に建てられた案内表示に従ったりして歩いたが、細く入り組んだ道もあって、なかなか指示どおりには歩けなかった。地方から来られた方は道に迷うのではないかと心配になった。これについても地域の人の意見によって立てられているというが、数が足りないからなのか、地方から来た人の立場になって考えていないのではないかとと思われるところがあった。

史跡・旧跡の説明についても付録に掲載した。



道標



なお、史跡等の調査で気になったことがある。それは熱田神宮の周辺には寺院が多いという印象である。「熱田百寺」という言葉があるぐらいだから多いのは当然かもしれない。

そこで地域を歩きながら、地図に寺院と神社をプロットしていった。範囲をどこまでにするかが難しかったが、史跡・伝承調査で定めたのと同様に、熱田神宮を基点として1キロを超えない程度の範囲とした。

その結果は、見落としなどもあるかもしれないが、寺院が45箇所、神社が24箇所あった。なお、神社に関しては、いわゆる熱田神宮とその境内にある摂末社は除いているが、境内の外

にある熱田神宮の摂末社(境外摂末社)あるいは祠のような小さなものまで含めている。

「熱田百寺」の根拠とする範囲は分からないまでも、もう少し範囲を広げてみれば、あながち百という数字も嘘ではないように思える数だった。

「社寺の数が多いからどうなんだ」と問われるとにわかには返答に窮するが、とにかく神社や寺というものが変化の激しい時代にあっても簡単には消滅してこなかったという事実を思えば、それだけ歴史のある地域であるということがいえる。また、事実、歩いている時に気が付いたのが、思いもかけない社寺に名古屋市教育委員会による解説板に出くわすことである。

第6章 現状及びその課題と問題点

6-1 熱田神宮

(1) 自然環境

熱田神宮は、約 19 万平方メートルの境内面積を持っている。境内は学術上価値の高い生物群集の地ともなっている。特に、樹木は尾張地方の常緑広葉樹林としてクスノキ、タブノキなどの老樹が多くある。

そんな社叢も昭和 20 年(1945)の戦火や昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風によって、一時は「社叢もこれまで」と危ぶまれるほどの大きな被害を受けた。それだけで終わらず、その後も高度経済成長に起因する大気汚染や自動車の排気ガスなどの影響を受け続けた。

これらの事態を憂慮して、昭和 48 年(1973)4月に熱田神宮林苑保護委員会が設置され、熱田の森を永遠に伝えるべく活動が開始された。同委員会による林苑の保護育成に関する答申は昭和 51 年(1976)6 月に出された。これによるとシダ植物以上の高等植物は 94 科 264 種を記録したとあり、「名古屋市内において過去の植生を残す、ほとんど唯一の貴重な存在」と記されている。²⁰⁾

これより少し前の昭和 46 年(1971)11 月に熱田神宮宮繕部林苑課が調査した結果によれば、熱田神宮境内には胸高直径が 30 センチ以上の樹木は 1,116 本で、60 センチ以上の樹木は、117 本だった。60 センチ以上のいわゆる大樹が多かったのはムクノキの 67 本で、次にクスノキの 31 本、イチョウウ 8 本などと続く。

また、名古屋市から保存樹に指定された樹木が境内に 18 本もある。このほかにも市内の名木として太郎庵ツバキ、オガタマノキなどが注目されている。

なお、『文化財なごやの名木』²¹⁾の中で「名古屋の巨樹ベスト 14」の中で熱田神宮境内にある木が 6 本あり、「名古屋市内巨木」では全 13 区(当時)15 種 90 本の中で 11 本が熱田神宮の境内にある木とされている。さらに「熱田区名木」15 本中の 8 本が熱田神宮にある。



熱田神宮の森

大都会の中にあって、驚くほど見事な社叢を見ることができる。

本研究を行った平成22年(2010)は、名古屋でCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が開催される年でもあった。これのパートナーシップ事業のひとつである「バードライフ・アジア巡回写真展―藤原幸一・環境写真セレクション」というのが熱田神宮を会場として開催された。これは5月に四国金刀比羅宮で始まったのを皮切りに、順次、明治神宮、北海道神宮、太宰府天満宮、出雲大社と全国6神社を会場として巡回し、COP10の会議開催月に合わせて名古屋の熱田神宮で開催されたものだった。

昨年(平成22年)の10月13日、熱田神宮ではバードライフ・インターナショナル名誉総裁の高円宮久子妃殿下のご臨席の下にオープニングセレモニーが行われた。妃殿下は、ご自身で撮影された写真を数点ご出品なされるとともに、特別記念講演においてもプロジェクターで豊富な写真を映しながらの講演をなされた。そのなかで「なぜ鳥なのか?」ということに対して「鳥は、生態系の変化や環境汚染の影響を受けやすく、自然生態系の大切な指標だから」と分かりやすく説明され、さらに「では、なぜ神社を巡回するのか?」ということに対する説明が続いた。「海外の教会やお寺は、町の中心や小高い丘の上など目立つように建てられているが、森はない」、「日本の神社は、昔から自然を大切にしてきた場所であり、現在も生物の多様性を保全しているところ」、「だから千年を超えるような森を育ててきた日本の神社は世界にも例のない誇れる場所」といった神社の森の大切さについて説得力のあるものだった。

(2) 教育・文化事業

熱田神宮が神社として神事や祭典を行っているのは当然のこととしながらも、大きな意味での神社としての役割を担っていることは一部にしか知られていないようだ。すなわち、教育的・文化的な事業を行っていることである。このため熱田神宮には文化部という部署があり、宝物館や文化講堂をもっている。

「熱田神宮宝物館」は、昭和41年(1966)の文化殿の竣工と同時に開館し、博物館法でいう博物館となっている。ここでは皇室を始め将軍・藩主・一般篤志家などから寄進された資料約4,000点を収蔵しており、毎月、展示を入れ替えて公開している。熱田神宮には草薙神剣を奉斎していることから特に刀剣類は多く、名刀の宝庫とさえいわれている。年間約65,000人の観覧者があるというから、市政資料館の約59,000人(平成18年度)を超す人気スポットである。

また、現在、熱田神宮が実施している教育・文化事業としては、「熱田神宮文化講座」、「緑陰教室」、「太鼓教室」、「造形教室」、「ボーイスカウト」、「ガールスカウト」、「宮の森みどりの少年団」、「お茶会」などがある。

この内「熱田神宮文化講座」は、毎月1回土曜日の午後、文化講堂で定例的に開催されている講座である。講師は、日本全国の著名な方々が担当しており、毎回、興味深い題目のため200人という定員を超す申込のある人気講座となっている。特に、近年は高齢者の教養を高める格好の講座となっている。

「緑陰教室」は、昭和22年(1947)に発足した「熱田神宮子供会」から発展して昭和26年(1951)に開設されたもので、実に、今年(平成22年)で創立60年を迎える。開設当初は、戦後間もない混乱期にあつて、将来を担う子供たちに元気と笑顔を取り戻して欲しいと願う若手神職ら

が中心となって活動を始めたものだった。その後、多くの経験に基づき様々に改善され、熱田神宮ならではの授業・課外活動も多くなった。現在、講師は、将来神職を志す養成機関としての皇學館大学、京都國學院、熱田神宮学院の学生が受け持っている。²²⁾7月1日の申込日には朝早くから長蛇の出来る人気教室となっている。

また、このほかに「太鼓教室」、「ボーイスカウト」、「ガールスカウト」、「宮の森みどりの少年団」があるが、これらは緑陰教室を母体として誕生したものである。

(3) 熱田神宮の印象

第5章のアンケートの項でも触れたが「熱田神宮の印象は？」という質問をした。その中で「こんなに大きな神社だとは知らなかった」、「感動した」とか「町の中であって、こんな大きな森があるなんて信じられない」、「森が良かった」など良い評価が多くあった。

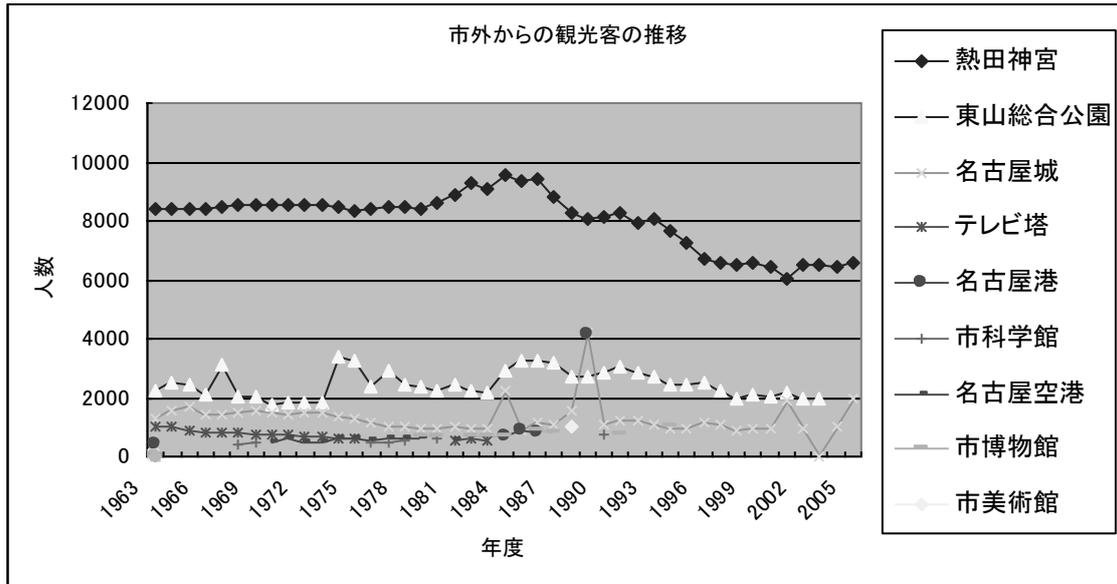
ところが重要なので繰り返すが、一方では「参拝者に対して配慮しない」、「お高くとまっている」という言葉も聞かれた。こんな言葉が、例え数が少なくとも、聞かれるということは由々しきことである。

調査時の具体的なやりとりを示せば「昔は、大楠の脇にガラス戸を開けて自由に入れる建物があった。冬は暖かく、夏は涼しい風が吹きぬけて気持ちがいいところで、休憩するにはとても良い場所だった。あんなのがあれば良いが…」という言葉があった。それを脇で聞いていた人が「あれはもう倉庫にしたんだわ。経費がかかるでよお。熱田神宮さんも参拝者なんかに金掛けとれんでよ」と事情通らしく割って入ってきた。

また、別の人からは「うちの年寄りがお参りしたいというんだけど、車椅子なので私たちは押すのに難儀でよう連れて来れんのだわ。車椅子用の舗装した道を作ってもらえるようお願いして下さい」という要望があった。これと似た意見として「私は足が悪くて砂利道を歩くのが大変なので参道を舗装して貰いたいわ」といった意見・要望があった。これらに対しては車椅子が備えられていることを伝えたが「そんなこと、どこに書いてあるね」と逆にねじ込まれそうになった。

「横綱の土俵入りなど、済んでから新聞などで知って悔しい思いをしている」とか、熱田祭の翌日に来て「祭が1日で終わるとは知らなかった」など情報のないことを挙げる人もいた。ちなみに熱田神宮のホームページをパソコンで調べたら、それらの情報もきちんとあることが分かった。ただ、どの項目へアクセスしたら知りたい情報が得られるのか一般の人では分かり難いのではないかと、また、目的に到達するまで検索を続ければ、非常に手間がかかることも分かった。

次のグラフは「名古屋市観光客・宿泊動向調査」の一覧表を参考にして作成したもので、施設別の入込客の推移を表している。これから分かるように他の施設から抜きん出て、常に1位を占めているのが熱田神宮である。統計の始まりである昭和38年(1963)から昭和56年(1981)までの18年間は殆ど変化らしいものが見られず800万人台が続いていた。昭和57年(1982)から5年間ほどは900万人台を記録していた。その後、徐々に減少傾向に転じ平成17年(2005)には650万人台にまで落ち込んでいる。一時的に伸びた5年間に何が合ったか分からないが、その後の20年間の減少している事実は何を語っているのだろう。



名古屋市外からの観光客の推移

「名古屋市観光客・宿泊動向調査」から作成（人数の単位は千人）

減少傾向の原因を根拠もなく云々することは避けなければならないが、交通機関の変化、レジャーの多様化など様々な要因が絡み合っていることだと想像できる。しかし、これらに信仰心の欠如なども加えて考える必要があるように思える。これが正しいとするなら熱田神宮としても何らかの対策を考えなければならない。少なくとも、かつて「熱田さん」と呼び親しまれてきた熱田神宮だが、調査結果からも分かるとおりに「お高くとまっている」という声が聞こえるようになり、庶民の気持ち熱田神宮から離れていきつつあるという事実を認識していなければ、実際に対応が必要になってから慌てることになる。

6-2 商店街

熱田区には金山、日比野、神宮前、六番町、須賀という5つの商店街振興組合がある。その中でも熱田神宮周辺にある商店街といえば、神宮前商店街と須賀商店街である。それ以外には組合であるか否かは別としても「商店街」といえるほどのものはない。

賑やかな交差点という印象の伝馬町に行ってみれば、確かに商店があるにはあるが、10店舗に満たない店が点在して並んでいただけである。また、かつては賑やかだったと記憶のある旧東海道沿いに足を運んで見ると、商店といえるものが皆無に近いことが分かり唖然とする。

この事実を考えるに、熱田神宮の西側と南側にある幅の広い道路が浮上してくる。名古屋市発行の『戦災復興誌』²³⁾を紐解くまでもなく、昭和21年(1946)から始まり昭和56年(1981)に名古屋市内全工区の換地処分を終えた復興土地区画整理事業によって、熱田神宮を取り巻く東西南北の道路すべてが拡幅整理された。

この道路拡張事業に伴い、先にも述べた源太夫社げんだゆう(現在の上知我麻神社)の市場町からの移転と、熱田神宮正門から宮の渡しへ向う道路が分断された。

これらの土地区画整理を悪いといっているのではない。これがなされた結果、全国でも目覚しい発展をした名古屋であり、その後のまちづくりに大きく寄与したことは間違いのない事実である。こういった大局的な見地から有効な広幅員道路だが、都市計画を策定した当事者である田淵寿郎自身『復興都市計画の概要』の中で「災害用ということで、交通量だけならあれだけでもよからう」と語っている。現に、伊勢湾台風の救援時には「港へ向う道路が広くて助かった」という関係者が何人もいたという。²⁴⁾

ただ、熱田神宮周辺に限れば、商店街の立地には相応しくない環境になったということである。

『大正・昭和 名古屋市史』巻9¹³⁾には、商店街の道路幅員に関する面白い記述がある。

＜道路の幅員は何間位が適当であろうか。東京式と大阪式とによって相当の差異があるが、大阪の13商店街は、大阪式で概して復員が狭く、平均わずかに3.65間しかなく、名古屋のそれは、円頓寺の2.5間の狭いものもあるが、広小路の13.5間のような東京式の商店街が幾つかあって、平均5間余となり、大阪よりは広がっている。元来日本の道路は、宅地に比してその面積がはなはだ少なく将来拡張する必要に迫られている。したがって商店街の復員の限度と称せられる6間までは、拡張する覚悟を要するわけである。商店街は車を通さない方が望ましい。したがって道路は、直線の必要がなく、できるならば神戸元町のように適当なカーブをもって曲線美を発揮することが上策で、京都新京極のように曲がり角があるのは引きしまりがあってよいことが常識となっている＞というのである。これによると商店街の道路幅員は6間(約10.8m)が最適であり、車を通さず、適度に屈曲しているのがよいことになる。

戦後の復興土地区画整理事業によって、当時の国鉄熱田駅から名鉄神宮前駅にかけての商店街は現在の姿となった。熱田駅は、明治19年(1886)3月、熱田駅を基点とする武豊線の開通とともに設置された名古屋市内最古の駅として由緒があり、熱田神宮詣での重要な交通拠点とし特急も停車する駅であった。だが、現在のJR熱田駅は利用客も少なくなり、普通列車しか停車しない駅となってしまっている。



熱田神宮前商店街

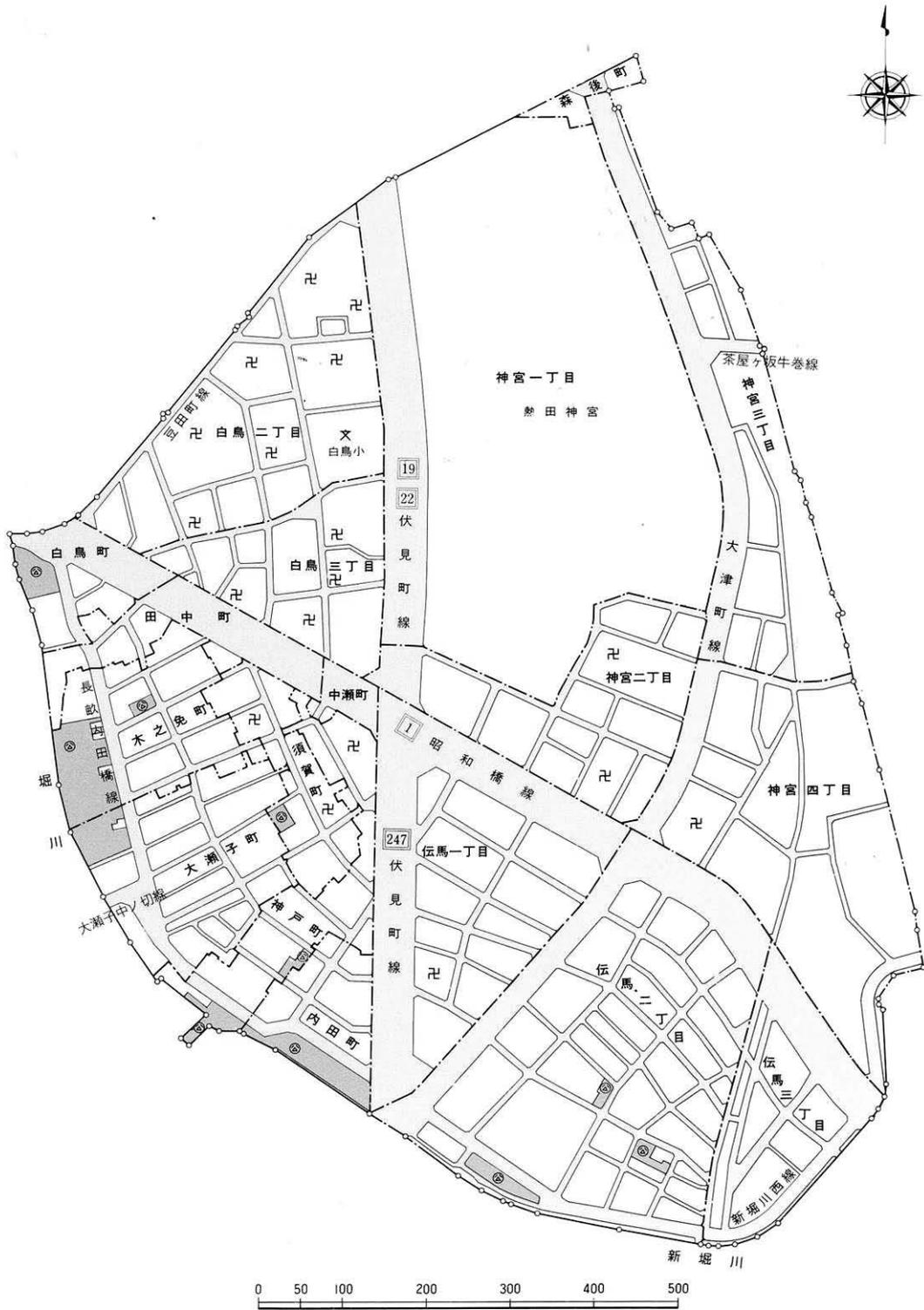
空き店舗や住居となっている所が多くあり、店舗としてシャッターが開けられることもない。

熱田第5工区（整理前）



区画整理前の熱田神宮周辺

熱田第5工区（整理後）



区画整理後の熱田神宮周辺

神宮前商店街は、70 店舗ほどの店が並ぶ商店街である。食堂、喫茶店から衣料品、履物、文具、電気器具など様々な商品を扱う店が並んでいる。このような 70 ほどの商店が並べば立派な商店街であるが、残念なことには、その中で営業している店はわずかしかない。

かつて名鉄神宮前駅を降りた乗客の多くは築港方面へゆくサラリーマンが多く、熱田駅前の交差点から築地方面へ行くバスに乗るために神宮前商店街の前を急いだ。帰りには幾分のんびりと歩き、時によっては神宮小路で一杯飲んで帰ることもあったに違いない。名鉄神宮前駅近くには、表通りから1・2本裏道へ入れば、「神宮小路」という飲み屋街がある。そんな人通りがあった時代には、この商店街と飲み屋街も活気があった。

ところが昭和 46 年(1971)に、地下鉄が金山駅から名古屋港まで延びると状況は一変した。名鉄電車を利用する乗客は、神宮前駅で降りず、金山駅へ直行し、地下鉄に乗りかえれば快適に早く港へ行けるようになったからである。JR 熱田駅の利用者も同じ理由で減少した。

6-3 課題と問題点

最初に熱田神宮についていえば、アンケート調査の結果にある「参拝者に配慮しない」とか「お高くとまっている」という参拝者の思いを真摯に受け止め、原因を追求し、固定観念を払拭すべきことが挙げられる。また「神事は神職がやるもの」と突き放さずに、参拝者とともに行うという考えに立った対応と情報面の強化にどのように対応すべきかを考える必要があるだろう。

次は、商店街である。交通の結節点として多くの人が歩き賑やかだった商店街を寂れさせたのは、人の流れが決定的に変わってしまったことと、小売業の業態変化が最大の原因と考えられる。これを取り戻すには、新たな発想でものを考えなければ、商店街の活性化はあり得ないだろう。

その他の地域についていえば、数多くの神社や寺がリソース(resource:資源や資産など)となり得るのか。また、同じく数多くある名所・旧跡でも、多くの人が訪ねてみたいと思うような本当に魅力のあるものがどれだけ抽出できるのかは大きな課題である。また、魅力のある場所であっても現状のままではよいのかと思われる箇所も多くあり、それらを整備するためには予算を伴うという問題が付いてまわる。

新たな門前町を創るということで現状を考えれば、ある意味、すでに高度に市街化が進んでいる地域であり、これらを打破するための空き地や開発空間といったリソースがありそうに思えない。ただひとつ、今後開発できる場所といえば、熱田区役所の南に広がる旧国鉄用地しか残されていないのではないかとさえ思える。また、門前町としての道路・土地が門前にほとんどないということもあり、それと同時に、とても商店街などつくりようもないという広幅員の道路が南と西にあることも付け加えなければならない。

第7章 門前街づくりの方向性

7-1 門前町^{まち}と門前街^{まち}

本研究テーマが“熱田神宮に門前街を…”であることは改めていうまでもないが、あえて「門前街」としたことは説明しておく必要があるだろう。もちろん一般的には「門前町」と書かれることは承知の上で「門前街」とした。

熱田神宮に門前町があればいいと考えて、実現に一步でも近づけるために研究を思い立ったのだが、そう思って改めて熱田神宮の周辺地域を思い起こしてみた。ところが余りにも難しい条件ばかりが揃っている様に思えたのである。

それらは、すべて言わずもがなのことなのだが、熱田神宮の正門前には門前町を形成するための道路がないということが第一である。その長さはせいぜい 70~80 ㍍である。またそこへ至るためのアクセスをどこからどのように考えるかという問題がある。

一方、視野を広げて見れば熱田神宮の西側には国道 19 号線(熱田神宮から南は 247 号線)があり、南側には 1 号線がある。これらの幅の広い道路を行き来できるような門前町はあり得ない。



熱田神宮を取り巻く広幅員道路

国道 19 号線と熱田神宮の森

西も南もだめなら北と東はどうかと目を向けるが、熱田神宮の北側からは境内へ入れないので問題外である。残る東側には、名鉄神宮前駅があり熱田神宮周辺でもっとも活気がありそうに見える。しかし、そこから連なる神宮前商店街に一步足を踏み入れれば、ずっと見とおせる商店街のほとんどはシャッターを降ろしている。歩く人もまばらである。ここを活性化したとしても熱田神宮の門前町であるといえるかどうかは難しいところだろう。

四面楚歌の研究を続けても、一般的にいう門前町は無理だろうから、最初から地域の活性化を念頭にした「まちづくり」、すなわち「門前街」とした方がよいだろうと思うに至った。

“熱田神宮に門前街を…”つくるということは、門前町の定義からして乱暴な話なのかもしれない。全国に数多く見られる門前町の例からみれば、社寺があって始めて成り立つものであり、必然性に基づいてできる面が大きいからである。だからこそ、つくりたいという気持ちはあっても“門前街をつ

くろう”ではなく“門前街を…”としたのである。“…”は可能性があるのかないのかを検証しようという意味が含まれている。

また、視点を変えて考えて見れば、全国の社寺にすべて門前町があるわけでもない。あれほど有名な、あれほど大きな社寺なのに門前町がないという所だってある。だから無理やりに門前町をつくる必要もない訳である。

しかし、熱田神宮の場合は、過去の歴史の変遷を見れば門前町があったと思われる時代もあり、それが封建制度の崩壊といった社会経済の変化や地下鉄を含む鉄道開通による結節点の移動などによって消えて行ったと考えられる。

これらのジレンマを払拭するのが「まちづくり」という考えである。まちづくりとして考えるならば、過去の門前町の要因に囚われることなく、自由な発想で方向性を定めればよい。

7-2 熱田神宮前商店街

熱田神宮へ参拝する人達に行ったアンケート調査の中で、門前町についての質問には様々な答えが返ってきて戸惑った。中でも「既存商店街の活性化をすればよい」という言葉には返す言葉が無かった。

シャッター街化した既存商店街、ここでは熱田神宮前商店街(以下、単に「神宮前商店街」という)を活性化すれば門前町の問題が解決するかどうかは別としても、少なくとも熱田神宮と隣接しているのだから、まちの活性化という意味から考えても、第一に考えるのは当然のことと思われる。

具体的にどうするかという段になって、現在の実情を考えると、少なくとも商店主が活性化を神剣に考え、専門店街に特化するとか、ここでなければならぬという特色を持たせるなどの新たな発想がなければならぬということが第一にあげられる。その次に、それらを実行する場合に、行政なり地域なり、周囲がどのような協力や援助をすればよいのかである。

そこで着目されるのが、神宮前商店街の裏側というか、東側のやや北寄りには熱田区役所があり、その南には未だに開発がなされていない用地があることである。これをとりあえず「区役所南用地」と呼ぶとして、これと神宮前商店街とで一体的な開発が出来ないかと考えてみる。

神宮前商店街の金田理事長にヒアリングした時「あの土地を開発する計画は出来ていたが…」という話があった。

区役所南用地は、名古屋市開発公社の所有であることから何らかの話合いの可能性は大いにある。面積はおおよそ7,200平方メートルほどで、南側がやや複雑な形状をしている。広いか狭いかは計画にもよるだろうが、やや中途半端な面積と開発のし難い形状には違いない。また、中途半端といえば西側は神宮前商店街で塞がれ、東側は鉄道線路で塞がれており、この土地へ進入するには、東側にあるJRの線路側の北から区役所を迂回して入るか、神宮前商店街のちょうど真中あたりにあるゲートからの2ヶ所しかないことも開発の足を引っ張る要因となっている。



区役所南の
開発用地

商店街という私有の土地・店舗群と行政の土地とで一体になって開発するには、開発のコンセプトや時期を同一にしたとしても、具体的な開発になれば、両者が別々に行うことになる。しかし、神宮前商店街の現状を考えると具体的な開発に対して動ける状態ではない。ある程度、区役所南用地の土地利用を行政が独自に計画し、それを神宮前商店街に示して同意を得た上で実施せざるを得ないだろう。その計画も、区役所南用地の開発結果によって神宮前商店街の店舗が個々に改善等に動き始めることを期待した計画とすべきである。

開発計画についても、短期か長期か、資金は誰が出すのかなど色々な問題があるが、まずは何

が出来るかを考えて見る。

第一に区役所南用地だけで出来る開発は、先に述べた面積・出入口・形状などから難しく、これを核としたもっと大きな視野で考えるべきだろう。そのエリアは、本研究テーマが門前町であることから、門前町としての機能なり、門前町を支援する機能としての開発となるように考えれば、熱田神宮への入口(勅使門と東門)から熱田区役所までの範囲を開発区域として考えられる。

すなわち、現在、名鉄神宮前から熱田神宮へ向う人の流れに、開発エリアからの人の流れも加えるように考えれば、その間にある神宮前商店街を通る人の流れが生ずる筈である。今後、こういった流れを生む開発を考えるべきだろう。

また、まったく別な考え方として比較的簡単な方法も考えられないことはない。欧米の商店街は比較的早い時間に閉店してしまうが、ショーウィンドーの照明は点灯したままにしてまちを歩く人がウィンドウのディスプレイを楽しめるようにしている。この発想を取り入れて、シャッター店の前をすべてショーウィンドー化することが考えられる。

7-3 社寺と地域との関わり

神社や寺院と地域の関わりについては、古くからの慣わしや、社寺という特殊な世界などが関わっており、地域のためだからとかまちづくりだからといっても許される範囲というものがある。それを制約ととるか、犯してはならない神聖なもの、ふたつと無い大切なものとして理解するかは重要なことである。

社寺は、参拝者のないあるいは訪れないのに存続できるかという大きな命題を抱えている。その一方で、尊厳を保つべき社寺が「開かれた社寺」、「親しまれる社寺」などとしてどこまで解放できるかという大きな両刀論に苦しめられる。



パワースポット記事を掲載した雑誌の数々

また、昨今は、若い人の中にパワースポットを訪ねることが盛んとなり神社ブームともいえる状況を呈している。書店にはパワースポットを紹介する雑誌類が10誌を超えて次々と並べられている。

この現象をどのように捉えるかは様々な意見の出るところだろうが、例え一時のブームからであっ

でも、境内の奥まで足を運ぶことに変わりはなく自ずと社寺を身近に感じるようになることは間違いない。こんな時、社寺側の対応如何によって若者が社寺に関心を向けるようになるか、飽きられるかが決まる。関係者の戸惑いも分からないでもない。「パワースポットはどこ？」と聞かれても、社寺を守る者らは一様に「御祭神(御本尊)の座す御本殿(御本堂)が最もパワーの強い場所」といいたいだろうが、そんな返答をしては身も蓋もない。若者はロマンを求めてきている者がほとんどであり「神様が、仏様が云々」という説教とも思える言葉を求めているのではない。

パワースポットといわれる場所とパワースポットたる所以を話し、それにまつわる史実や言い伝えから社寺や神・仏に対する関心が出てきた時、はじめて丁寧な説明が必要になってくる。



熱田神宮のパワースポット



清水社背後にある清水の湧き出ている所にある三角の石は楊貴妃の供養墓の欠片といわれている。備え付けの柄杓で石に水かけ、三度続けてうまく水が掛かれば目が良くなるとか、美人になるとかいわれている。

つまるところは、境内を仏教でいう「結界地」と同じものと考えれば、境内と境外は一線を描すべきであるが、参拝などに訪れる人々を排除することではない。心の拠り所としていつでもお参りに行ける場所として親しまれる社寺であるべきである。謹厳を持って「お高くとまっている」といわれるのは心外かもしれないし、「事情を知らない一部の者の戯言」と思うかも知れない。だが、そこには何か根源があるに違いないと真摯に受け止め是正する気持ちがなければ人の気持ちは離れてゆく。

伝統ある文化が、幾世代も超えて受け継がれる様を目の当たりにする感動は深く心に残るものである。宮参りや寺参りも伝統文化のひとつと考えれば、これを受け継いでゆく努力の必要性は社寺にもある。

振り返れば、明治以降、欧米文化に価値観を抱く風潮の中で育った世代は、日本文化を断絶させたといわれている。それまで受け継がれてきたものを善しとせず、積極的に次の世代へ引き継ごうとしなかったからだ。子供たちも、そんな親の態度や社会の風潮を感じ取り、歴史あるものに心を向けることはなかった。教えられなかったものを次世代へ伝えることはできなかったからに過ぎないのだが、日本人の伝統的宗教観や宗教的教養というものさえも、教えられず、また教えてもこなか

った。

一国の文化は、自然、地勢、歴史、産業、宗教、民族など様々な特性や長い歴史の中から必然的に生まれたものであり、尊重されるべきものである。日本人が日本人であるためには、日本の良き文化や良き伝統を伝え継いでゆかなければならない。そんな心は、昔から残る門前町に相通ずるところがある。

「年間1千万に近い熱田神宮の参拝者に接しながら、つねに私の念頭を去らない想いは、この無数の人々が示す生き生きとした信仰の存在を、まったく無視し、否定しておいて、それで、日本民族の精神・思想・文化・生活態度などの流れを正しくとらえることが、はたしてできるだろうか、という疑問である」という故熱田神宮名誉宮司篠田康雄氏が著した『熱田神宮』(学生社)の「はしがき」の一節を思い返したい。

7-4 意欲と合意

まちづくり・まちおこしの第一条件は、それらの必要性を感じ、何とかしようという意欲が地元が無ければまちづくりは始まらない。また、それと同時に、意欲のある者がいて懸命にまちづくりを推進しようとしても、周囲が同調するという合意が得られていなければ、すべてが空回りしてしまう。

これらを具体化するためには、最初に、地元で信頼されている人、発言力のある人、周囲の人を牽引していける人、すなわちキーパーソン(key person:物事の運営や進行の中心となる人)を探し出さなければならない。まちづくりが商業的な目的であるなら、商店街の組合長や大店舗のトップなどに適役がいるかもしれない。

また、コミュニティー(community:地域社会、共同社会)的なまちづくりであるなら、区政協力委員とか町内会長などがよいかも知れない。その後、キーパーソンを中心にして地域の合意形成を図るのがよいだろう。

さらに、最近ではNPOとか、まちづくりのボランティア団体も数多くできてきた。それらは活発な活動などを繰り返しているのだから、こういったグループと一緒に協働作業を行えば具体化が早いかもしれない。

「現状維持バイアス」という言葉がある。これは、何かに変化を求めるとすれば、得になるという期待がある反面、損になるかも知れないという事態も覚悟しなければならないから、人は、よほどの不満が無い限り現状を維持しようとする行動心理が働くということである。この心理は時として新たな発見や発想を阻害する要因となる。これを打破したとき、はじめて発展や新天地開発が可能になる。これは自分が行動を起こす場合だけでなく、誰かに同調するか、しないかという場合にも無意識のうちに同様の心理が働くことを自覚しておくべきだろう。

7-5 まちづくりのインセンティブ

地元で意欲があり、キーパーソンやグループも見つかり、地域の合意形成がなされたとしても、何か切っ掛けとなるもの、すなわちインセンティブ(incentive:動機、刺激)がなければ何事も動きにくいものである。

インセンティブとなるものは、思いもかけぬできごとなどから偶然に動き出すようなものから、ある程度、意図的に働きかけてゆくものがある。確かに、予想もしないものからひとりだけで動き出すもの

があることにはあるが、それを待っていては何時になるか分からない。従って、ある程度は効果を期待して計画的に働きかけるものを見出し、仕掛けていかなければならない。

7-6 コミュニティー

表題に掲げた「コミュニティー(community)」という言葉自体があいまいで一般的には共同社会、地域社会、…界などといわれているが、ここでは「良好な地域社会を作ること」だとしておこう。“熱田神宮に門前街を…”というときには、当初、相当に「商業」の面を強く意識して考えた。ところが一方では、すでに居住している人たちへの配慮も重要である。いわゆるコミュニティーを意識した整備が必要ということである。

一定区域をまちづくりの目標に向けた自主規制をしたとしても、そこに住んでいる人を排除するものではない。住んでいる人たちと訪れる人たちが共生できるまちづくりを目指さなければならない。

そのため、一定区域のまちづくりを考えれば、既存住宅を改修するときや建て変えるときには協力をお願いしなければならない。また、そのとき災害に強い建物にすることも重要である。1階は商店にし、2階以上を住宅にするような考え方をお願いすることも考えられる。1階の商店は自ら経営しても良いが、貸店舗としてもよい。これらの改修などに対する補助金制度などが設けられればまちづくりは加速する。



住宅兼店舗の例

1階を店舗、2階を住宅としたもの

(名古屋市・熱田区内)



住宅兼店舗の例 - 2

既設住宅の外装だけを変えて1階を洒落た店舗に改造した例

(東京・明治神宮門前町)

7-7 行政の力

インセンティブの項で「効果を期待して計画的に働きかけるもの」と記したが、この具体的な手法は、地域の者で考えることと地域にかなった方法などで行うことを尊重するのが第一だが、インフラストラクチャー(infrastructure: 基本的施設、基盤)の整備や許認可の分野になると、どうしても行政の協力が必要になってくる。

コミュニティー面からのまちづくりを考えると、一定の道路を歩行者空間として整備し、歩行者が快適に歩ける空間を創る必要が出てくる。さらにイベント等で道路の交通を止める許可などの必要も出てくる。これらが可能となれば、来訪者・歩行者が増大する。

これは同時に、生活圏に歩行者が侵入することであり、生活するものにとっては甚だ迷惑なことである。このため既住者の住環境がいたずらに脅かされないような配慮が必要となる。

街路整備にあたっては、ユニバーサルデザイン(universal design: 世界共通の、普遍的なデザイン)の考え方を導入し、バリアフリー(barrier free: 障害者など誰もが支障の無いように設計すること、又はされたもの)な「人にやさしい道づくり」を目指す。

第8章 熱田の杜と共生する知と美のまち

8-1 熱田神宮の役割

熱田神宮が行っている神事は、1年間に約 60 回あり、単純平均すれば5日に1回ぐらいの割合で行われていることになる。神事は、大祭、中祭、小祭などに分かれるが、中でも奇祭といわれる特殊神事が年 10 回ほどある。

祭典は神聖な行為であって見世物ではないが、一般の参拝者が祭事に参列するにしても何が行われているのか分からないよりも、何を行っているのかと興味を持った方が参列しやすい。その何かについて解説してもらえれば、さらに神事や熱田神宮を身近に感じてくる。これは神道の精神を自然と理解することにつながり、日常の癒しにも通じ、人によっては大きな人生訓ともなる。

さらに間接的には熱田神宮界限に人がくることでまちに活気が出るという効果をもたらすことになる。仮にも「門前町」とか「門前街」というならば熱田神宮の祭典を除外するわけにはゆかない。

熱田神宮には世に奇祭などといわれるものも含めた特殊神事が数多くある。

奇祭の代表的なものに「^{えようど}酔笑人神事」がある。この祭の由来は神輿渡御神事と関係があり、天武天皇朱鳥元年(686)に天皇の勅命によって草薙神劍が還座した時、神社中の神職らが一斉に歓喜した様を今に伝える神事である。車座になった神主が大声を上げて笑う神事で、別に「オホホ祭」ともいわれる所以である。毎年5月4日の午後7時から、祭員が一行になって境内の4箇所を回って神事をして歩くが、この神事には祝詞も神饌も用意されない。ただ、歓びを素直に現した珍しい神事である。



酔笑人神事

浄闇の中、祝詞も神饌もなく、ただ、神主の笑い声が響くという奇祭のひとつ。

熱田神宮で最大級の神事に「^{しんよとぎよしんじ}神輿渡御神事」がある。これも前述と同じく神劍還座の縁故による神事である。

神劍が還座の際「都を離れ熱田に幸すれど永く皇居を鎮め守らん」という神託に基づいている。このため「^{しんやくまつり}神約祭」ともいわれている。毎年5月5日の午前 10 時から行われ、^{さいかん}齋館前の広場に整列した神主とその他の祭員が向かい合ってならば、^{たいゆう}対揖(会釈)することから始まる。対揖が終わると一列になって拝殿へ入り、祝詞奏上の後、神輿を中心にして前後に宝物などを手にした祭員らが

再び現われ、神事のためかつての鎮皇門、現在の西門までを行列が往復する。



神輿渡御神事

本殿から、西門(かつての鎮皇門)まで神輿を中心にして参道を進む行列には目を奪われる。



これら以外にも、見て楽しかったり、興味をひかれたりする神事など数多くある。それらは巻末の参考資料に一覧表で説明している。

さらに神事とは別に、熱田神宮で行われる恒例の催事とか奉納にも興味深いものがある。その良い例がアンケートの中でもいわれていた「横綱の土俵入り」とか「春姫道中」などであるが、これ以外のものも含めれば年間 20 回ほどもある。

一般に興味を持たれるものは、恒例になっている「中日ドラゴンズの参拝」、「刀剣鍛錬」、「観月会」などに加え不定期に来られる「有名スポーツ選手らの参拝」などがある。詳細については、これも巻末の参考資料に付けた一覧表を参照願いたい。

また、神事や催事以外にも熱田神宮としての役割がある。それは人々に心の安らぎを与えるもの、地域に貢献するものなどである。特に、これからの日本を担って行く若い人の教育的・文化的な場とか催し物の開催である。

すでに熱田神宮では、第6章でも述べたような様々な教育的・文化的なことを実施しているが、教育・文化の場として最適な熱田神宮であるだけに、今後も世の中の変遷とともにさらに何が必要かを見極め、新たな場の創出を考えて行くべきだろう。これらの新しい場の創造で熱田神宮へ来る人流れも変わるはずである。特に若い人たちが気楽に来られるような場や機会を創るべきだろう。

8-2 名物・名品

地域の知名度を上げるためにも商業的な意味でも、名品や名物がヒットすれば大きな効果がある。それらには、すでにある名物を活かすこともあるだろうが、かつての名物を復活することや故事来歴などを根拠とした新たな名物の創作なども考えられる。

また、名品とか土産物は、土産物屋に置くだけでなく、あらゆる店舗の片隅に置いて販売するこ

とによって地域を上げて活性化に取り組んでいるという意識を持つ効果がある。そのためのもとして、いわれのあるものに因んだミニチュアを創ったり、商品化したりすることが考えられる。

すでに境内のきよめ茶屋で販売されている日本武尊像のストラップや神宮会館の売店に置いてある油取り紙などもその一例である。この油取り紙は、神事に使われる紙垂と同じ麻糸を主原料にして金箔打ちの伝統を活かした方法で作られている。

8-3 史跡・伝承

名古屋市発行の『名古屋市観光客・宿泊動向調査(平成 21 年度)』²⁵⁾で「市内主要観光施設への入込動向」を見ると毎年トップは熱田神宮であり、次いで東山動植物園、名古屋港水族館、名古屋城と続いている。

主要観光施設の月別観光入込客数

(平成 21 年度)

施設名	合計(人)
熱田神宮	6,652,665
東山動植物園	2,284,853
名古屋港水族館	1,725,373
名古屋城	1,352,344

注:『名古屋市観光客・宿泊動向調査(平成 21 年度)』から抜粋。

熱田神宮が観光施設なのかとか、新年初詣が殆どを占めるのではないかなど異論はあるだろうが、とにかく年間を通じて多くの人が集まるということは事実なのである。この多くの人たちに着目しない手はない。

一方で同じく名古屋市発行の『市政世論調査』²⁶⁾、一般的に市民アンケートといわれるものをみると名古屋のよいところとして「歴史がある」

、「名古屋名物といわれる特色ある食べ物(名古屋めし)」があり、他方、名古屋の悪い所として「観光名所が少ない」、「発信情報がうまくない」、「文化、芸術的雰囲気乏しい」などがあがっている。

名古屋地域全体から見ても歴史的な史跡や伝承の多いところは、ここ熱田神宮の周辺といっている。統計などからの意見も勘案し、熱田神宮周辺に多くある史跡・伝承を今一度見直して、必要に応じて案内や説明を整備したり、あるいはルートマップのようなものを整備したりする必要がある。ルートマップなどは様々な機関や団体から何度も幾つも出されているが、各々が勝手に実施していてまとまりがない。

さらに平成 21 年度から熱田区役所が中心となって熱田区内を自転車で史跡・伝承を訪れる趣向でサイクリングマップ(仮称)の整備が行われていて、平成 22 年内には完成の予定となっているという。自転車で走るのも歩くのも基本的には同じなのだから、これがうまくマッチしたマップとなることを期待したい。

既存のマップの中でも、忘れ去られたものも多くある。そのようなものを改めて掘り起こして、既存のものと同様に連携させ、それらを回遊できるようにした歴史的まちづくりもインセンティブのひとつになるだろう。

なお、熱田神宮周辺地域に数多くある史跡・伝承の場所や説明は、参考資料に一覧表として掲載した。



各種ルートマップ

左から時計回りで

- ・「熱田・宮宿 散策マップ」名古屋市市民経済局文化観光部 観光推進室
- ・「歴史と出会う道 名古屋市史跡散策路 案内・地図」名古屋市教育委員会
- ・「熱田ぐるりんマップ」熱田区まちづくり協議会・堀川にぎわいづくり専門委員会

- ・「歴史再発見 あつた 史跡散策路」名古屋市熱田区役所・名古屋市教育委員会
- ・「訪ねてみよう名古屋のいまむかし」(熱田・宮まちルート 西高蔵ー熱田神宮ー神宮前 ①)名古屋市

8-4 歴史まち

風土が歴史を培うというが、熱田の風土から培われた歴史や文化を活かしたまちづくりを考えることは、そのまち自体が歴史になる。すなわち、かつての歴史まちを再生する「歴史まちづくり」である。史実に残されたまち並みが記録になれば、忠実に再現することは不可能である。しかしながら、その時代を彷彿とさせるまち並みとし、道行く人にゆったりとした往時の時代を思い起してもらえるまち並みを造ることはできる。

熱田神宮へお参りに行く道すがら、あるいは近くの商店で買物を楽しむときなどに、自動車などに煩わされず、落ち着いて歩ける道があるといい。そのために地域で協議して、一定の区域を自主規制するような方策を考える。

まち並みができたら、そこには歩いていても退屈しない工夫が必要である。そのひとつに単に商品売るだけではなく、見て楽しく、買って、食べて楽しめる町ができるといい。

伊勢のおかげ横丁の例を引き合いに出せば、伊勢沢庵で有名な漬物屋が丸ごと1本のキュウリに箸を突き刺したものに塩を振って売っているが、これなど外国人も面白がって買い、歩きながら食べている。おかげ横丁のどこかで買って来たのだろう、コロッケを三角の包み紙から食べながら歩いている人も見かける。こんな安くて気楽に買って、気楽に食べながら歩ける雰囲気のみち並みや横丁ができるといい。

8-5 イベント

まちづくりのインセンティブとして、何かに託けたイベントを打つことも効果的である。平成22年の名古屋市の開府400年記念は終わってしまい、熱田神宮創祀1900年は平成25年(2013)に迎えるが、これらに間に合わせるには少々タイミングを逸した感があるが、こういった節目をとらえたイベントを考えてゆくべきである。

また、毎年定期的に行う「恒例イベント」も定着させればなお効果的である。

熱田神宮界隈で、かつて行われていた恒例イベントには、「献灯巻藁(巻藁船)」、「正月の笹竹飾り」、「大山祭」…などがある。



笹竹飾り

名古屋市教育委員会発行『名古屋叢書三編 第五卷』尾張年中行事絵抄上 春之部(正月～3月)から転載

第9章 提言に代えて

9-1 熱田神宮門前街

本研究の締めくくりとして、提言を示す段階に来た。提言は、提言する事業などの場所や時期あるいは費用などについて、ある程度、特定できればそれにこしたことはない。しかし、それを意識するあまり、つい専門的で面白くないものになりがちである。

そうしたことを打破するために、自由な発想とした方が奇想天外で面白いアイデアが出てくるのではないかと考え、従来にない提言の手法を試みた。肩肘をはらず、“市民レベルの発想”として夢を膨らませながら読み流していただきたい。

9-2 熱田の湯（仮称）案

最初は、門前町や地域の活性化を考えると、何といても賑わいが大切であると考え、いかにして人を集めるかについて議論を始めた。

*

「いや参ったね。当然、門前町があると思って行ったら何も無いんだから…。報告書をどう書こうかと慌てたよ」

「だけど、意外な所に思いもかけず立派な門前町もあったよね」

「それにしても、どうしてあんなに大勢の人が訪れる所とそうでない所があるんだろう。極端だよ」

「ああ、極端だ。どうも我々は古い資料を信じこんで出かけた結果かも知れない。長い歴史を重ねているうちに門前町も消えてしまったんだろうね」

「大阪の住吉大社、四天王寺のように道路拡張で消えたところが結構ある」

「ああ、東京の西新井大師なども消えてはいないけど道路拡張が大きく影響している」

「概して、お寺の方に門前町がしっかり残っていた所が多かったように思えたね」

「そう、お寺の縁日に行ってみただけど、驚くほど多くの人出があるんだよね。あれは本当に不思議だ」

「京都・北野天満宮の縁日もすごいよ。確かに縁日というのは何故か人が集まる」

「だったら、神社にも縁日をつくれればいいんじゃないかな」(笑)

「それと、お稲荷さんっていうのも多くの人がお参りに行くよね」

「ああ、愛知県内でも豊川稲荷とか千代保稲荷神社など有名だし、多くの人がお参りに行くよね。だから門前町もしっかりしている」

「豊川稲荷の門前町は浮き沈みがあったけど、最近、また復活してきたみたいだね」

「それにしてもお千代保さんは不思議な神社だったよ。田圃の真ん中のような所にある小さな神社で交通も不便なのに、どうしてあんなに沢山の人が行くのだろう」

「ロコミだよ」

「商売繁盛というのがいいんだ。商売人は儲かればご利益があったということで、仲間にもお参りに行くように勧めるんだろう。まあ、結局はロコミということか」

「じゃ、神社の一角に赤い鳥居を建てて商売繁盛の神様だといえれば大勢が訪れるかも知れないな」(笑)

「神社に勝手な縁日をつくったり勝手に神様を変えたりすることはできないし、ましてや勝手に赤い鳥居を建てるなんてことは問題外だから、我々は境内の外で人が来ることについて述べなきゃ」

「大阪・天満宮には“天満天神繁盛亭”なんて寄席もあったけど、ここは温泉とか？」

「あっ、それ案外いいかもしれない。」

「参拝者のアンケートでも参拝の後にどこかへ行くという回答は多かった。温泉なら気楽に行けるもんね」

「そうだよ、温泉を掘って神社に因んだ何とかの湯とかいって宣伝すればいい」

「伊勢の勢田川沿いに、二見浦で汲んできた海水を沸かした汐湯で“おかげ風呂館”なんていうのがあったし…」

「“熱田の湯”なんて名付けたらいいんじゃない？」

「温泉に併設して、熱田土産の売店などを設けて“身を清めてからお参りに”なんてキャッチコピーをつくれれば、まさに門前町風じゃない。さっきの二見浦なんて昔から参宮者がお参りの前に禊をした海岸だったんだから…」

「一体、どこにつくれるんだよ」

「どこだっていいんだよ。温泉が出て、比較的、熱田神宮に近ければそれでいい。建物を上に伸ばせば面積だってそれほど必要ない」

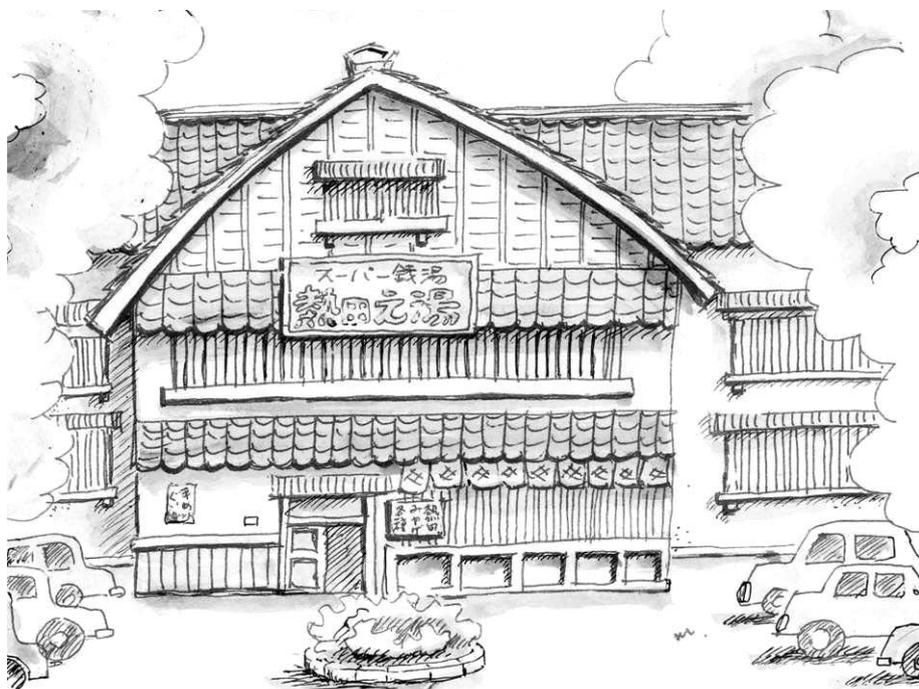
「ただし、ビルはだめだよ。神社建築風の外観の建物にしなければイメージが壊れる」

「ある程度の建物と周囲に駐車場ができるという程度なら、熱田区役所の南でもいいってことか」

「十分、十分」

「ただ、誰かがスポンサーになる必要があるな」

「スポンサー次第ということか」



熱田の湯(仮称) のイメージ

土産物などを売る売店コーナーを設ければ門前町風となる。

9-3 熱田おかげ横丁（仮称）案

一企業だけのプロジェクトでなく、小さくても地域として地元の何人かが共同して賑わいをつくり出す方法はないかを議論した。

*

「伊勢の河崎商人館に行ったとき、“おかげ横丁”にも寄ったけど、温泉でなくても境内の外に一画だけでも人が集まる場所をつくるということも一つの方法だよな」

「“おかげ横丁”なんて大した面積じゃないんだよね。だから、通り道にちょっとした袋小路でもあればいいんだ」

「どこにそんな袋小路があるのか分からないし、地元の人たちの意見も聞かないと勝手に場所は決められないだろうけど、名称は“熱田おかげ横丁”とでもするか」



熱田おかげ横丁（仮称）のイメージ

参道を外れて、ふらりと横道にそれたら、土産物
を売っている店があったり、休憩できる店があったり
する。

夜には、軽く一杯飲める店に変身したりする袋
小路…。

9-4 駅名変更案

アンケート調査の時に気がついたことのひとつに、熱田神宮を参拝するのに正門から入る人が皆無だったことがある。聞いてみると、地下鉄で熱田神宮を訪れる人は「神宮西」駅で降り、「伝馬町」駅は忘れ去られている。これは駅名に問題があると考えられた。

*

「熱田神宮の正門前は、すぐに国道1号線で門前町をつくるほどの余地がないから致命的だ」

「だけど、事例調査で行った東京の西新井大師は参考になる。あそこの門前町は、かつて大きな門前町が環七という広幅員の道路開発で分断されてしまったけど、残された門前だけで頑張っ

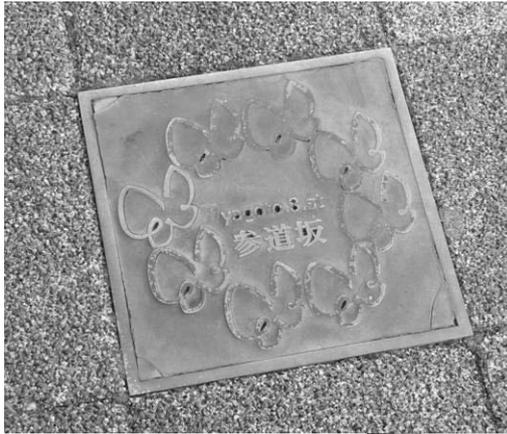
いる。これを見ると、熱田神宮でも門前町はできるんじゃないかなって思うね」
「ああ、観光バスで西門に来てまたバスで帰ってしまう人が、“熱田神宮には土産を買うところもないんですね”といていたけど、売店程度の門前町なら十分可能だよな」
「観光バスをどこで駐車させるかによるけどね」
「それはやろうと思えば案外簡単にできるんじゃないかな」
「折角だから、観光バスだけでなく、熱田神宮に参拝する人すべてを考えた門前町として考えてくれないかな」
「それなら、現在、地下鉄で来る参拝者を伝馬町駅で降りるようにして、正門へ誘導するように考えたらいんじゃないかな。熱田神宮へお参りするのにどちらの駅で降りたら便利かという、距離はほぼ同じなんだ。ただ、神宮西からは長い石垣にそって歩くけど、伝馬町からだとも緑の参道を多く歩けるという違いがある」
「どうやって伝馬町で降りるようにするんだよ」
「交通局に頼んで、熱田神宮前とか熱田神宮に近い駅だと思えるような駅名に変えればいい」
「だけど、伝馬町という由緒ある名前を変えてしまうのは問題だよ」
「いや、変えなくても、熱田神宮前というのを付け加えるだけでもいい」
「簡単にいうけど、難しいんじゃないかな」
「交通局に相談してみればいい」
「そうだよ、すでに名古屋の地下鉄でも駅名に括弧書きの付いた所もあるんだから…」
「それに、事例調査で明治神宮に行ったとき、やはり地下鉄の“明治神宮前”駅に括弧書きで“原宿”とあったな」
「東京と逆で、“伝馬町(熱田神宮正門前)”とすればいいんだ」

9-5 熱田表参道（仮称）案

熱田神宮を参拝するのに正門を通る人が皆無だったのは駅名も原因のひとつだろうが、伝馬町で降りても、どちらへゆけば熱田神宮があるのか分からないのも原因があると考えた。

*

「駅名が解決しても、熱田神宮までの道順が分からなければ、みんな迷うだけだよ」
「だから、それは道標^{みちしるべ}や案内看板のようなものをしっかり整備しなけりゃ」
「国道に道標をつくるのは結構大変だよ」
「大変だからって諦めちゃいけない。だけど、国道を歩かせるのがいいのかどうかだよ」
「そう、車がビュンビュン走る道路沿いを歩かせるより、裏道でも静かな道を歩いてもらった方がいい」
「そうだよ。裏道でも道案内がしっかりしていて、安全で落ち着いて歩けるなら、その方がいい」
「道標というけど、標識だけが能じゃない。事例報告からは外したけど、八事興正寺前の歩道に、“参道坂”という文字の書かれた金属プレートが埋めこんであつたけど、あれもいい」
「東別院の参道のあり方は参考になる。モニュメントだっていいし、鳥居だっていい」



興正寺前の歩道プレートと
東別院参道のモニュメント



「鳥居はいい考えた。鳥居を見れば誰だって神社があると分かるよ」

「問題は、鳥居を勝手に立ててよいものか、ということだ」

「どういう位置づけの鳥居かにもよるだろうね。きちんとした正式の鳥居なのか、単に鳥居の形をしたモニュメント的なもので違ってくるんじゃない。大阪・天満宮の“空飛ぶ鳥居”なんてのもある」

「それでも、実行するには慎重でなければならないよね」

「まあ、必ず鳥居を立てると決めたわけじゃないのだから、それはそれとして、どこを歩かせるつもり？」

「まあ、熱田神宮の正門を出たらすぐに左折れする道でいいんじゃないかな」

「ああ、今でも正門を出るところに、案内看板があって、伝馬町方面は左という矢印などがあるからね」

「あの道は静かだし車もほとんど通らないからいいんじゃない。最近、歩道もきれいに整備されて歩きやすくなったし…」

「だけど逆にいえば、何も無い味気ない道だよ」

「両側は住宅地か…」

「純粋な住宅地でもない。住宅もあるけど、会社の建物、駐車場、それにお寺などが混在していて、何となく中途半端な地域を感じる」

「駐車場用地が1、2箇所あるから、そこに土産物でも売る店が出せるといいんだけどね…」

「それに、歩く人が休めるようなベンチでも店先に置いてあげればなおいい」

「それは人が大勢歩くようになれば自然と出来るんじゃない」

「店が先か、人が先かだよ」

「要はやる気だ」

「やる気があれば出来そうだな」



熱田表参道(仮称)の位置イメージ

地下鉄伝馬町駅から1本北の道を西へ入れば熱田神宮の正門に至る。

「それと、やる気があったとしても、住宅地の道を騒がしくしてしまっっては問題だ」
 「住民アンケートでも、それが一番恐れられている」
 「地域の賛同とか、協力が得られなければ幾らやる気があっても駄目だよ」
 「我々は門前町という、すぐに土産屋が並んでいる通りを想像してしまうけど、何も商店なんかなくても緑などがある落ち着いた通りならそれはそれでいいんじゃないかな」
 「さらに、歴史を感じさせるまち並みとするならいうことない」
 「そんな落ち着いた歩ける道として整備するなら、地元でも賛成するんじゃないかな。名付けて“熱田表参道”というのはどう？」



熱田表参道(仮称)のイメージ

地下鉄の伝馬町駅から1本北の道を西へ入ると熱田神宮の正門に至る。

歴史的な雰囲気のあるまち並みにするといいい。

9-6 熱田地下街参道（仮称）案

門前町あるいは参道は、伝馬町駅から熱田神宮の正門までの道とするだけでなく、それ以外の地区とかルート、方法などもあるのではないかと議論した。

*

「伝馬町の駅で降りた人を正門へ誘導するのは、何も裏道を通す方法だけでなく他の方法だって考えられるよね」

「どんな？」

「例えば、地下街をつかって、そこを通らせるという考えだってあるということさ」

「それは地下鉄の伝馬町を降りてからすぐに地上に出ずに、そのまま地下街を西へ進み、右へ出れば熱田神宮の正門前に出るということ？」

「ああ、左に出れば旧東海道へ出られるしね・・・」

「それをそのまま真っ直ぐ進めば宮の渡しへ行けるということかあ」

「地下街に商店街をつくれれば、それが門前町ということにもなる」

「名古屋は、地下街を作るのが得意だしね」

「地下街でなくても、地下横断道路や歩道橋で1号線を横断できるなら、伝馬町駅を南へ出て、旧東海道側を歩いて熱田神宮へ行くということも考えられる」

「旧東海道に活気が戻るかも知れない」

「アンケートでは、門前町に賛同する回答のもっとも多かった地域だしね」

「伊勢のおはらい町通りの外れに駐車場があって地下道で結ばれているけど、あの地下道は魅力的だよ。あんな地下道にすれば雰囲気が出るし、歩いていても楽しめるよね」

「ああそういえば、浅草の地下鉄を出て仲見世へ行く時も、いかにも門前町方面という飾り付けで自然に門前町の方へ誘導されるよね」

「浅草といえば、駐車場が道路の地下に作られていたよね」

「ヨーロッパでも、観光都市などで用地が自由に取れない所では駐車場を道路の下に設けている所が結構あるよね」

「だったら、単に人を誘導する地下街だけでなく、その両側を駐車場にすればいい」

「ただ、問題は国道の下を簡単に地下街にできるかということだよ」

「それに地下鉄も走っているからそれとの兼ね合いもあるよね」

「実現させるためには相当の調査が必要だ」

「ああ、だけど“熱田地下街参道”という考えはいいと思うよ」



熱田地下街参道 (仮称)の位置イメージ

地下鉄駅を南へ出て旧東海道から地下で横断しても熱田神宮の正門に出られるから、旧東海道沿いのまちが活性化することも…。

9-7 熱田空中門前町（仮称）案

どうせつくるなら、地域の歴史遺産などを活かした門前町やまち並みができれば、他所と違った特色のある門前町になるのではないかと考えた。

*

「また、考え方をガラリと変えて地下ばかりに目を向けず、上空にも眼を向けるべきじゃないかな？」

「また何を言い出すんだ」

「いや、地下は費用が嵩むからと思ったまででね…」

「だからって上空とはどういうことなんだ？」

「ペDESTリアン・デッキさ」

「歩道橋か？」

「いや、歩道橋の発想だけど、それより幅のある空中広場みたいなものを考えるのさ。そのデッキの上に商店街をつくれればそのまま門前町になるかなってね」

「伝馬町からか？」

「それもいいけど、熱田神宮から宮の渡しへ一直線に伸びる道があったけど、今は忘れ去られている。それは国道によって分断されたからなんだけど、昔の道路を空中に再現すれば面白いよ。デッキのちょうど真ん中に立って北と南を見れば、熱田神宮と宮の渡しの関係が一目瞭然だ。堀川まちネットのグループが考えている“参道プロジェクト”をもっと大掛かりにして国道を越す歩道橋の幅を思いっきり広くして橋の上に門前町をつくったらいいと思うんだ」

「歩道橋の上の門前町なんてとても無理な話だよ」

「だけど、世界的な視野で見れば、イタリアのフレンチェにあるポンティヴィキオ橋の例だってあるんだ。規制緩和だよ」

「それが出来て、デッキの中ほどから旧東海道へ降りる分岐を付ければ、“熱田地下街参道”でなくて地下鉄から歴史まちの道を歩ける門前町ができる。まさに”熱田空中門前町”だ」



熱田空中門前町(仮称) のイメージ

熱田神宮と宮の渡しを結ぶ道に大歩道橋を設け、橋の上に門前町をつくる。

途中、旧東海道から上がり下りできるようにする。

9-8 ペDESTリアン・デッキ商店街(仮称)案

参拝者アンケートや住民アンケートの中でも「熱田神宮前商店街の活性化が一番」という意見があった。研究員も、その考えを否定するものではなかったが、調査によって何ともし難い商店街の実態を知ると、簡単でないことも分かってきた。

そこで商店街に対して間接的にでも影響を与え、商店街が自ら動き出す機運をつくり出す方法でもないかと考えた。

*

「ペDESTリアン・デッキの発想は、ヒアリングであちこち聞き歩いたとき、住宅供給公社の尾崎理事長がいていた話と通じるところがある」

「どんな？」

「デッキを名鉄神宮前にある市バスのターミナル上空をデッキにすればよいということさ。そうすれば名鉄電車を降りた客が道路を横断せずに熱田神宮へ入っていけるのではないかというんだ」

「なるほど、市バスのターミナルの上なら広場が出来るから商店だってできるか」

「それにデッキを北の方へ伸ばせば、熱田区役所の南の開発用地に近くなるなあ」

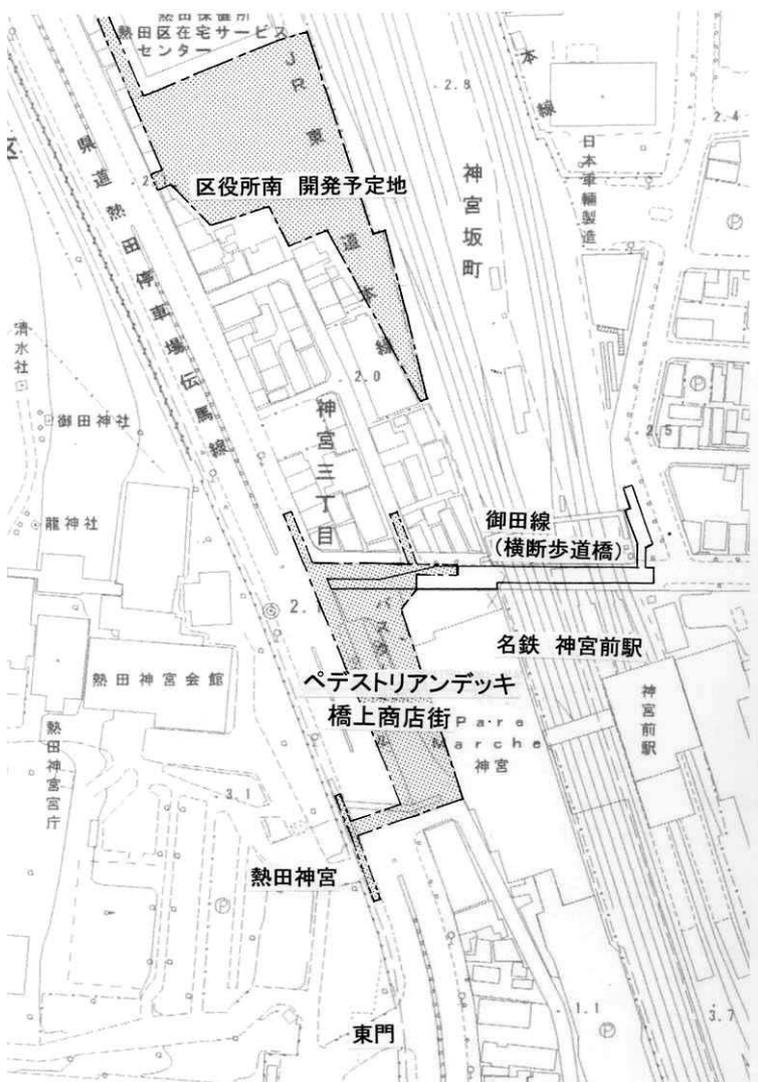
「そう、御田踏切が今年度(平成22年度)にも工事が始まり歩道橋が整備されるという。それが完成すれば踏み切りは廃止されるということだから、そうなれば北へデッキを伸ばしやすくなる」

「その先には、区役所南の開発用地があるから、そこを観光バスの駐車場とすればいい」

「そうか、そうなればシャッター街となっている熱田神宮前商店街の前を歩く人が、当然、多くなることが考えられる」

「商店街の人たちは、自分の店を何とかしなければ、と思うようになるに違いない」

「“ペDESTリアン・デッキ商店街”で既存商店街の活性化につながるということか」



ペDESTリアン・デッキ商店街 (仮称) のイメージ

名鉄神宮前駅東のバスターミナル上をペDESTリアン・デッキ化し、橋上商店街をつくる。

デッキは北へ伸ばし、開発予定地に近づけて、既存商店街の活性化を図る。

9-9 熱田神宮西・門前街（仮称）案

熱田神宮の南側と東側について色々と考えてきたが、西側についても何か考えられないかと議論した。

＊

「地下鉄の神宮西駅で降りる人のための門前町というものは考えられないかな？」

「それは無理だろう。熱田神宮の石垣と広い国道 19 号線しかないんだから」

「いや、石垣の前に商店ができればいいんじゃないのか？ あそこの歩道は幅が広いんだから…。少なくともお祭のときに露店が並ぶだけでもいい」

「今でもお正月などには露店は並ぶよ。それにしても、いくら歩道が広くても商店を並べられるほどはないよ」

「だったら、国道の車線を減らせばいい。あそこの車線数は多すぎるよ。車の流れをみてみろよ。信号で止められた車が一齐に走り抜けるとガラんとした道路になってしまうよ」

「結構、交通量の多い時もあるよ」

「そりゃ、そういう時もあるさ。だけど、それも信号で止めるから混雑するんで、信号がなくて常に流れていけば渋滞になんかならないさ」

「田淵寿郎さんだって、火災によるまちの類焼を防ぐなど災害を考慮して広くしたんで、交通量だけならあれだけなくてもよかったといっているくらいだから、趣旨を理解して実施すれば車線数は減らせるはずだ」

「そうはいつでも信号を無くす訳にはゆかないだろう」

「いやいや、真ん中の車線を掘割にして交差点を立体交差にすれば信号は要らなくなるさ。幸いにして、この 19 号線を始めとして名古屋市内幹線道路の信号交差点は学校の運動場ぐらいの広さがあるから、簡単ではないにしても、切り返しながらやれば道路敷地内だけで交差点のミニ・インターチェンジ化も不可能じゃないと思うよ」

「そうすれば 1 車線分でも 2 車線分でも歩道を広げられるから“神宮西・門前町”をつくる余裕もでてる。これは門前町ばかりでなく通過交通のスムーズな流れができるし、掘割に簡単な人道橋を渡すだけで階段を昇り降りする従来の横断歩道橋がなくなるから、高齢化社会にマッチするし、広幅員道路による地域分断という問題を解決できるという余録もある」

「視点を変えて考えれば、門前町に商店が無ければいけないということは無いんじゃないか？」

「ちょっと、商店の無い門前町も考えてみようじゃありませんか！」

「それも一つの考え方だね」

「熱田さんは、昔はもっと広がったのに戦後の都市計画でずいぶんと削られ狭くなってしまった。その罪滅ぼしではないんだけど、熱田さんの西側（伏見通り）や東側（旧電車道）は歩道自体がかなり広くつくられている。そこで、この広い歩道の車道よりも緑の土手と将来に向けて巨木の並木道を作ったらどんなもんだらうか？」

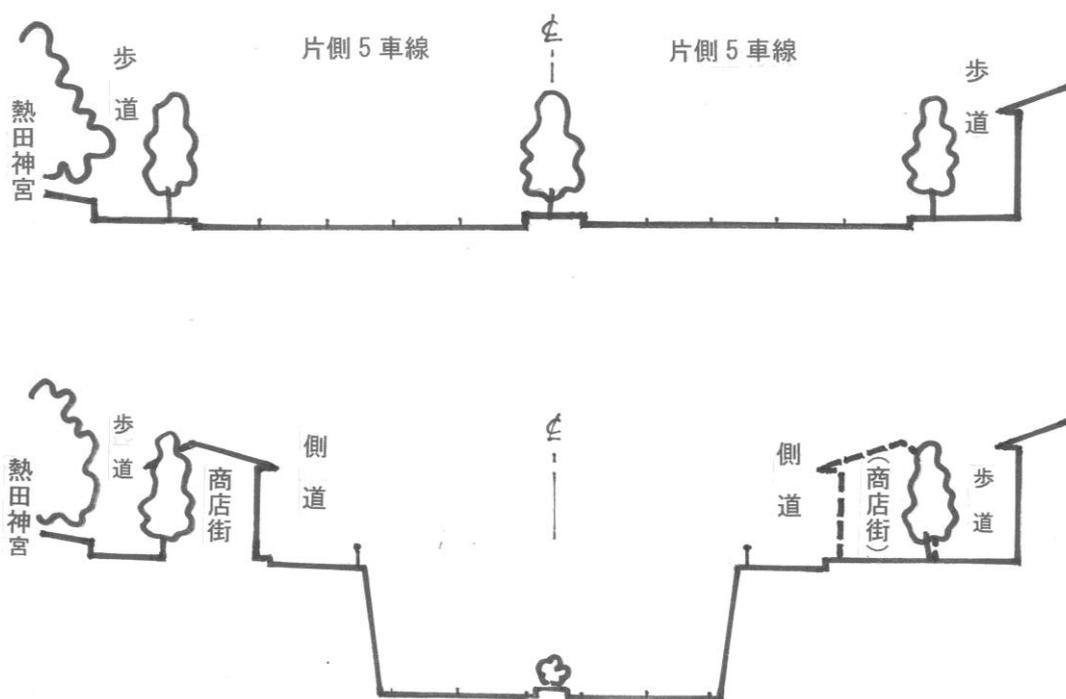
「そうだ、土手で騒音が遮断されるから熱田神宮には昔の静謐さがよみがえり、市民には素敵な散歩道が出来、温暖化抑制効果や雨水の循環にもつながるよ」

「それが神宮へのアプローチになるんじゃないだろうか」

「色々なアイデアがあると思うけど、前提となる掘割案は、熱田神宮の辺りだけで実施しても市内通過交通をスムーズに流す効果は上がらないじゃないかな」

「確かにそのとおり。だけど、これは門前町のためだけでなく名古屋市内の通過交通のあり方、今、話題になっている環境対策の面からも検討してみてもいいことだと思うよ。ただ、田淵寿郎さんが考えていた災害時のことも十分に考慮しての上でのことだろうけどね」

「特に、名古屋市内の大きな事業は、地下鉄や都市交の整備が一段落すると次の事業がなくなってしまうので、何か、適切な予算配分に配慮しながらも一定期間を掛けて次の時代に備えるべき事業を考える必要もあるんじゃないかな」



熱田神宮西門前町(仮称)のイメージ

中央車線を掘割にし、交差点は立体交差とすれば信号で止まる必要がなくなり、車線を減少できる。空いた車線には、商店街や樹木を植えたマウンドをつくらたりできる。

9-10 門前街への支援

いくら門前町が整備されようが、門前町だけで機能することはまずない。門前町を取り巻く環境が、門前町を支援することでさらに賑やかになり、活気づいてくるものである。そのために様々な支援策も合わせて考えた

*

「“提言に代えて”なんていって、随分と無責任で勝手なことをいつてきたよね」

「勝手なことをいつてきたかもしれないけど、気持ちとしては門前町が出来るといいなとか、熱田のまちにもっと活気が出ればいいなと思っていることに変わりはないんだ」

「我々の勝手な思いが門前町になって実現するとは思っていないけど、門前町へのアイデアは様々なものがあることが分かってきた。この色々なアイデアが基になって、ひとつでもどこかで取り入れられるとうれしいね」

「それと、“提言に代えて”といういい方をしているけど、まさにこれは提言なんだよ。そして、もし門前町が出来てもそれに付随したものが連動しなければならないと思うんだ。それも述べておくべきじゃないかな」

「どんなことがある？」

(1) 名物・名品を創る

「熱田神宮の周辺で名物といえば、ひつまぶし、宮きしめん、きよめ餅といったところが定番。ひつまぶしと宮きしめんは昼ごはん。そうするとお土産はきよめ餅しかないのはいかにもさびしいなあ」

「熱田神宮クラスとなると、もっといっぱいあってもよいのではないか。伊勢神宮にはいっぱいある」

「伊勢神宮には、あとからつくった名物やお土産がいっぱいある」

「知ってる？事例調査に行く時の手土産にきよめ餅を買って行こうと名古屋駅のキオスクに寄ったんだけど、他県の名物は山積みになっていてすぐに分かるけど、きよめ餅はすみっこに置かれていて探さなければ見つからない。問題だよ」

「それならまだいい。熱田神宮と道一本挟んだ所で他県の名物を売っているのは許せないよ」

「それこそ問題だ。それって熱田神宮のお土産と勘違いしてるんじゃない」

「インパクトのある熱田名物がないからなんだろうな。確かに、もっと知名度の高い熱田名物が必要だ」

「事例調査で行った四国の金比羅さんでは、“幸福の黄色いお守り”と“ミニこんびら^{いぬ}狗”のセットがよく売っていたし、境内で売っている“こんびら^{いぬ}飴”（正式名称は五人百姓の^{かみよ}加美代飴）も名物になっている」

「お守りも立派なお土産になるということだ。熱田神宮でも第二の“勝ち守り”を頑張ってもらおうと面白い」

「ひつまぶしと宮きしめんが昼の食べ物だといってたけど、“熱田鶏飯”なんて復活できないだろうか。東海道を旅するたくさんの方が食べていたというあれさ。江戸時代、熱田鶏飯は間違いなく熱田の名物だった」

「蜆汁も一緒につけてね」

「伊勢にあった神饌^{みけ}井のように、同じ名前の“熱田鶏飯”だけど店毎に特色があって、どんな物が出てくるのか期待できるという楽しめる名物は面白い。これは、お菓子にだって考えられる」

「これも事例調査で行った安土のことだけど、“負けず^{つば}の鏢”を模した^{もなか}最中が名物になっている。あれは織田信長が桶狭間の戦いに出かける前、全軍の将兵を奮い立たせるために投げた永楽銭が全部表になった、という伝説にもとづいたもの。本来ならば、熱田神宮の名物になってもおかしくないはずなのに、安土に先を越されてしまっている」

「熱田神宮は、信長物のお土産や名物があってもおかしくない」
「パワースポットがもてはやされている今、“負けない”と“勝ち”かというのはよいコンセプトだ。負けずの鰐を最中以外の商品に応用できないだろうか」
「“勝ち守り”があるくらいだから、何かできる」
「昔の話などに因んだお菓子もいい」
「以前からも話題にしてきた”熱田名物・勝ち栗”、信長塀をイメージしたミルフィーユ・“信長塀”、故事に因んだ“銘菓・熱田一番”や“銘菓・氏名が長命”なんていうのもある」
「まだまだ、信長塀とか楊貴妃伝に因んだお菓子など、アイデアは色々あるけど、それよりも問題は、誰がつくり、誰が売るか、だ。どこで売るか、も問題だけど…」
「一軒でもいいから新しい土産屋ができれば、そこで熱田鶏飯を売ったり新しいお土産を売ったりすることができるんだけどなあ」
「新しい名物やお土産を考えることよりも、誰がやるかの方がよっぽど大事だ」
「こういうのは神頼みではできない」(笑)
「人任せばかりじゃ提言にならないな」
「神頼みばかりでもだめだ」
「その通り。だけど、本気でやってくれる人を探さないといけないな。そういう人を応援しようよ」
「今、この調査研究グループとは別なグループで、NPOを立ち上げようとしている。健康、観光、環境が基本コンセプトのグループだ。報道機関、IT企業、民間企業、大学、行政など、いろいろな人がいる。“熱田神宮に門前町を…”の話をしたら、大乗り気だ」
「3Kのグループだな。そりゃ、頼もしい」
「だけど、すぐにできるわけじゃないし、続けるためにはよほどの仕掛けがいる」
「そりゃ、そうだ」
「向こうからの提案がある。この研究会、本年度で終わってしまうけれども、この先もずっと連携してやっていこう、というものだ」
「このプロジェクトは、うまくいったって何年もかかる。息の長い取り組みが必要だ」
「しばらく続けましょうよ」
「賛成、賛成」

(2) 史跡・旧跡（歴史まちづくり）

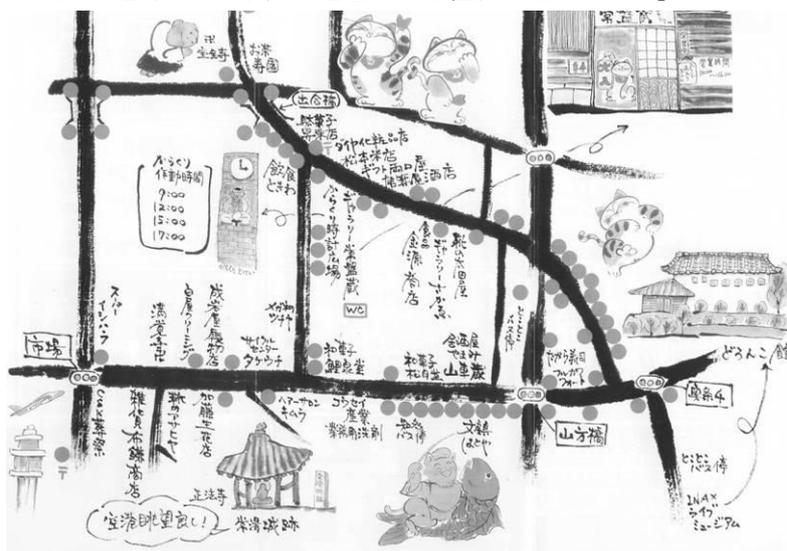
「熱田神宮の周辺にある多くの史跡は大きなポテンシャルを持っていると思うけれど…」
「何とか活かしたいよね。歴史まちづくりとかに取り入れられないかな」
「かつては建物などがあっただろうけど、今行くと説明看板だけというのは何かわびしいよね」
「建物を復元すればいいんだ」
「単に復元だけなら、偽物感が付きまとう。本物に勝るものはないんだから…。それと効果に対して費用が掛かりすぎるといことも考えなきゃ」
「あちこちに散らばっている史跡などを関連するものとか、一定範囲のものとかグループ別に整理して、それらを結ぶような歴史ルートを重点的に整備すべきだろうね」

「そうすれば、それが歴史まちにもなる」

「歴史まちを考えると、昔のまち並み再現も重要だけど、名古屋って銅像が少ないと思わない？」

「そういえばそうだ。地元の偉人らを若人に周知でき、観光誘致のパフレットに使い、観光客の写真題材にもなる偉人・英雄などの“銅像の創設”は考えてもいいよね」

「それと、色々なルートマップが乱立しているようだけど、それらとは別に 1 枚ものでいいから洒落たデザインのもっと簡潔なものをつくって、どこでも手に入れられるようにして、地域を訪れる人々に“ちょっと寄ってみようか”と思わせる仕掛けをしたいね」



簡単なルートマップの例

「陶器彫刻のある散歩道 とこなめ中央商店街マップ」(部分)から

(3) イベントの開催

「門前町をつくる場合や地域を活性化する場合には、何かイベントのような切っ掛けから始めるのがいい」

「そう、色々なイベントを打って、それらの中で何か大勢の気持ちが動いたものがあれば、それを繰り返すとか発展させるのがいい。ド祭(ど真ん中祭)はいい例だ」

「熱田神宮から伊勢神宮へのマラソンは既にあるから、ウォーキングはどうだ？」

「そうだ、“桶狭間凱旋ウォーク・ラリー”なんていいね。桶狭間から熱田神宮まで甲冑を着て歩くのさ」

「ばてちやうよ」

「桶狭間から熱田神宮までは直線で約 10 ㎞だから、手頃かも知れないな」

「あちこちの神社やお寺でコンサートを開いている例を聞くけど神社の境内などはコンサートをするにはいい雰囲気だよ」

「今、全国的に人気が出た“名古屋おもてなし武将隊”のパフォーマンスを熱田神宮の大前(拝殿前の広場)で行えば多くの若者が集まると思うよ」

「ああ、あれは人気が出たよね。あれを真似て全国各地で同じような武将隊ができたり、武将を PR に使ったりするところが続出した。“金沢おもてなし隊”や行田市のおし^{おし}“忍城おもてなし甲冑隊”など

“名古屋おもてなし武将隊”とそっくりだ」

「そうはいつでも、熱田神宮の境内では難しいかな…」

「それが打破できたとき、熱田神宮も周辺地域も大きく変わるときだろうね」

「そんな悠長なことをいってる時ではないと思うけどね…」

(4) 熱田神宮は美人の神様

「それに、熱田神宮だってもっと多くの人々が参拝に来てくれるような努力もして欲しいな。それは熱田神宮の問題かも知れないが、地域にも大いに関係することだもの」

「具体的に何かあるの？」

「色々あるんだけど、とにかく今はパワースポットがもてはやされている。すごく不便なところへも大勢行くという。中部地方でよく出てくるのは伊勢神宮だけで、名古屋地域は出遅れている感じがする」

「これは熱田神宮でも、ぜひ取り組んでほしい」

「すでに清水社がパワースポットだと掲載されているものもあって、楊貴妃伝の説明もあるから、そのうち雑誌でも取り上げられるんじゃないかな」

「それでか、今年の初詣に清水社に行ってみたら長蛇の列だったのは…。だけど、柄杓で水を掛ける場所は2人しか行けないから、もっと広げればいいと思うよ」

「なかなか行けないところがいいところじゃない」

「事故が起きるよ」

「“神様の御前です。お並びください”と書いた看板でも立てれば済むんじゃない」(笑)

「インターネットで調べると、伊勢神宮のほかにも、鳳来寺山が有名だが、いかにも遠い」

「市内では恋の三社めぐりが有名だ。高牟^{たかむ}神社、晴明神社、城山八幡宮の3つで、縁結びにご利益がある」

「それはみんな千種区だ。我々のねらいは、あくまでも熱田神宮」

「今回の調査でもわかったように、熱田神宮の楊貴妃伝説はたしかにおもしろい」

「楊貴妃は絶世の美女。清水社のご利益は眼がよく見えるようになる、というものだが、近年は、楊貴妃にあやかって、美人になれるというご利益も加わって、若い女性には人気らしい」

「“享禄古図”(p.16)には、楊貴妃の供養墓も本殿の裏にしっかりと描かれていることをもって知ってもらおうといい」



「享禄古図」(部分拡大)

図の中央よりやや左上が楊貴妃の供養墓

「そりゃそうだ。熱田神宮のパワースポットは美人の神様、なんて普及するかもしれないな」
「楊貴妃は美人と定評だけど、宮簀媛命も美人だった」
「ほんとか？」
「だって日本武尊が一目ぼれしたぐらいだから美人だよ」
「由良御前も美人だった」
「源義朝が一目ぼれか？」
「お亀はどうだ」
「お亀がどうして美人だといえるんだ」
「美人だったかどうかはわからないが、たいへんな人気者だったらいい」
「今でいうアイドルか」
「お亀が目当てで熱田鶏飯を食いに来た人もいたんだろうな」
「名物やお土産も大事だけど、こういう物語もあるといいなあ」
「そうすると、やはり熱田神宮は美人の神様か」
「熱田神宮は草薙の剣があるから、ずっと武の神様だった。素戔鳴尊から日本武尊へ、さらに頼朝、信長という流れもそれに符号する。それはそれでよいが、楊貴妃からお亀にもスポットライトが当たると、神宮は美人の神様にもなれる」
「京都の泉涌寺せんにゅうじにある楊貴妃観音は有名だ」
「あちらは観音様で仏教だ。こちらは熱田神宮で神道だ」
「天照大神から宮簀媛へ、さらに楊貴妃、由良御前、お亀と続けば、熱田神宮は美人の神様だけでなく縁結びの神様としてもうってつけだ。これに恋の三社めぐりを掛け合わせれば、こりやおもしろい」
「男は男らしく、女は女らしく、って古いけど、好きだなあ」
「あんまり調子に乗ると、男女平等なんかからしかられるぞ」
「こういう話はどんどん脱線する。本論にもどうぞよ」

(5) 熱田神宮にお願いしたいこと

「熱田神宮の駐車場が広いのも善し悪しだよ。車で来るから周辺の商店街に立ち寄らないんだ」
「確かに、熱田神宮には大きな駐車場があることが知られていて、それがかえって車で来る人を助長している節がある」
「結婚式やご祈祷に来る人は無料にするにしても、お賽銭だけの人はせいぜい30分までにして、それ以上は有料にでもしないとね…」
「多少費用は掛かるけど、無人駐車場用のゲートを設置すれば済むことじゃないかな」
「それに、区別は難しいだろうけど、身体障害者や高齢者は無料にしなければね」
「障害者や高齢者といえば、車椅子を押すのに玉砂利の参道はきついという話があったよね」
「分かるけど、神社という特殊性を考えれば仕方がないんじゃないかなあ」
「でも、参道の両端を少し舗装すれば済むんじゃないかな？ それも三和土たたくにすれば違和感がな

いよ」

「それが出来れば、ベビーカーも楽になるし、若い女性のヒールの高い靴も傷まないと喜ばれるよね」

「それと、一之御前社にお参りできるようにしてほしいね」

「どこの話？」

「熱田神宮のご本殿のすぐ西にあって天照大神の荒魂^{あらみたま}を祀っている摂社のひとつだ」

「荒魂というからには、その反対の社もあるということ？」

「そのとおり。神様には、もともと荒く猛々しい神霊と柔和などの徳を備えた神霊とがあり、それらをそれぞれ荒魂^{にきみたま}・和魂^{とおすのやしる}といっている。徹^{とく}社^{しゃ}というのが正参道の途中にあって、天照大神の和魂が祀られている。そこが近くに寄ってお参りが出来ることを考え合わせれば、荒魂を祀る一之御前神社へのお参りが近くで出来ないのは、片手落ちと思うんだ。」

「まだあるよ。登録文化財の開放をお願いしたい」

「登録文化財って？」

「熱田神宮の境内には、龍影閣と又兵衛という2つの登録文化財があるけど、あまり一般には開放されていなくてもいい。熱田神宮でも、昨年から、何とかしようという動きはあるようだけど、自由に見られるように解放したらいいと思うんだ」

「だけど、あまり自由に開放してしまうと荒らされるんじゃない」



登録文化財「龍影閣」

正面玄関と御座所



「そこは、考えながらやるのさ。たとえば境内案内のボランティアが付いていればいい、というようにでもすればいい。日時を決めてツアーを行ってもいい」

「武道館も熱田神宮には似つかわしいよね」

「そうだ、熱田神宮は神体が草薙神剣であり、武の神様ともいわれている。信長が戦勝祈願をしたぐらいだから熱田神宮に武道館がないこと自体、不思議だよ」

「でも、市内には武道館がすでにあるよ」

「確かに、難しい面はあるかもしれないけど熱田神宮の境内にあるというのは何となく似つかわしいと思わないか」

「一理はあるな」

「熱田文庫の拡充っていうのはどう？」

「熱田文庫って？」

「熱田神宮には、図書館といったらいいか…、貴重な資料のある熱田文庫というのがあるけど、一般にはあまり知られていない。もっとも現在では閲覧する場所もないような状態だから仕方がないけど、これももっと自由に閲覧できるような場所やシステムができれば文化的な面で大きく貢献すると思うんだけどな」

「それと、参拝者のアンケートの時に多く出た情報が欲しいっていうのに何か応えてほしいよね」

「熱田神宮の情報は、色々なところで得られるけど、今一つなんだな。参拝者のアンケート調査でも相撲の土俵入りを事前に知りたいなんていう要望もあったけど、そういった情報を発信することをもう少し考えてもいいと思うよ。たとえばNPO法人の堀川まちネットが発行している『あつたっ子』なんていうタウン誌に頼んで情報を載せてもらったりすれば、まちの各所で熱田神宮の情報が得られることになる」

「さらに、デジタル・サイネージ(digital signage:電子掲示板)などの導入をすれば名古屋駅や栄で今日の神事や催しを知ることができる…」

「タウン誌に情報を載せてもらう考えはいいね」

「最後に、事例調査で色々な神社に行ったけど、どこの神主さんも親切に対応してくれたよね。熱田神宮でもあんな対応してくれるかね」

「大きな神社では大勢を相手に懇切丁寧に対応していたら切がないよ」

「そういう問題じゃないと思うよ。もしも、そういう考えをしているのなら“お高くとまっている”という話が現実味を帯びてくる」

第 10 章 おわりに

“熱田神宮の門前町…”という研究テーマを 5 名の研究員で始めたとおもったら、あっという間に 10 ヶ月が過ぎてしまった。十分な討議や研究をするには余りにも短い期間だったと思う。だが、短かったからこそ精力的に動けたという面からいえば、我々怠惰な者にとっては、それでよかったのかも知れない。

我々研究員は、調査の過程で様々なことを改めて知ることができた。

熱田神宮や地域の歴史から、熱田のまちが考えていた以上に色々な変革を繰り返してきたことを知ったのもそのひとつだが、参拝者アンケートで、若者だけでなく中高年までが熱田神宮について、いや日本国家の成立を綴ったともいべき『記紀』について驚くほど知らないという事実には衝撃すら覚えた。

また、商店街について調べれば調べるほど、周辺環境の変化や経営者の高齢化など様々な要因によって、周囲が考えるほど簡単に活性化できるものでもないことも知った。

このような調査の経緯もあって、本報告書は、熱田神宮や周辺の歴史について力を入れたものになった。さらに、若い人たちにも読んでもらえるようにと、できるだけ専門用語を避け、難しい漢字、特に固有名詞にはルビを多く振り、平易な文章を心がけた。

心残りといえば、本当の意味でいう提言まで行き着けなかったことである。負け惜しみをいえば、「提言に代えて」という形にして結果としては、かえってよかったのではないかと思っている。堅苦しい「提言」より、若い人達には気楽に読めて、なるほどと思っていただけのものになったのではないだろうか。

長くも短かった研究期間のあいだ、新しい知識が得られた喜びや研究員間のディスカッションを大いに楽しませていただいた。こんな機会を提供してくれた都市センターの職員の方々や調査などでお世話になった多くの方々にお礼を申し上げたい。

參考資料編

Ⅲ 参考文献・参考資料 < 目次 >

1 参考文献	1
2 参考資料	2
2-1 事例調査報告	2
(1) 名古屋市・覚王山日泰寺	2
(2) 名古屋市・真福寺(大須観音)	3
(3) 愛知県・豊川閣妙巖寺(豊川稻荷)	4
(4) 岐阜県・千代保稻荷神社	8
(5) 三重県・宇治山田市・伊勢神宮・豊受神宮(外宮)	10
(6) 三重県・伊勢市・伊勢崎商人館・川崎まちなみ館	10
(7) 三重県・伊勢市・伊勢神宮・皇大神宮(内宮)	13
(8) 滋賀県・安土城址	14
(9) 京都市・平安神宮	15
(10) 京都市・粟田神社	15
(11) 京都市・清水寺	16
(12) 大阪市・住吉大社	17
(13) 大阪市・四天王寺	20
(14) 大阪市・大阪天満宮	21
(15) 大阪市・今宮戎	23
(16) 兵庫県・大石神社	23
(17) 兵庫県・西宮神社	24
(18) 香川県・善通寺	26
(19) 香川県・金刀比羅宮	27
(20) 東京都・足立区・西新井大師	30
(21) 東京都・渋谷区・神社本庁	33
(22) 東京都・渋谷区・明治神宮	34
(23) 東京都・台東区・金龍山浅草寺	35
(24) 千葉県・成田山新勝寺	36
(25) 千葉県・香取神宮	38
(26) 茨城県・鹿島神宮	39
2-2 アンケート質問内容	42
2-3 神事・祭典	48
2-4 奉納・催事	52
2-5 史跡・伝承	55
2-6 名物(食べ物)	67
2-7 土産物【復刻土産案】	70

Ⅲ 参考文献・参考資料

1 参考文献

- 1) 藤本利治著『門前町』(株)古今書院・昭和 45 年5月 15 日
- 2) 川村善之著『日本の町並み集落 1300』(株)淡交社・平成
- 3) 井上光貞責任編集『日本書紀』中央公論社・1983 年5月 20 日
- 4) 熱田神宮宮庁『熱田神宮』平成 20 年 5 月 30 日
- 5) 熱田神宮宮庁『熱田神宮大宮司家諸系譜』平成4年3月 17 日
- 6) 熱田神宮宝物館「熱田神宮の歴史」平成 16 年7月
- 7) 熱田神宮朱鳥会・遷座祭奉祝事業朱鳥会実行委員会編『熱田神宮参拝の手引き』平成 21 年 9 月 17 日 及び名古屋市『新修 名古屋市史 第二巻』平成 10 年 3 月 31 日
- 8) 熱田神宮朱鳥会「朱鳥たより」第 11 号・平成8年2月 1 日
- 9) 熱田神宮宮庁『角田忠行小伝』平成元年2月 28 日
- 10) 「中日新聞」及び「朝日新聞」昭和 61 年(1986)1 月 22 日並びに裁判記録
- 11) 尾崎久弥著『熱田神宮史料考』(株)大雅堂・昭和 19 年8月 30 日
- 12) 名古屋市『新修 名古屋市史 第二巻』平成 10 年 3 月 31 日
- 13) 名古屋市『大正・昭和 名古屋市史』巻9・昭和 30 年7月 1 日
- 14) 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路 I 』大明堂・昭和 53 年3月 27 日
- 15) 名古屋市土木局・河川浄化対策室編集発行『タウンリバー堀川』・昭和 59 年4月
- 16) 熱田神宮周辺の地図(大正 15 年度新版)
- 17) 熱田神宮朱鳥会「朱鳥たより」第 12 号・平成8年8月 20 日
- 18) 名古屋市交通局『市営交通 70 年のあゆみ』平成4年8月1日
- 19) 名古屋市交通局『市電写真集・名古屋を走って 77 年』昭和 49 年・3 月 31 日
- 20) 熱田神宮宮庁・熱田神宮林苑保護委員会『調査報告書』昭和 53 年 1 月 20 日
- 21) 名古屋市農政緑地局『生きている 文化財なごやの名木』昭和 59 年 3 月
- 22) 熱田神宮宮庁『緑陰あった』(熱田神宮緑陰教室 60 周年記念)・平成 22 年7月 29 日
- 23) 名古屋市計画局『戦災復興誌』昭和 59 年 3 月 30 日
- 24) 名古屋市総務局『なごや 100 年』(市制 100 周年記念誌)・平成元年 10 月1日
- 25) 名古屋市経済局『名古屋市観光客・宿泊動向調査(平成 21 年度)』平成 22 年 12 月
- 26) 名古屋市市民経済局『第 48 回市政世論調査』(平成 21 年 10 月～11 月調査)

その他全体アイデアの参考にした文献を次に掲げ、謝意を表す。

- ・ 藤田邦明著『街づくりの発想』学芸出版社・1994 年6月 10 日
- ・ 青木仁著『日本型魅力の都市をつくる』日本経済新聞社・2004 年3月 10 日
- ・ 山口貴久男著『西欧のアメニティ・ストリート』(株)中央経済社・平成元年5月 20 日
- ・ 玉置次郎著『日本都市成立史』理工学社・昭和 49 年 4 月 30 日
- ・ 山田雅夫著『都市(まち)なぜなぜおもしろ読本』(株)山海堂・2003 年 12 月 25 日

- ・ 地方史研究協議会編『日本の都市と町ーその歴史と現状』雄山閣出版(株)・昭和 57 年 10 月 20 日

2 参考資料

2—1 事例調査報告

(1) 名古屋市・覚王山日泰寺

所在地：〒464-0057 名古屋市千種区法王町 1-1 電話 052-751-2121

対応者：二宮(千種区山門町 二宮豊店)

概要：明治 37 年(1904)創立。この年、日露戦争勃発、国内唯一の無宗派寺院。1898 年に英領インド(現ネパール)で発見された仏舎利の真骨を譲り受けたタイ国王からさらに分与を受け、それを奉安するために、いずれの宗派にも属さない単立寺院として日本仏教全宗派が協力して創建。釈迦を表す覚王が山号。住職は 19 の宗派が持ち回り。「覚王」は「覚りの王」でお釈迦さまのこと、「日泰」は「日本とタイ(泰)」の意味である。

感想：日泰寺の毎月の縁日である 21 日に調査に行った。当日は小雨模様の天候であったが参道を始めとする周辺は多くのお年寄りで賑わっていた。参道の両側には露天商が並んでいて、様々なものが売られていた。もともとあった参道の商店も店を開いているが数は少ない。店舗でない家の前はすべて露店が店を広げているように見えた。それは山門を入った境内にも続き、本堂へ上がる坂の下まで続いていた。

本堂では法要でも行われているかと思ったが、何も行われておらず、ご本尊の両翼には絵が掛けられているだけで一般的なお寺の本堂とは様相を違えていた。また、本堂へ上がるのも、階段に代わってスロープとなっており、一般的な本堂の下から階段を上がるのと違っていた。手押し車を押しながらやってきたお年よりも、それを押しながらなんなく本堂の中まで入られる配慮なのだ。そんなせいも、多くが入れ替わり立ち代り頭を下げてお参りをしていた。



覚王山参道の縁日に並ぶ
露店

一通り参道を往復した後、参道の入り口付近の二宮畳店の二宮氏を訪れ、話を聞いた。かつてはこの参道に日常の買い物ができる店舗も多くあったというが、今は昔からの店はないという。このため生活している者、特に年寄りには日常の買い物に遠くまで行かなければならなくなり困っているという。営業している店も、新たに借りて営業を始めた店ばかりだという。新しく店を開いた者は借金をして始めているので必死で儲けようとするあまり地域には目が向かず、地元の者からは「地域に貢献しない」といわれている。

参道は、5、6年前までは日泰寺の私道だったが水道などを始めとする道路管理が大変で市へ移管された。移管後、市は宗教色のある道路は管理できないとし、参道の入口や途中にあった燈籠をすべて撤去してしまい、無味乾燥な参道となってしまった。顔がなくなったようだと、最近、日泰寺では広小路通りに面した土地を購入して「日泰寺」の門柱を建てた。

縁日に出る露天は他の日には一切出ない。「参道ミュージアム・覚王山秋祭」(主催:覚王山商店街振興組合事業部街づくり委員会、協力:中日新聞・朝日新聞・覚王山新聞)などのイベントがあり、縁日以上賑わいがあるが、このときは露天商は出ないことになっている。

また、秋祭の協力団体に「覚王山新聞」というのがあるが、これは主催の覚王山商店街振興組合事業部街づくり委員会が隔月で発行しているカルチャー新聞のことである。この新聞は、名前のとおり覚王山周辺で行われているカルチャー教室の案内が主になった新聞である。

(2) 名古屋市・真福寺(大須観音)

所在地：名古屋市中区大須

概要：能信上人のうしんしょうにんによる開山で、真言宗智山派別格本山となっており、日本三大観音のひとつともなっている。もと尾張国長岡庄大須郷(現在の岐阜県羽島市大須)にあったことから「大須観音」と俗称されている。

後醍醐天皇が能信上人に深く帰依して、元弘3年(1333)、上人を別当職に補し「北野山真福寺寶生院きたのさんしんぶくじほうしょういん」という寺号を賜った。上人は開山にあたり誰を祀るかを伊勢大神宮に訊ねたところ、弘法大師の彫像した撰州四天王寺の大慈大悲にある観世音菩薩を告げられたことにより、当寺に移し本尊とした。

能信上人は学徳ともに高く、多数の書物を集めた。これらは経蔵学問庫であり、その蔵書は大須本または真福寺本として知られ、『古事記』の最古写本を始めとする国宝4点、40点以上の重要文化財を含む総数1万5千点にもおよぶ資料が散逸することなく収蔵されている。徳川家康は、名古屋を建設にあたり、慶長10年、最初に、この寺を現在地に移すとともに、慶長17年(1612)には、この貴重な書物を水難から守るために移している。

感想：大須観音では毎月18日と28日が縁日とされている。調査に訪れたのは28日だったが、朝からのあいにくの雨で人出が危ぶまれた。午前10時前、予想に違わず門前町のほとんどはシャッターが降りたままで人の歩く姿もチラホラだった。それでもと境内を確かめに行った。



大須観音の境内

雨の中でも、縁日で骨董市がでるとい
こともあつてか、多くの人が訪れていた。

境内に入ると、何と、縁日に出店するという骨董屋のテントや簡易のブルーシートがびっしりと並んで、すでに商品が並べられていた。しかし、傘をさして歩く客の姿は今ひとつだった。

とりあえず、本来の門前町としての参道に足を向けた。本堂から真南へ伸びる細道は、ここでもご多分にもれず、広い道路でカットされて、西大須の交差点までのわずかな距離しか残されていなかった。商店街もなく、門前町としての姿はなくなっており、人通りもなかった。それでも「表参道」と朱塗りのアーケードの下に飾り付けがされていた。数件の店が頑張っているようにも見えた。

表参道から入る人はいないといってよかったが、再び、境内へ戻ると西門からぞろぞろと多くの人が入って来るのに驚かされた。地下鉄を利用して訪れた人たちに違いなかった。ほんの数十分の間に本堂への階段は人並みができ、骨董商を冷やかす傘の数は増えていた。

門前町の人並みはどうかと、大須観音通と仁王門通に戻ってみた。ほとんどの店のシャッターはあがり、ここでも多くの人がどこからか現れていた。仁王門通の方は大須観音へ向かうと思われる人で動きが大きかった。さらに万松寺通や東仁王門通へも行って見た。ここはもう、雨とか縁日とは関係がないのだろうか、いつもの大須の賑わいでごった返していた。門前町通、大須本通、赤門通は、屋根がなく、車も通るせいか人通りは少なかった。

戦前、戦後と大須の門前町は、全国にも知られた門前町であったが、浮き沈みの歴史は並大抵ではなかったと思われる。比較的最近でいえば、アメ横が出来て、多くの人出が見られるようになってからの大須はどんどん変化していったように思える。アメ横景気も下火になったりしたが、オーディオ屋からパソコン屋へと店舗が変化し、新しいビルの中に新しい商店街区ができて若者が集まるようになった。そして、折にふれてイベントが行われたり、商店街マップが次々とバージョンアップされたりしている。多分に9つある振興組合による商店街連盟の人たちの不断の努力が功を奏しているのだろう。

(3) 愛知県・豊川閣妙巖寺（豊川稲荷）

所在地：愛知県豊川市豊川町1番地 豊川閣妙巖寺

応対者：豊川市建設部都市計画課中心市街地係係長 林 宣宏・いなり楽市実行委員会会

長 鈴木 達也((有)寝具のゆたかや)他

概要: 豊川稲荷の正式名称は、豊川閣妙嚴寺^{とよかわかくみょうごんじ}といい、曹洞宗の寺院。近世以前の神仏習合を色濃く残した仏教系稲荷。創建は1441年。

豊川稲荷の門前町は、豊川稲荷が1839年に開帳をしてから参拝者が増え始め、徐々に形成されていった。近年の参詣者や観光客の減少に伴う販売額や商店の減少により活力が低下していたが、地元住民や若手商店主が中心となってまちづくり活動が行われている。

変遷: 豊川稲荷門前町の商店は豊川稲荷を観光資源と考えている。近年の参拝者の減少は信仰心の低下とレジャーの多様化によるものと考えている。これを何とかしようと考えたが、従来、正月時期だけで1年分から2年分の収入が得られる時代があり、現在でも正月時期の収入でなんとか凌げるということと、商店主の高齢化などにより改善意欲が強くなく、現状に甘んじる傾向にあった。

これらに対して行政側の考えたのは、補助金で街をきれいにする事だった。だが、これだけでは客は来ない、売上が伸びない、借金だけが残ったということになりかねない。そこで金をかけずにまちづくりをしようと考えた。商店街組合としての活動は以前からあり、月千円会費で幟を立てることと研修旅行を行っていた。これだけでは意味が無いと脱会する店舗が続くようになっていた。

これを憂えた4名が中心となってまちづくり活動を立ち上げた。そして毎週一回集まる木曜会で徹底的に議論した。これには若手の商店主たちの結束の力が大きかった。



豊川稲荷から見た門前町

最初は木曜会の会合する所もなく飲み屋に集まって討論した。しかし費用がかかることから、現在の副会長の自宅の仏間を提供してもらい深夜遅くまで話し合いを続けた。ご先祖に失礼だと感じていたところ、薬師堂の好意で会合場所を確保することができた。

行政にお願いしたのは補助金ではなく、会合に出席して欲しい、祭に準備段階から参加し後片付けまで手伝って欲しい、道路使用許可を容易できるようにして欲しい、イベント開催時に市営駐車場を無料開放して欲しい、職員が地方へ出張した際には宣伝してきて欲しいといったことだった。

あるとき大正 13 年以來から金物屋だった店舗が売りに出され、仲間のひとりがそれを買取り、安い家賃で提供してもらえることになった。

そこを拠点としたまちづくりの会社を 3 年前に設立した。会社の概要は、名称を「株式会社豊川まちづくりそわか」、資本金 400 万円、主な事業は休憩所(いっぷく亭)の開設、文化事業(20 教室ほど)、物販販売(福祉施設や株主からの委託品など)、飲食事業(いなり茶)である。資本金については 1 株 5 万円とし発起人が株主になると同時に周りに呼びかけた。

なぜ、まちづくりに会社組織が必要なのかについては、既存商店街の枠を超えたまちづくり活動の拡充、活動のための資金確保、行政に期待せず自主的なまちづくりのコーディネート、本業の合間の活動から専任的な活動への移行、やった者が報われる成果主義の実現などがその理由である。

会社が最初に実施したのは、商店街にはベンチがなく休息する場所がないこととトイレが少ないことを解消することを目指し、無料休憩所を開設し、トイレの使用だけでもよい、名物のいなり寿司を買ってきて食べる場所にしてもよい、という誰でも自由に使える空間「いっぷく亭」を 1 階部分に開設した。その片隅には喫茶コーナーも併設した。2階は文化教室の場として 2 時間千円の使用料で始めた。しかし、空調などの施設整備や運転経費を考えると赤字なのに気が付き、その後、設備使用料として 1 人 100 円を利用人数分いただくことにした。文化教室は好評で月曜から日曜まで午前・午後・夜間ともすべて埋まりつつある。教室は、オカリナ教室、美人画教室、パッチワーク、アロマセラピー、ヨガ、手編み(かぎ編み)、草木染め、シェイプアップヨガ、フラワーデザイン、ママ&キッズヨガ、つるし飾り、絵手紙、かな習字教室、坐禅教室と多彩である。

最近は大学のサテライト研究室も設けられて遠方から研究に来られた方が資料を持ち帰りまた持ってくる手間が省けるようになっていたり、稲荷寄席、アンデスへの誘い(音楽会)などのイベントに使われたり、さらに変わったところでは小学校の校外授業の場や結婚式の披露宴会場として使われることもある。

また、土産物屋だけでなくこの商店にも置いて買ってもらえ、地域をアピールする役割を持つオリジナル商品の開発にも取り組んでいる。むくろじの数珠(「6年間黒字の数珠」に通じる)、キャラクター狐娘ちゃんのストラップを中国に発注、新城の茶葉を使った缶入り「いなり茶」などを開発し、販売している。

「いなり茶」の開発にあたって「豊川稲荷御祈禱茶葉使用」という肩書きを入れて計画を進めていたが、豊川稲荷から使用してはならない旨の厳しい指導があり、慌てる一面があったが「商売繁盛 家内安全 開運満足 心願成就 芸道増進 諸願満足」という文字に変更することで了解が得られ、予定の販売時期までの製造が間に合ったという経緯がある。

また、商店街景観整備では店舗の外装を瓦の見える建物に、彩色は茶・白・黒を基本とするようにし、大学に設計を依頼している。元々ビルだったせんべい屋が、純和風の瓦の見える外装になったり、正月だけ使われる店舗のため常にシャッターが降りているところではシャッターに絵を描いたりしている。

これら景観形成の費用には上限が 150 万円の補助金が市から出るようになり、順次改装してゆ

く予定にしている。その他資金を必要としない景観整備として、古い戸板を商品展示台に活用したり、ホーロー看板の愛好家から看板を借りて展示したりした。

まちづくり活動の今後の課題と目標は、異空間へのこだわり(景観整備の推進)、地域ブランド開発事業、消極的商店主のさらなる意識改革、積極的な情報発信による観光の推進、さらなる市民のまちづくり参加であるという。

一方、行政側の対応であるが、市の職員道路使用許可に関しては「地域再生計画」に組み入れ、国の計画を携えて警察の許可を求めに行った。一度許可してもらおうと交通の支障の有無が分かり、次回からは許可が簡単になった。

行政はあくまで側面からの支援ということを念頭に、町の人が頑張るなら我々も頑張らなくてはと、会合には必ず参加しており、祭にあたっては、ボランティアで参加している。時には楽市でお店の販売のお手伝いやチンドン屋もやらされる。

また、「地区計画」を策定し地元の了解を得ながら重点的な開発整備を行っている。地区計画には建築物の高さは12mまでなどの制約も伴うが、それらも地域で徐々に理解されつつある。

門前町として忘れることのできない豊川稲荷との関わりは、なかなか難しいところがある。豊川稲荷は全国三大稲荷の一つであるから放っておいても人が来ると考えている。何かを依頼してもある人には了解を得ても別の人からストップが掛かり、1回で物事が解決することがない。しかし、役僧の若年化も進んでおり、少しずつだがハードルが低くなってきている。最近では街の者と僧侶との交流会も実現し、色々な意見やアイデアも出されるようになってきた。台風で寺が被害を蒙った際には、街の者が倒木でベンチを作ったり、観月会を開催したりして支援した。

感想： JR の駅から大きな狐の人形が「歓迎 豊川稲荷」という文字を大きな腹に歓迎してくれた。これはロータリーから参道へ入る入口にもあって、それには「豊川稲荷 表参道」と書かれていた。少し進むと今度は小柄な狐の人形が店の前に立っていた。そのお腹には「菓子の松本屋支店」などと書かれていた。このように歩く道すがら大小の狐が置かれていて、いやでも豊川稲荷に来たのだという思いにさせられる。この人形は「大吉くん」と呼ばれ、昭和60年(1985)のデビューというから結構なお歳狐なのだ。これらは全部、商店街のメンバーの手作りというから少々仕上がりの粗さも頷ける。

まちづくり活動に関しては、8年ほど前から活動を始め、活動の拠点としての会社を設立した。会社は設立から3年ほど経過した今年でやっと黒字にまでこぎつけたという。当然、配当まではまだ先だという。

豊川稲荷の大祭に合わせたイベントや毎月開催している街独自のイベントも定着してきたという。そのイベント「いなり楽市」の大道芸に来てくれる者は、弁当支給だけにもかかわらず数人いた。それが最近ではお断りをしなければならぬほどの人が集まってくれる。手当も弁当代だけだったものが、プラス交通費を付けられるようになったという。これらの活動は、若手の商店主が実行力を発揮していることが大きな原動力になっていることは疑う余地がないが、最初に周囲から賛成も得られないような状態から立ち上げた4人のメンバーの苦労には頭が下がる。



豊川稲荷の門前町で人気の大吉くん

また、行政が街の活動家のわがままともいうべき要求にしっかりと応え、それを部下に伝えたり、移動してもしっかりと引き継いでいることに驚かされた。若い係長の現在の悩みといえば「チンドン屋のキャラメイクを何にしようか」ということだという。

豊川稲荷では、ご祈禱を単なるご祈禱だけでなく、点心(精進料理)を付けたご祈禱を 4,000 円からとし、参籠(宿泊・朝夕食事付)を 8,000 円からとして受け付けていた。

また、「いなり茶」の話の中で「御祈禱茶葉使用」という文字はご法度とされたというのに、豊川稲荷の門のすぐ前にある「喜楽」という店で売っている「宝楽まんじゅう」には豊川稲荷でご祈禱を受けた米麴が入っていて、ご利益があるといわれているともいう物もあったのが不思議だった。

(4) 岐阜県・千代保稲荷神社

所在地：岐阜県海津市平田町三郷 1980

概要：「おちよぼさん」とか「おちよぼ稲荷」などの愛称で知られている。大祖大神、稲荷大神、祖神が祀られており、創建は、500 年ほど昔の文明の時代である。八幡太郎義家の六男義隆が分家する際に義家から源氏の祖先の霊璽(仏教でいう位牌)と宝剣と義家の肖像画の3点を「千代、代々保ってゆけ」と賜ったのがはじまりと伝えられ、神社の名称もそれに因んでいる

境内は、有名な神社にしては驚くほど狭い。油揚げを藁に通したものと小さなろうそく1本を入り口の売店で売っている。油揚げは売店によって三角と四角がある。階段を上がり、ガラス張りの六角堂のようなところで扉をあけて献燈する。説明書きには「ろうそくは持ち帰り、再度、使用してください」とあるが、燃え残りのろうそくの始末が大変だからなのか、そういう決まり事になっているのかよく分からない。他の参拝者の後に付いて本殿の前に進み、お賽銭箱ならぬ油揚げ入れ箱に油揚げを入れてお参りする。「チャリン」という音に気がつくと油揚げ入れ箱の奥に賽銭箱もあった。後ろ側の建物には何か白い紙がいっぱい張られているように見えたが、近づいてみると会社や商売人の店の名刺が簾に挟んであることが分かった。二人連れのお年寄りのひとりがもうひとりに「ここ、一周回ると教えている。なるほど皆が左回りに歩きながら小さな祠ごとで柏手を打

ってはお参りしてゆく。3箇所の祠に何が祀られているのかよく分からない。社務所の前の掲示板には「古伝によりお札やお守り等は出しておりません。また、朱印帳の記帳はしておりません」と書かれた張り紙があった。



平日でも賑わう千代保稲荷
神社の門前町

門前町：揖斐川の堤防から少し西に行った田園地帯に、そこだけ家並がびっしりと並んでいるのが千代保稲荷神社の門前町である。およそ700mの東西に伸びた1本の細い道路があり、東西にそれぞれ赤い鳥居が立っている。この鳥居の間の両側に、124の店舗がびっしりと並んでいる。店舗の多くは参拝客をターゲットに食事や土産物売る店が多いが、青果店、ブティック、カーテン、刃物研ぎ、八百屋、時計、雑貨、薬など多彩である。この地方の特産として、食堂ではナマズ料理や川魚料理(ウナギ・モロコの甘露煮・鮎味噌など)、串カツと土手煮等を出すところが多く、土産物では草餅、漬物、麩が多く見られる。

感想：月半ばの平日の昼ごろだったが多くの人出で賑わっているのに驚かされた。年配の人が多いのだが、中には会社の作業服を着て数人で着ている人や背広姿のいかにも会社員という人も多く見かけた。月末になるともっと多くの人が押し寄せるという。

社務所に入って由緒書きを求めたが「ないけど…」といって(財)海津市観光情報センター(海津市商工観光課)発行のパンフレットを渡してくれた。そのカウンターで対応してくれた人はおよそ神職とは思えない風情と対応に違和感を覚えた。

油揚げなどは神社とは別の売店で売っており、お札やお守りなども配布しないと、神社の運営は大丈夫なのかと心配になる。しかし、商売の神様として毎月多くの参拝者があるというから(年間200万人以上)別の収入もあるに違いない。それにしても由緒書きもなく、それぞれの祠に何が祀られているのかも分からない神社なのに、こんなに多くの人がお参りにやってくるのが不思議だ。よほどご利益があり、それが口伝で喧伝されているのだろう。しかし、商売と縁のない者にとっては何か場違いな場所に踏み込んだような違和感を覚える。

門前町の店も古くからの創業らしいことが書かれたところが多く、昔から多くの人で賑わってきたことがうかがい知れる。人が来れば賑わい、門前町の商店も繁栄することは分かっているが、ど

うして常に多くの人に来るようになったのかが分からない。

帰り際に、千代保稲荷神社のすぐ裏手に隣接する神明神社をのぞいたが、千代保稲荷神社とは対照的に一人の参拝者もいなかった。

(5) 三重県・宇治山田市・伊勢神宮・豊受神宮（外宮）

所在地：宇治山田市

感想：宇治山田駅から外宮まで通じる広幅員の道路の両側と外宮前の交通量の多い道路沿いは、当然ながら商店もまばらで、仕事で歩く人以外には歩行者も少ない。



内宮前の商店街

しかし、駅前から外宮までの広幅員道路にはぼ並行した中幅員の道路は、きれいな石畳みの舗装がなされ、両側にはずらりと商店が並び、提灯が掲げられていて、歩きたくなる気持ちにさせていた。

車両制限はされていないが、車が遠慮するような町並みとなっているせいか通過交通もほとんど無く、そこそこの人が歩いており、廃れてしまった商店街のイメージを払拭させられた。

(6) 三重県・伊勢市・伊勢崎商人館・川崎まちなみ館

所在地：〒516-0009 伊勢市河崎二丁目 25 番 32 号 伊勢崎商人館

管理者：NPO 法人 伊勢河崎まちづくり衆 TEL&Fax. 0596-22-4810

対応者：特定営利企業活動法人 伊勢河崎まちづくり衆理事・伊勢河崎商人館館長 西条利夫、西山 清美

概要：戦災によって古いまち並みがほとんど無くなった伊勢市内において、わずかに残された勢田川沿いの商家と土蔵の並ぶ古いまち並みが、取り壊されてアパートとなりそうな時期があった。

それらを残したいという機運が高まり、伊勢市は承諾し、土地を購入するとともに寄贈された商家と土蔵らの修復を行い、周辺の古いまち並みと共に伊勢を訪れる人々に伊勢の文化と歴史を知ってもらう施設とした。ただ、行政では維持することはできないということから、元々あったNPOらが結束し管理運営を行うこととなった。

変遷：昭和 49 年(1974)に勢田川の水害があつて以降、建設省による勢田川改修事業が

始まった。もともと 2 級河川だった勢田川だが、1 級河川に格上げされて事業は直轄事業として行われた。

この改修事業を契機に、まちなみ保存の動きが生まれ、昭和 54 年(1979)、「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」が発足し「河崎まちなみ館」が創られた。



河崎に残る古いまち並み

また、改修事業が始まった頃、この河川沿いにあった江戸時代から営んでいた小川酒店の江戸から明治にかけて建築された町屋2棟、蔵7棟など約 1,000 m²が取り壊されてアパートになるとの話が進んでいた。先の河川改修と併せた古いまち並み保存の動きが生まれた。

伊勢市は、敷地を買収し、建物等の寄贈を受けると修復整備を行い、日本ナショナルトラストが事業主体となって、平成 14 年(2002)、資料館・「伊勢河崎商人館」を建設した。

資料館については、行政が管理するのではなく地域が行うのがよいとして、平成 11 年(1999)に既存のまちづくり団体が共に活動する組織として「NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆」を設立し、「河崎まちなみ館」を包含した「伊勢河崎商人館」の管理運営にあたることとなった。

さらに平成 15 年(2003)には、「河崎川の駅」を開設し、勢田川を生かしたまちづくりにも取り組んでいる。

施設：川から荷物を上げて収める倉庫3棟と道路を挟んだ母屋、サイダー工場跡、土蔵などが、全体約 600 坪の敷地に並んでいる。

川側にある慶応から明治に掛けて造られた3棟の蔵を改修して土産物・雑貨・食品の販売や喫茶を行う「河崎商人蔵」とした。各店舗への貸し付け料を取っている。

母屋(住居、茶室、応接間)、家蔵(母屋から直接出入りできる蔵)、庭などをそのまま残したり一部を事務所や資料館にしたりして河崎商人館の中心的施設としている。茶室などは利用者の要求に応じて貸し出している。また、大きな蔵のひとつをイベント等の行える施設に改修し、芝居小屋の名前を付け「河崎角吾座^{かどごぎ}」とし、各種イベントに貸し出しもしている。

もうひとつの大きな蔵は、歴史と文化の資料の展示室とし、以前からあった「河崎まちなみ館」

の名を踏襲した。主な資料は小川家の書籍・文献等である。

旧サイダー工場のろ過施設・検査室を広場利用時の休憩所とした。また復刻サイダーを造り、伊勢各地で販売している。

母屋と土蔵の間の空間を石畳の広場に整備し、イベントや市^{いち}などを開催する「まちなみ広場」とした。第4日曜日には、この広場に店を出し、道路沿いの門を開けて一般に開放している。

周 辺：「伊勢河崎商人館」のある河崎一帯は、16世紀頃から伊勢門前町の山田・宇治へ物資を運ぶために勢田川を利用した水上輸送と、荷揚げした物資を人馬で陸上輸送を仲介する川の港として賑わった。東国と西国の多くの人々が往来するターミナル的な商業都市でもあり、戦国時代末期には、すでに物流と金融の中心地域だった。江戸時代には「おかげ参り」の参宮客に物資を供給する問屋街として大きく成長した。さらに山田奉行から伊勢神宮周辺地域の米と魚の卸売り専売権を認められ、名実ともに「伊勢の台所」として全国に知られた商人町となった。

こうした背景から「河崎商人館」の上流側には川から荷揚げした物資を一時収納する蔵が並んでおり、道路側の河崎本通り沿いは、往時のたたずまいを残しながら、それぞれ現代風の商店を営んでおり、まちなみ散策ができる。

また、川沿いには建設省の河川改修工事に併せてつくられた修景池や川沿いを歩ける小道、ガス燈などが整備されている。

感 想：周辺地域を含めて全体に落ち着いたまち並みが創られており、散策したくなるような雰囲気づくりがされている。

その拠点的な存在としての「伊勢河崎商人館」は元々立派な商家であったことを彷彿とさせるように、うまく修復がされており、見応えがある。細かく見れば、京都・裏千家を写した茶室の床の間には伊勢春慶を花器にして清楚な花が活けられていたり、襖の取っ手や天井に張られた御札などもそのまま残されていたりして興味は尽きない。

しかし、広く立派な施設を羨ましく思う反面、広いがための維持が大変なことが想像できる。例えば庭園の手入れ、各施設の清掃、空調設備が整えられているために嵩む電気料金などを考えると、入館料大人 300 円ではとても維持してゆくのが困難であるという説明には頷かざるを得ない。

また、伊勢市の担当部局は教育委員会となっていることから、修繕費用などの予算がなく、予算獲得にも時間を要するために緊急の修復でも遅れ気味となる。

さらに、報告書の提出などの作業には人手が少ないだけに、昼間は来訪者の対応に追われてできず、どうしても他組織との会合などの合間を縫う夜間作業となってしまう厳しいものがある。

そのために、意義のある立派な施設を造ることは大切ではあるが、完成後の維持や管理を誰がどのような費用を充てて無理無くやれるのか等も十分に考慮する必要があることを痛感させられた。

一方で「まちづくりは、個人が集まってグループをつくり、歴史や文化を学びながら

創って行くものだから、最初の個人が大切」、「だからがんばってください」とか「過去、寺は信仰によって個人や家を作り守ってきたが、神社はおなじ信仰であっても、祭などを通じ町や地域を大切に思い、守ってきたものだから、ぜひ熱田神宮の門前町を作り上げて欲しい」などと激励された。

(7) 三重県・伊勢市・伊勢神宮・皇大神宮（内宮）

所在地：〒516 伊勢市宇治館町1 神宮司庁 電話 0596-24-1111(代)

感想：(おはらい町通り・おかげ横丁)

「いせびとニュース」というタウン紙のような新聞が発行されていて参考になった。紙面は、遷宮・伊勢地域・おかげ横丁・地域の案内・歳時記・神宮のお祭や行事・伊勢周辺の催事などの記事を広告入りのA3版・8頁で構成されている。発行元は、伊勢文化舎・伊勢市観光協会・おかげまいりブランド戦略委員会で、企画・編集は伊勢文化舎となっていた。

以下は「いせびとニュース」からの抜粋である。

- ・「おかげの町でおかげ発見」…朝の9時55分に、櫓の宮太鼓が「ドン、ドドン！」と鳴り響く。すると、店の前に従業員たちが並び、神宮にむかって拍手をパン、パン！深々とおじぎする。「おかげさまで、きょうも一日がんばらせてもらいます」と。
- ・おかげ横丁が店開きしたのは、前の遷宮の年、平成5年7月のこと。今度の遷宮でちょうど二十歳を迎えることになる。

20年前、おはらい町の人通りは年間20万人と淋しかった。ところが、おかげ横丁ができて、今では約400万人、20倍にもなって、年中正月のよう。

- ・「内宮おかげ参道(地下道)」…浦田町の市営駐車場。車を降りて、内宮・おはらい町方面へ向う時にくぐる地下道が「内宮おかげ参道」だ。この参道は、おはらい町への玄関口。現世から「おかげ」の世界へ抜け出るタイムトンネルといえよう。

原画の長さ80cm！描かれているのは、おかげ参りのフィーバーが起きた宝永年間の参宮風景だ。壁に近づいて良く見ると、屏風と見えたのは陶板だ。地下通路を整備するにあたり、伊勢文化会議所が事業として取り組んだものだ。

- ・「おかげ風呂館・旭湯」…勢田川沿いにある「旭湯」は、“汐湯”で評判の純・銭湯だ。二見浦へ朝夕出かけて新しい海水を汲んできては沸かしている。二見浦は昔から参宮者がみそぎをした清渚として知られるところ。大人380円、12時～24時30分、不定休(毎月1、2回)、P有り。
- ・「外宮前名物・“神饌井”」…市内各地の飲食店で伊勢志摩の食材にこだわった各店オリジナルの「神饌井」がある(現在21店舗)。

以上から、PR紙が重要なこと、門前町である以上商店の従業員らは神社に対する思い入れとか感謝の念を持つことが大切なこと、地下鉄伝馬町から熱田神宮正門までのアプローチと旧東海道からのアプローチを兼ね備えた地下道を考えた場合の壁面処理の一案、また、地域の何かに因んだ名物のヒントが得られると考えられた。



おかげ横丁の袋小路

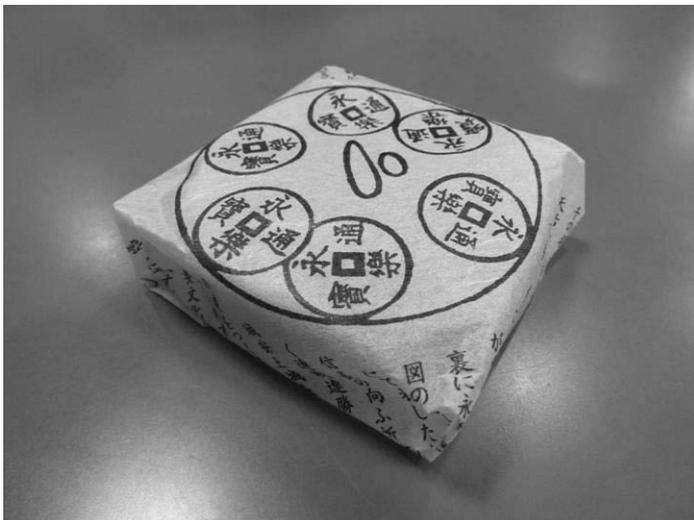
(8) 滋賀県・安土城址

所在地：滋賀県蒲生郡安土町の安土城跡、摠見寺及び安土駅前

品物：負けずの鰐

所見：安土城跡は、織田信長が築いた日本で初めての天主(あるいは天守ともいう)を持つ城で、信長没後火災にて焼失した。

- ・ 東側には観音寺城跡があり、その麓には安土城博物館や記念館などがある。
- ・ 「負けずの鰐」は、信長が桶狭間の合戦に先立ち、熱田神宮に参拝、その折に永楽銭を投げたところすべてが表をむいた故事にのっとり信長が、己が刀の鰐に永楽銭を象嵌したとの故事による。この鰐は重要文化財として安土城跡摠見寺に有る。
- ・ この鰐にちなんで、これをかたどり安土町 JR 安土駅前にある菓子司「万吾楼」が最中として作成、安土城の唯一の土産として販売している。



負けずの鰐（最中）

(9) 京都市・平安神宮

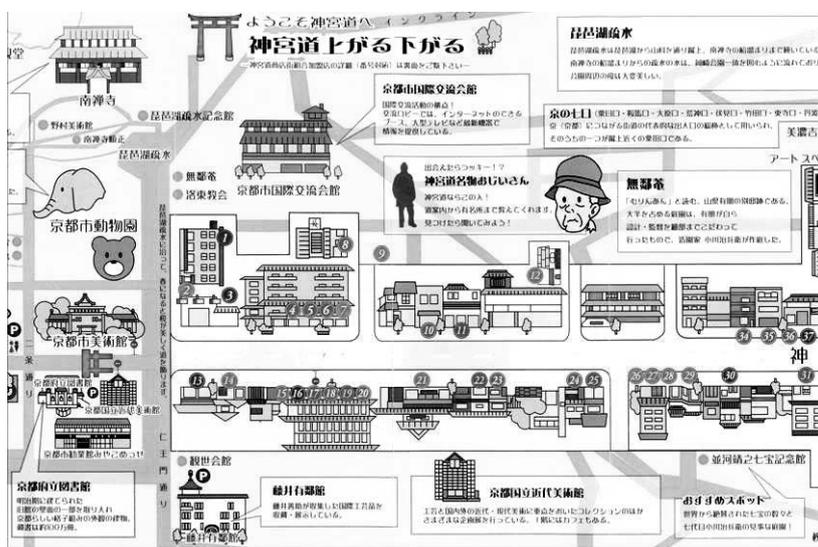
所在地：京都市左京区岡崎西天王町 97

概要：明治 28 年(1895)に平安遷都 1100 年を記念して創建された比較的新しい神社である。祭神には平安京最初の桓武天皇と平安京最後の孝明天皇を祀っている。

社殿の裏にある池泉回遊式の平安神宮神苑(庭園)は敷地面積約 10,000 坪(33,000 m²)の日本式庭園を含み、約 20,000 坪(66,000 m²)ほどある。これは明治から昭和にかけての名造園家である7代目・小川治兵衛(植治)が 20 年以上かけて造った名園で、国の名勝に指定されている。神苑には人里には少ないカワセミやオオタカなどの鳥類や、甲羅に草を生やすミノガメ、日本では非常に珍しいミナミシガメなどが棲息している。

毎年、10 月 22 日には時代祭が行われ、平安朝から明治までの風俗行列が都大路を練り歩くらびやかさは見応えがある。

門前町：平安神宮の正門前から南へ疎水のある所までは、京都国立近代美術館や京都市美術館などがある一種の文化ゾーンを形成していて、静かで気持ちのよい広々とした道が続いている。疎水から青蓮寺までの道が神宮道であり、両側には一般の門前町とは一味違った商店街が連なっている。その理由は商店街の種類にある。



平安神宮の門前町にあった神宮道マップ

全 49 店舗中、飲食関係が 14 店舗、画廊や美術関係が 14 店舗で 57%を占めるといふ特色のある門前町となっている。

一般的な門前町では土産物屋や飲食店で占められるが、ここでは 50 店舗が加盟している神宮道商店街組合の内、飲食関係の店も 14 店舗と主力を占めているものの画廊や美術関係の店 14 店舗に和洋装関係の店 7 店舗があることに特色がある。平安神宮前にある美術館の影響だろうが、知的で落ち着いた雰囲気のある門前町というのもよいものである。

また、この通りをさらに南へ進めば、円山公園を経て高台寺道、二年坂、産寧坂、清水道へとつながっている。

(10) 京都市・粟田神社

所在地：京都市東山区粟田口鍛冶町一

概要：皇貞観 18 年(876)に疫病退散などを願って勅により創建されたが、一説には五代

考昭天皇の分かれである栗田氏が現在の北白川から七条付近までを栗田郷として治めていた時に氏神として創建したとも伝えられている。京都の出入口のひとつである栗田口にあつて、古来東海道・東山道を行き交う人々の旅の安全を祈願してきた。

祭典：訪れたのは栗田祭りの日で、各町内から集まってきた^{うりぼこ}瓜矛（劍鋒）や神輿が境内に並び同じく各町内から集まってきた子どもや大人たちでごった返していた。

揃いのはっぴ姿で本殿前にお参りを済ませると、松明を先頭にして世渡り神事の行われる^{うりゆうせき}瓜生石まで行列で進む。途中から京都造形芸術大学の学生たちで作った栗田^{だいろろう}大燈呂7基が加わつて沿道で見物する人々から拍手をもらう。

瓜生石の前には祭壇が作られており、行列が到着すると知恩院から僧侶の行列が階段を下りてきて祭典に加わる。

翌日は、昼から神幸祭が行われる。大きな神輿が栗田神社の階段を降りるのもひやひやするが、知恩院の斜めになった階段を上がり降りするさまは勇壮そのものである。京都で最も多くが保存されているという劍矛を使った劍矛振りが栗田神社清々会の者によって振られ、夜までかかつてすべての町内をくまなく巡回する。

大燈呂が行列に加わるようになったのは、数年前からだ毎年のように数を増やしているというし、劍矛振りも数年前までは4基だったのが6基に増えるなど祭りに対する意気込みが凄い。また、周辺の店舗や住宅の表には栗田神社振興会、栗田祭奉賛会あるいは栗田祭協賛と記された札が大抵3枚とも掲げられていたり、随所に神輿のお旅所が設けられていたりして地域を上げて祭を盛り上げていることが伺われた。



栗田神社

栗田祭に集まった子どもたち。

(11) 京都市・清水寺

所在地：京都市東山区清水一丁目

概要：788年、坂上田村麻呂によって創建された古刹。清水の由来は「音羽の滝」。北法相宗単立寺院。西国三十三観音の第16番札所。国宝の本堂には有名な懸崖造りの舞台

があることで知られている。

京都には、東の清流のある所を「青龍」、南の窪地のある所を「朱雀」、西に大道のある所を「白虎」、北に丘のある所を「玄武」とする四神相応^{しじんそうおう}の考え方が根ざしている。清水寺は、東山山系の「青龍の地」に位置している。「青龍の地」は、清水の湧きあふれる音羽の滝に観音の化身である龍が、夜ごと飛来して水を飲むとの伝えが古くからあることに由来している。このことから、清水寺には清流会が結成されており、毎年、春と秋に神々の行列が続く行道^{ぎょうどう}という大群会行^{たいぐんえぎょう}が行われる。

これ以外にも多くの催し物が年間を通じて行われている。平成 22 年度を例に取れば、春、夏、秋の「夜の特別拝観」、夏の「京の七夕」協賛の「千日詣り」(本堂内々陣特別拝観)と中島潔奉納襖絵展、秋の成就院庭園特別公開、その他 20 以上の年中行事が並ぶ。

門前町:清水寺への道は清水道と五条坂あるいは茶わん坂が知られているが、最近ではテレビドラマの舞台となって有名になった高台寺前の「ねねの道」(高台寺道)に人気が集まり、そこから清水寺へ向かう二年坂、産寧坂の方が圧倒的に多くの人が集まるようになってきている。これらの道の両側には土産物屋などの商店がずらりと並んで活気に満ちている。この影響なのか清水道の東大路通寄りには人気が少なく、逆に産寧坂とぶつかる辺りから清水寺までの清水道は以前にもまして活気に溢れていた。

今年(平成 22 年)は、着物を着た参拝者は門前町の多くの商店で割引などの特典が得られるという催しが行われ、多くの若い女性が着物姿で門前町の賑わいに溶け込んでいた。着物姿は若い女性だけでなく、中年の男性もチラホラと見え、外国人の着物姿にまで出会ったのには驚いた。



清水寺の参道

新しくできていた袋小路と店舗

(12) 大阪市・住吉大社

所在地：大阪市阿倍野区

概要：摂津の国一宮。全国にある 2,300 社余の住吉神社の総本宮。祭神は住吉三神こ

と底筒男^{そこつつのをのみこと}命、中筒男^{なかつつをのみこと}命、表筒男^{うはつつのをのみこと}命 および神功皇后。創建は神功皇后の摂政時代の211年。社殿が西向きで、瀬戸内海の海上安全を祈念したと伝えられている。

古くから神社の西側に紀州街道、東側に熊野道があり、往来の激しい場所でもあった。古くは摂津国の中でも、由緒が深く、信仰が篤い神社として、「一の宮」という社格がつけられ、人々に親しまれてきた。

昔から20年ごとに本殿を新しく建て替える遷宮を行っている。近世に入ると、住吉大社では本殿の修繕・改修とともに、お祭(遷宮祭)を行うようになった。本殿の改修では、特に丹塗りや^{ひわだぎ}桧皮葺が重要で、ヒノキの樹皮を加工した桧皮で屋根を葺く。本殿(住吉造)は文化7年(1811)に建築され、現在、国宝建造物に指定されている。平成23年(2011)には鎮座1800年を記念して、49回目の式年遷宮祭が行われる。今回は、国宝御社殿の丹垂の塗替をはじめ、諸建造物の修理がされている。



住吉大社前から正門を望む

正面の緑が住吉大社の木々



住吉大社社殿

門前町:住吉大社の周囲は、正門の西約100^{メートル}に南海電車・住吉大社前の駅があり、さらに境内西側には南海電車と並行する阪堺電車の走る通(紀州街道)がある。南側には川幅5~6^{メートル}の小さいがかなりの深さ(5~6^{メートル})の川があり、現在は大社の周囲一帯が住宅街となっている。境内

の南、東および北側は3 ㍍ほどの道が取り囲むようにあるが、裏門(東門)からは幅6 ㍍程度の道、これは50 ㍍先に南海電車・高野線(ここが熊野道の跡)と交わって先に伸びている。

境内は西側の正門から太鼓橋を経て、第一本宮～第四本宮など多くの社殿があり緑も豊かである。正門の左側にある絵馬堂(?)では青物や盆栽などの市が開かれ付近の人で賑わいを見せていた。



境内絵馬堂(?)で開かれているせり市

裏門から東に伸びる道は熊野道と交差する形になるが、とくに商店街があった様子はなく、かえって裏門と熊野道の間であって並行する道に商店の名残が有る。



住吉大社西側の旧紀州街道の現状

電車線路は阪堺鉄道

紀州街道は阿部野橋につながるが、現在ではマンションや事務所あるいはブティックなどの商店が混在し、阪堺電車の通る広い道路になっており門前町の面影はまったくない。唯一、門前街らしき風景は南海電車・住吉大社前から正門までの50 ㍍ほどの道であるが、これとても商店街を形成するほどでもなく、ガード下の商店街がその代替商店街となっている。

(13) 大阪市・四天王寺

所在地：大阪市天王寺区

概要：四天王寺は、JR 天王寺駅から北に 15 分ほど歩いたところであり、四天王寺周辺は昔からの寺町として多くの寺院が現在も存在している。

推古天皇の 593 年、物部氏との崇仏・廃仏戦争に勝利したあと、蘇我氏系の聖徳太子が創建。畿内の西方を守護する官大寺。四天とは持国天、広目天、増長天、多聞天。現在は和宗総本山。現在の敷地は東西約 400 ㍍、南北 500 ㍍ほどで、中心に四天王寺様式といわれる仁王門、五重塔、金堂、講堂を回廊が囲む様式のお堂が並び、北側から東側に掛けて江戸初期建築の六時堂、方丈などが残されている。

門前町：周囲は、南側に四天王寺前交差点から北河堀交差点へ、および四天王寺南交差点から同じく北河堀へ続く幅員 4～50 ㍍の 2 本の道で区切られ、東側にもまた西側にも約 50 ㍍幅の通（谷町筋、夕陽丘通り）で区切られて、歩行者の通行を断ち切っているのが現状である。わずかに四天王寺と谷町筋の間にある道が昔の雰囲気を残しては居るが、門前町というほどの通りではない。また、天王寺駅から四天王寺仁王門へ通ずる道もマンションやオフィスビルなどで商店はほとんど見られなかった。



天王寺駅方面から四天王寺正門を望む

以上、住吉大社と同様に、ここも過去にあった門前町は跡形も無く消え去ってしまったといえるのではないかと！原因は道路拡張が主因、その後の商業構造の変化が従因といえるのではないかと。

門前町とはいえないが、四天王寺はその歴史から弘法大師との結びつきが強く、21 日の弘法大師縁日や、22 日の太子会、お彼岸の期間中などに出店で賑わいを見せる。



四天王寺西側の街路

写真の門の前に画面と並行して走る。

門の右側は四天王寺高校工の校舎、写真は谷町筋から撮ったもの。

(14) 大阪市・大阪天満宮

所在地：大阪市北区天神橋二丁目1番

概要：大阪天満宮の創始(御鎮座)は、平安中期にさかのぼる。901年に菅原道真が、九州太宰府へ配転させられた際、同地にあった大將軍社に参詣した。903年に菅原道真が没した後、949年に大將軍社の前に7本の松が生え、靈光を放ったという奇譚が都に伝わり、村上天皇の勅命により天満宮が建立されたのが始まりである。現在の本殿は、天保14年(1843年)に再建されたものである。



大阪天満宮

門前町：大阪天満宮の参道であった商店が長い間に発展した商店街として天神橋筋商店街があるが、この商店街は一丁目から七丁目まで一直線で南北に連なり、2.6^キもある日本一長い商店街である。交通の便も良く地下鉄堺筋線が南北に走り、「南森町」「扇町」「天神橋筋六丁目」の各駅が商店街に沿っており、JR環状線の「天満」駅もある。JR東西線「大阪天満宮」駅が商店街の近くにできてから更に便利になり、日に25,000人の観光客や通勤・通学利用者、観光客で賑わっている。

商店数は約600店舗もあり、空飛ぶ鳥居としてアーケードの上部に赤や青など4色の鳥居が

ぶら下がり、天満宮の門前町の雰囲気を出している。落語専門の常席の「天満天神繁盛亭」は、桂三枝の呼びかけで建設募金が始まり、建設費2億4千万円は企業、市民の寄付で賄われ、2006年にオープンし、落語専門の寄席として高い人気が続いている。この天満天神繁盛亭は、大阪天満宮が土地を無償で提供し、商店街が寄付集めや集客の協力をするなど、神社と商店街が良好な協力関係で賑わいを作り出している。

天神橋商店街では、商店街を中心とした街が本来持ってきた役割を守る町街^{まちがい}トラスト活動を提唱し、最初に天満みやげづくりとして、葦を活用した縁起物のミニ茅の輪^{ちくわ}や葦で作った名刺、絵はがきなどを作成した。商店街の長さを観光に活用しようと、商店街の端から端まで歩いてもらったら感謝状「満歩状」を提供するスタンプラリーを行っている。また、修学旅行生が移動屋台で商売を体験できる「一日丁稚体験」の受入を行っている。

天神橋筋商店連合会の会長である土居年樹氏は国土交通省の選定した観光カリスマであり、全国に先駆け25年前から商店街の対策を行って、現在も手を抜くことなくコツコツと商店街活性化のまちづくりを続けている。その結果として昭和50年頃は1日の来街者が8,000人前後であったのが、現在では25,000人にまで増加している。熱田神宮周辺の活性化には、地元商店街が自ら活性化に向けた努力をしながら熱田神宮との協力や連携事業を発展させていくことが、神宮周辺の門前町の魅力づくりに繋がっていくのではないかと思う。



天満天神繁盛亭

落語専門の寄席として高い人気が続いている。



天神橋筋商店街

2.6 キロもある日本一長い商店街である。

(15) 大阪市・今宮戎^{えびす}

所在地：大阪市浪速区恵美須西1丁目6

概要：大阪市浪速区恵美須西一丁目に鎮座し、天照大神・事代主命・外3神を奉斎している。創建は推古天皇の御代に聖徳太子が四天王寺を建立された時に、同地西方の鎮護としてお祀りされたのが始めと伝えられている。

今宮戎神社は、地下鉄御堂筋線大国町駅から徒歩5分、地下鉄堺筋線恵美須町駅から徒歩5分、南海高野線今宮戎駅下車すぐのところ、阪堺線恵比須駅徒歩5分、JR 新今宮駅徒歩 10 分の交通の便利な位置にある。

門前町：神社周辺には商店がほとんどなく、人通りもほとんどない状況であるが、距離は少しあるが、通天閣のある通天閣本通商店街が近い。

十日戎で奉仕する女性は、毎年公募で選出され「福むすめ」といわれ、毎年応募者が 3,000 人を超え、アナウンサーの輩出率が高い。藤原紀香も今宮戎神社の元福むすめである。

神社の人によれば、1月9日から 11 日まで3日間の祭礼(十日戎)の日には 100 万人くらい集客があり大変賑わうが、その日を除くと来訪者はほとんどいないとのこと。

恵比須通から通天閣に繋がる通天閣本通商店街はすぐ近くであり、ここ数年で新世界周辺では串カツ屋が 40 軒ほど進出し、従来は若い女性が近づけなかった地区が、一躍、若い女性を始めとする観光客の集まるスポットに変容した。

参拝者が特定の日にしか集まらないので神社周辺の門前町的な商店街ができないが、周辺に通天閣を中心とした観光地的な商店街があるので、門前町商店街の持つ楽しみ方を享受できる。

(16) 兵庫県・大石神社

所在地：兵庫県赤穂市上仮屋旧城内

概要：大正元年、大石内蔵助良雄^{くらのすけよしあき}はじめ四十七義士と萱野三平を合祀して創建された。境内には国指定史跡の大石邸長屋門や庭園、義士ゆかりの武具・書画などが展示されている義士宝物殿がある。

門前町：赤穂城跡の広大な敷地に大石神社と歴史資料館、整備中の赤穂城跡の本丸庭園等があり、大石神社だけでなく一体として観光ができる空間である。入口の大手門周辺には観光客を対象にした土産物店や観光バスの駐車場も整備されている。そこから JR 播州赤穂駅に繋がる道路は歩道も整備され、駅から1^キ程度の距離であるが、大石神社に近づくほど、旅館や飲食店、土産物店などが集積している。

道路の拡幅整備に伴い建て替えが行われた店舗のため、新しく綺麗な店舗が多く、土曜日であつたが人通りは少ない。

JR の赤穂線は JR 神戸線と直通運転しており、大阪、神戸方面から直通の快速が走っており、神戸から約1時間 10 分で播州赤穂駅に行ける便利なところである。

土産物としては、赤穂塩が有名で、塩味まんじゅう、塩ラーメン、塩ぐいのみなどがある。



大石神社



観光バスでの団体客が多いが、大石神社の入口に駐車場があり土産店もあるので、そこで人の流れがストップしており、商店街を通過して神社に行くような位置に観光バスの駐車場を設置すると周辺の賑わいが増加するのではないかと。

なお、駅と大石神社の間に、浅野家をはじめ、歴代赤穂藩主の菩提寺で、境内には四十七義士の墓のある花岳寺があり、その周辺も路地的な狭い空間であるが、商店街がある。

(17) 兵庫県・西宮神社

所在地：西宮市社家町1-17

概要：兵庫県西宮市にある西宮神社は、日本に約 3,500 社ある戎神社の総本社であり、地

元では「西宮のえべっさん」と呼ばれている。

「西宮大神」として^{えびすのみこと}蛭児命を祀り主祭神としている。その他天照大御神と大国主大神、須佐之男大神を祀る。創建時期は不明であるが、平安時代には「えびす社」として、当地で既に篤く信仰されていたことが記録に残っている。

門前町:毎年、1月 10 日前後の3日間で行われる十日戎では、開門神事福男選び、大マグロの奉納、有馬温泉献湯式などの行事とともに、800 軒を超える屋台が軒を連ね、開催3日間で100 万人を超える参拝客で賑わう。



西宮神社本殿

特に、開門神事福男選びは、表大門の前に集合し、午前6時の開門とともに、230 軒先の本殿を目指して駆け出すもので、新春恒例の行事として全国ネットでテレビ中継される有名な行事になっている。



商店街

阪神電鉄西宮駅から東に向かうと、西宮神社の手前に門前町として西宮中央商店街がある。商店街は阪神大震災で商店が半減したが、道幅の狭い道路を挟んで商店が集積している。街路灯には西宮神社の門前町を PR する提灯が掲出されており、門前町らしい雰囲気が伝わって

くる。阪神大震災のあと高層マンションが多く商店街の中に建設されており、生活に密着した商店が多い。西宮中央商店街振興組合では、えべっさんの顔をかたどった「えびす福お面煎餅」を販売しており、西宮神社参拝のお土産に喜ばれている。

通常は参拝客の多い神社ではないが、駅と神社の中間の位置から参拝客が通過するロケーションで、商店街が厳しい中で、空き店舗も少なく、がんばっている。



西宮神社の門前町

街路灯にをPRする提灯提出

(18) 香川県・善通寺

所在地:香川県善通寺市

概要:善通寺は真言宗善通寺派総本山。弘法大師空海の生誕地であり、唐から帰国した空海が807年に建立した由緒ある寺である。善通寺は紀州高野山、京都東寺と並ぶ空海の三大霊場として知られており、四国八十八カ所霊場の第七十五番札所となっている。

ちなみに、善通寺の善通とは、空海の父佐伯善通^{よしみち}の名からとっている。

まちの概要:善通寺市の人口は3万4千人。主要産業はサービス業、卸売業・小売業・飲食店、製造業で、地方都市にありがちな農業と建設業の比重は低い。同市には、四国の防衛警備を統括する陸上自衛隊第十四旅団司令部(人員約2,800名)と、四国学院大学(私学、キリスト教系、文系)がある。

JR予讃線の善通寺駅から善通寺にかけての一角がまちの中心部であり、市役所、美術館、四国学院大学、郵便局、市民会館、図書館、商工会議所、善通寺区検察庁、簡易裁判所などがある。しかし、赤門筋、京町、本郷通、中通など、かつての中心商業地はいずれもシャッター街化している。

門前町:善通寺の年間観光客数は1,142千人(県入込観光客調査、平成13年)。市内には四国八十八カ所霊場の5寺(第七十二～第七十六番札所)が集まっていることから、「遍路宿」と呼ばれるホテル、旅館がある。



善通寺 御影堂

この奥に空海誕生時に使われた産湯堂がある。

現在の善通寺には門前町はない、といったほうがよく、善通寺に隣接して、創業百年を超える熊岡菓子店がつくっている「カタパン」のみが、善通寺名物といえる。もともと、寺院の中で、お遍路関連商品がいっぱい売られており、これも門前町商店と数えられるかもしれない。

(19) 香川県・金刀比羅宮

所在地: 香川県仲多度郡琴平町 892-1

概要: 「讃岐のこんびらさん」として親しまれている^{ことひら}金刀比羅宮は、^{ぞうざきん}象頭山(521m、別号琴平山)の中腹に鎮座する古社である。祭神は^{おおものぬしのかみ}大物主神(大国主命の別号)と崇徳天皇(保元の乱で讃岐に流され、この地で崩御)である。



金刀比羅宮 御本宮

こんびらさん名物の石段を 785 段登った中腹に鎮座。

この先、1368 段登ったところに奥社がある。

こんびらさんのルーツは真言宗松尾寺で、松尾寺では薬師如来を守護する十二神将の筆頭神、^{くびら}宮比羅大将を祀っていた。宮比羅大将とは、もとはバラモン教の神で、仏教を守護する「天部」(梵天、帝釈天、四天王、毘沙門天、吉祥天、弁財天など)に属する。その語源は、クンビー

ラ(ガンジス川のワニの化身)と言い、クンビーラ→宮比羅→金比羅となった。水に縁があることから、海の守り神、船の守り神となった。

明治の神仏分離により、松尾寺は廃止され、金刀比羅宮という神社になったが、神仏習合の名残を神社名にも残し、今でも「^{こんびら}金比羅大権現」と称されている。

この善通寺と金刀比羅宮は JR で1区離れているだけの、きわめて近い距離にある。観光拠点としては、人口の少ない琴平町の方が善通寺市を圧倒している。

まちの概要：琴平町の人口は9千9百人で、主要産業は観光である。善通寺市よりは人口が少ないが、四国を代表する観光地であり、京都の清水寺に匹敵する、たいへんにぎやかな参道がある。

門前町：金刀比羅宮の年間観光客数は 2,860 千人(県入込観光客調査、平成 13 年)である。金刀比羅宮の参道には、旅館(琴平温泉郷を形成する大型旅館も多い)、土産物店、讃岐うどん店、地酒店、こんびら歌舞伎の金丸座、歴史民俗資料館、海の科学館などが軒を連ねている。また、JR 琴平駅付近には、バー、スナック、風俗店など、夜の歓楽施設もある。

江戸時代、「こんびら参り」は「お伊勢参り」に次ぐ庶民のあこがれであったようで、清水次郎長の子分、森石松のこんびら参りは、広沢虎造の浪曲「石松三十石舟」でも有名である。門前町では芝居、相撲、富くじなどの興行も盛んであった。現存するものでは日本最古の芝居小屋、金丸座(重要文化財、公演は4月のみ)は700席を越す大規模なものである。往事は江戸、大坂の千両役者が舞台を踏むこともあり、「こんびら歌舞伎」として名をはせた。

善通寺市と琴平町の観光客数を名古屋市のそれと比較すると、善通寺市は人口の34倍、琴平町は人口の286倍という観光客を迎えていることになる。名古屋市観光客・宿泊客動向調査によれば、平成21年の主要観光施設の観光客数は、熱田神宮6,652千人、東山総合公園2,284千人、名古屋港水族館1,725千人、名古屋城1,352千人となっており、善通寺市と琴平町の人口とくらべたかぎりでは、観光都市としての名古屋はたいしたことはない、といえる。



金刀比羅宮 参道

奥は象頭山。参道入口から大門～書院～旭社～御本宮～奥社と続く。

門前町研究会として考えた方がよい参考事例：その一つは、金刀比羅宮の御本宮で発売している「幸福の黄色いお守り」と「ミニこんぴら^{いぬ}狗」である。前者は黄金色をしたお守りで、どこでも売っていると言え、そのとおりだが、こんぴらさんの丸金マークがシンプルで、海の守り神ならぬ、お金がたまる、しあわせお守りとして人気がある。

このお守りセット、大門を通り抜けると、参道のあちこちに看板が立てかけられており、神社の営業努力がうかがわれる。本宮前の社務所では、ほかのお守りも並んで売られているが、このお守りに人気が集中している。



幸福の黄色いお守りと ミニこんぴら狗のセッ ト

お守りと陶器製のこんぴら
狗がきんちやく袋に入ってセ
ットとなっている。

こんぴら狗の話は傑作で、その昔、犬が人に代わって、こんぴら参りをしたという、あるようでないような話に、おもわず引き込まれる。その昔、「こんぴら参り」と書いた袋を首にかけた犬が、飼い主の代参をすることもあったようだ。袋には、飼い主の名を記した木札、初穂料、道中の食費などが入っていて、犬は、旅人から旅人へと連れられ、街道筋の人々に世話をされ、こんぴらさんにたどり着いたという。この代参をした犬のことを、「こんぴら狗」と呼ぶ。

この話、どこまで本当の話かわからないが、とにかくこのセットのお守りは「かわいい」といわれ、よく売れていた。ちなみにセット価格は1,500円で、黄色いお守り単独では800円である。このようなお守りの売り方は、熱田神宮の参考になるのではないか。

もう一つは、金刀比羅宮境内の大門内(大門までが参道で、ここから奥は境内になる。境内での物販は禁じられており、土産物店は大門まで)で売っている「こんぴら飴」(正式名称は「五人百姓の加美代飴」)である。

この飴のルーツも傑作である。その昔、といっても数百年も前の昔らしいが、大門内に5家の百姓がいて、この「五人百姓」は金刀比羅宮が行う神事の役職名(現在も続いており、熱田神宮の社家に似ている)であるという。この5家に限って、境内で飴売りをするのが特別に許可され、それが今日に続いている、というのがその歴史である。

この飴は金毘羅宮の餞米を原料としたもので、あっさりとした、上品な味がする。境内地であるので、店舗ではなく、大傘の下で飴を並べて売っているだけの、いたって簡素な店である。

「五人百姓って何？」と足を止める人も多く、売店のおばちゃんはいねいに説明をしていた。この会話を楽しみながら商売をするやり方は、とてもユニークであり、これが観光客を引きつけている。一袋 500 円の飴はこんぴらさんの名物となっており、これも熱田神宮で参考になるのではないか。



五人百姓の店

売っているのは、こんぴら飴のみ。5軒あるが、どの店も同じである。



こんぴら飴

(五人百姓の加美代飴)

扇形の飴に丸金マークと五人百姓の文字が見える。

付属の小さな金槌で、飴をたたいて細かくして食べる。

(20) 東京都・足立区・西新井大師

所在地：東京都大田区西新井

応対者：西新井大師商栄会・会長・鈴木利夫(手焼煎餅 すずきや店主) 電話:03-3890-

0800

概要：西新井大師は、正式には五智山遍照院総持寺という真言宗豊山派の寺院。天長3年(826)弘法大師の創建といわれており、大師が祈祷すると、本堂の西にあった潤れ井戸が復活したという伝説から、この寺院名となった。古くから厄除開運の霊場として名高く、人々の信仰を集めてきた。

本堂は江戸中期の再建といわれ、14間四方、総檜^{けやき}造り、入母屋破風造りで荘厳な威容を誇っていたが、昭和41年(1966)火災で焼失した。現在の本堂は昭和46年(1971)に完成したもの。従来^{きんそう}の山門、三匠堂、宝照殿講堂、光明殿などとともに、大伽藍を形成している。また、文化・文政(1804～1829)の頃からボタンの名所としても知られている。境内五箇所のぼたん園には4,500株余りが植えられ、4月から5月の花の季節には絢爛たる美しさで訪れる参拝者の目を楽しませている。

なお、東武大師線の終点大師前駅から東武伊勢崎線・竹ノ塚駅までの約4.4^{キロメートル}の道のりを持つ「島根六月寺めぐり散歩」があり、西新井大師、旧日光街道に近い島根、六月の寺町を巡る散歩道となっている。



西新井大師の門前町

環七通りから見た西新井大師
環七で分断された門前町だが、環七と大師間の短くなった門前町で頑張っている。

門前町：西新井大師の門前町としての商店街は、大正の頃からあり、もっと規模が大きかった。ところが環状七号線(環七通り)ができたために門前町は南北に分断された。南側の店舗は現在も若干残っているものの往時の元気はない。ここ北も元気とはいえないまでも何とか頑張ってい

る。

現在の商店街の範囲は、基本的には環七から大師までの道とそれに直行する道路(両端は曲線の環七で切られている)の十字形となっている。

商店街の名称は「西新井大師商栄会」だが、商店街組合としてはどこにも登録しておらず、任意の団体(趣旨に賛同する商店の集まり)である。店舗数は、76 店舗だが、最近減少しつつある。

業種は様々で、100 人ほども収容できる割烹料理屋「中田屋」を始め大衆割烹料理「武蔵屋」、居酒屋、和菓子屋、洋菓子飲食店、喫茶店、薬局、床屋、美容室、靴屋、蒲団屋、不動産、コンビニ、酒屋、古本屋、天婦羅屋、電気屋、ペットショップ、時計店、佃煮屋、パン屋、パチンコ屋、煙草屋、金物屋、八百屋など様々である。

会費は、一律に月 3,000 円を徴集している。年中行事としては「よさこい」と「花祭り」を主催している。これには太田区が後援者となっている。「よさこい」は若者が踊る祭だが、出演者は出演料無料ということから、近隣の県や市町村から応募してくる者で充足している。切っ掛けは地元以前からあったグループが近隣のグループに話を集めてきた。

「花まつり」は毎年4月当初から5月中旬までの長い期間をかけて境内で開催されるイベントである。主に絵画や写真などの個展、歌謡ショー、写真コンクール、植木市などが行われ、多くの人を呼び込んでいる。

将来に向けて、さらに何かを行うなど事業の拡大は先立つものがないので考えていない。現在実施している「よさこい」なども正直いって、売上には直結していない。まちの賑わいのためにだけやっているようなものという。

感想：会長に話を聞く前に商店街を含め、周辺を歩いて見てまわった。

門前町は、大通りと門前までの非常に短い距離しかなく、これに直行する道路を含めても範囲は狭く感じた。逆に、こんな短く、狭い範囲でも門前町が形成できるなら、熱田神宮の門前でも門前町を作るのは可能かもしれないと思えた。

門前町を外れて大師の横から裏へ行こうとすると、西も東も狭い路地ばかりで、車もやっとの道幅だったり、西側など車両は通行止めとなって歩行者だけの道もあったりした。これらの狭い道の両側は隙間なく住宅が並んでいた。裏の通りもそれほど幅員があるわけではないが大師へ来る車を当てこんだと思われる有料駐車場が 3 箇所もあった。また、裏からも境内へ入れる門があった。

正面へ戻ると、山門の前を大勢の通勤者のような人が通過するので、その人たちの来る方へ行くと、思いも掛けない近さに東武鉄道大師線の「大師前駅」があり、そこからの人の流れだった。最近、西方 1.2 ㎞ほどの距離に「日暮里舎人モノレール」ができ、「西新井大師西駅」で下車すれば大師には近く参拝客には便利になった。1.2 ㎞を歩くのがきついという人にはモノレールの「江北駅」で降りれば大師前とを結ぶ都バスのルートもある。

境内を取り巻く垣根の石に寄進者の名前が刻まれているのはどこの社寺でも同じだが、ここでは名前の肩書きに「門前」というのがあり、何時の時代のものか分からなかったが、門前に住むあ

るいは門前で商売をしている人が寺に対する感謝の気持ちを持っていたことがうかがい知れた。

ここへは午前と午後の2回訪れたが、朝の7時前でも、ジョギングや犬の散歩の途中と思われる人なども含め、かなりの人が入れ替わり立ち代りお参りに訪れていた。

こちらからアンケートやヒアリングをお願いする前に何人かのお年寄りから声を掛けられた。しかし、世間話をしたくて声を掛けてくるようで、時間を要した割には、残念ながら調査にならないケースが多かった。87歳というお婆さんの「歩けなくなってお終いと思って、せつせとお参りに励んでいる」などという言葉に象徴されるように、概して同じ様な「健康であることに感謝してお礼に来ている」という言葉が多かった。門前町について聞いたが、よく来ている人達だからなのか、余り関心が無かった。

午後には、殆どの店が開いていたがシャッターの閉まった店も見うけられた。しかし、隣のお店の人から「お盆のために閉めているだけ」と知らされた。また、人出もそれなりにあったが、それほど多くはなかった。これもお盆のためかと聞いたが「こんなもん」との答えだった。商店街の間を歩いていると「いらっしやい」、「どうぞ」などという呼びこみの声が盛んに聞かれた。また、この暑いのに手焼煎餅を実際に手で焼いていたのには驚かされた。

境内には、朝には無かった盆踊りの舞台と思われるものが建ちあがりつつあったり、山門に「大師夏まつり2010」の案内看板が掲げられていたりしていた。

また、境内各所の建物や祠、銅像など十数箇所には、すべて説明看板が付けられており、全身が塩にまみれた塩地藏など、初めての者にも興味を抱かせるものもあった。

(21) 東京都・渋谷区・神社本庁

所在地：東京都渋谷区代々木1丁目1番2号 電話：03-3379-8011(代)

対応者：広報センター・部長・葦津 敬之、祭務課長・神保 郁夫

概要：ここでは門前町の調査ではなく、神社が門前町を始めとする周辺地域などどのように付き合うか、または付き合える範囲などについて、全国の神社の規範なども定める位置づけにあるところから情報を得たいと訪れた。

例示がかけ離れているかもしれないがという前置きがあってから、福岡の郊外に最近できた「茅野屋」を教えてくれた。それは茅3ト（不確定）を用いて屋根を葺く際に地元の人に依頼し、営業後も従業員を地元から採用して好感を持たれ、現在、健全な営業が行われているというものだった。それが商売であれ神社であれ、地元との協調がいかに大切なことかと理解した。

研究テーマの門前町については、神社側にとっても大切であるということ、かつ熱田神宮の職員が様々な場面で尻込みするのは、かつて境内に市営住宅が建てられ居座られた歴史があり、トラウマがあることを理解しなければならないという前提に立って話がすすめられた。そこで境内の中で何かをやろうとするなら、青少年育成のためなど神社側が行っても外部から見ても違和感のないもの、あるいは神社側が行った方がよいと思われるものを考えるなら可能ではないかとか、情報開示についての方法には、ITを駆使したものであってもお年寄りでも受け入れられるものがあるなど、熱田神宮の現状や

あり方なども含めて、貴重な意見を得ることができた。

また、大きな視点からみて、最近のパワースポットを始めとする神社ブームは、神社界にとっては好機と捕らえるべきであること、また、熱田神宮では間もなく創祀 1900 年の節目を迎えることをチャンスとして捉えるべきであり、また今年(平成 22 年)、名古屋ではCOP10 が開催されるが、熱田神宮こそ生物多様性のシンボリック的存在であり、世界に類を見ない 2000 年の歴史が明白な森を知ってもらうべきであることなど示唆に富んだ話もあった。

さらに、門前町の事例なら、この明治神宮の表参道(原宿)も立派な門前町であり、時代にそって変化していることを知るのは重要な場所だと指摘もされた。

(22) 東京都・渋谷区・明治神宮

所在地：明治神宮(渋谷区代々木神園町 1-1)及び門前町(東京都渋谷区JR原宿駅から徒歩) 東南東・地下鉄(営団千代田線)明治神宮前駅～表参道駅)

概要：明治天皇・昭憲皇太后を祭神として祀る。大正 4 年(1915)に起工し、大正 9 年(1920)に竣工した比較的新しい神社である。

神の依代(神霊が招き寄せられて乗り移るもの)は木であり森であるということから、ここ明治神宮では常緑広葉樹を中心とした森づくりが計画され、全国の篤志家からの献木、計 9 万 5,559 本、365 種を植え、現在では皇居、新宿御苑とならぶ都心の大きなオアシスを形成している。



神宮表参道(原宿)

日章旗が不自然でなく、なじんでいる若者の街

門前町：東京で表参道とか原宿といえば、若者のまちとして全国に知られていることから、あまり門前町というイメージを持っていなかった。だが、神社本庁の者から見て「明治神宮の前にあり、敬神の念を持って商売をしているように感じる。門前町の研究をしているなら改めて見ておいた方がいいのではないか」といわれて気が付いた。

確かに、道路の中央分離帯に掲げられている日章旗が不自然でなく、どんどんと洒落た若者向けの店が増えているように感じた。時代の流れを敏感に感じ取り、若者が、今、何を求めているかを知り尽くしているようだ。

さらに驚いたのは、本通りだけでなく脇道のように曲がりくねった細い道路へも洒落た店がどんどん進出しており、見方を変えると、どこかヨーロッパの旧市街地を歩いているような錯覚に陥

ようなまちなみができていることだった。

たまたま昼食に入った店から外を眺めていて気が付いたのだが、古い日本家屋の1階前面を改築してヨーロッパの街角にあるブティックのようにしている店などを見ると、やる気があればこんなことまでできるのだという意欲すら湧いてくる思いだった。

これなど発想を逆にすれば、現代的な建築様式で建てられた民家であっても、江戸情緒豊かな外観を持つ建物に模様換えするなどの可能性のあることが、熱田神宮の門前町を創るときのヒントになると思われた。

また、地下鉄の駅名を見て気が付いた。以前は「明治神宮前駅」だった記憶だが「明治神宮前(原宿)駅」と変えられていた。原宿を目的としてきた若者は以前の駅名ではピンと来なかったのかもしれない。これなど「伝馬町駅」を「伝馬町(熱田神宮正門前)駅」にすべきという思いの意を強くした。



明治神宮門前(原宿)駅の表示

(23) 東京都・台東区・金龍山浅草寺

所在地：東京都台東区雷門～浅草

概要：推古天皇の628年、土地の漁師が水中より観音像を得て、それを礼拝したのが創始である。その漁師を祀ったのが三社権現(現浅草神社)。平安時代に慈覚大師円仁が中興。徳川家の庇護を受け、江戸の盛り場として発展。輪王寺門跡の管理下に置かれる。昭和25年に天台宗から独立し、聖観音宗総本山。都内最古の寺院。

門前町：時間があつたことと、表参道で意外な発見をしたことも手伝って、既に知っている積もりの門前町を見ることも意義のあることと、思いを新たにして浅草の浅草寺周辺一帯に広がる門前町に寄った。

第一に驚いたことは、平日の午後やや遅い時刻だということに、人の大勢いたことに驚かされた。それも仲見世に大勢の人が歩いているのは当然と思っても、そこから横へ入ったり並行したりしている道にも人が溢れかえっていたことだった。

多くの外国人の顔が見えることから、ここはすでに国際観光地なのだと改めて認識させられた。また、歩いている日本人の会話からも初めての人も大勢いることも分かった。そして彼らが道に迷って歩くから横道も並行する道も人が溢れ、店舗が出来るのだと想像できた。

ただ、ほんの少し位置が違っているだけでシャッター街のような道もあり、これなど人の流れがそちらへ向かなかったという偶然なのか、何かの仕掛けが悪いのか不思議な思いだった。

この通りには、空き店舗を活用して人を呼び込もうという作戦なのだろうか、台東区によって「江戸下町伝統工芸館」が作られており、そこでは「匠ギャラリー」が入館無料・年中無休で匠の作品や職人による実演が見られたり、オークションに参加したりすることも出来るようになっていた。しかし、「匠の…」という文字に釣られて覗いてみたが、何がといわれても答え難いが期待外れの感じを受けた。



浅草にもあったシャッター街

(24) 千葉県・成田山新勝寺

所在地：〒286—0023 千葉県成田市成田1番地 Tel 0476—22—2111

概要：天慶2年(939)に平将門が反乱を起こすと、寛朝大僧正は朱雀天皇の命を受け、弘法大師が制作した不動明王を奉じて関東に下り、下総国成田の地にて平和祈願をおこなった。天慶3年(940)2月14日に兵乱は平定され、この地に新勝寺の寺号を賜って成田山が開山された。

正式名称を成田山金剛王院新勝寺という真言宗智山派大本山。ちなみに、犬山市にある名古屋別院(成田山大聖寺)は、昭和28年(1983)、名鉄が中心となって新勝寺から勧請して創建された。

門前町：JR成田駅と京成電鉄の京成成田駅は、段差があるためお互いの駅からは見えませんが非常に近接した場所にある。低い位置にある京成成田駅からは、バスターミナルの上に設けられたペDESTリアン・デッキに付属したエスカレーターや階段でJR成田駅の方へ上がることが出来る。この両駅の間から成田山の総門へ至る約800mが参道すなわち門前町となっ

ている。駅前参道入口には「表参道」と成田市長が揮毫した石の文字板がモニュメントにはめられている。

この表参道以外にも駅前からや表参道の途中にも「成田山近道」と書かれた看板が立っていて、そちらにも商店が並んでいるため門前町を形成しているのは1本の道路だけではない。

とにかく表参道と書かれた道路を主体に歩けば、幅員が7mほどしかないと思われる狭い道路に、真ん中の4m程が車道らしくアスファルトの色そのままとなっていて、その両側に赤茶色に着色された1.5m程の歩道がある。歩車道の境界は色だけで段差がないので頻りに走り抜ける車には脅かされる。しかし、両側にびっしりと並んだ商店街の道は大きくSの字形となっているため、次はどのようなになっているかと期待が持たれる。



成田山新勝寺の門前町

昔からの建物も残っていて風情がある。

参道の中ほどになると一応歩車道が区別されており、歩車道の境界には石で掘られた干支の12支が据えられていた。これは平成8年から地域住民と成田市とが協議会をつくり協働事業の一環として始められたセットバック事業の成果である。協力団体には「なごみの米屋」、「成田商工会議所」、「成田市環境協会」、「東京電力」、「NTT 東日本」、「成田ケーブルテレビ」、「上町商店街振興組合」、「成田市消防団第一分団第二部」の8グループである。この事業は現在も継続されているというが、これだけ隙間なく並んだ商店をセットバックするのは大変な事業である。道路脇には、住民参加の街づくりの手法としては全国にさきがけたものとして「まちづくり発祥の地」と掘られた石の柱が立っていたのが印象的だった。平成12年度からは電線の地中化事業も始められており、街並みは視界がひらけ、セットバックした店は白と黒を基調に綺麗になっていた。途中の銀行なども蔵のイメージのデザインとなっていた。

表参道のほぼ真ん中辺りにつくられた「まちかどふれあい館」の前に立てられた、「竣工にあたって」と明記された石碑から「表参道の街づくりの歩み」を列記すれば次のとおりである。

平成2年 街づくり協議会設立

平成8年 上野地区のセットバック事業開始

平成15年 上野・花咲町地区の無電柱化事業完成

平成 17 年 国土交通省より都市景観大賞「美しいまちなみ優秀賞」受賞

平成 18 年 花咲町地区のセットバック事業開始

平成 20 年 (社)全日本建設技術協会より「全建賞」受賞

平成 21 年 第 32 回全国街並みゼミ成田・佐原大会開催

平成 22 年 関東商工会議所より「ベストアクション賞」受賞

「まちかどふれあい館」をあとにして、さらに足をすすめると道は徐々に下り坂となり、上下左右の景観の変化に飽きない。道中にはうなぎ屋が多く目に付くが、かつて江戸から参詣にきた人たちの長旅の疲れを癒すための栄養に富んだうなぎ料理に人気が高かった名残という。坂の途中では、うなぎを店頭で割いているところに人だかりがしている。また坂の途中には古い旅館、漢方薬の店、竹細工の店また手焼きでせんべいを焼いている店などが立ち並び、往時とあまり変化していない街並みが残っていた。

総門前に着くと、反対側は広い駐車場があり、その先の道は道幅も広がっている。かつて成田駅前から参拝電車が走っていた名残の通称「電車道」である。歩いてみてもせいぜい 7、8 分の距離だから、乗る人も少なくなってしまうのだろう。だが、そう思ったのは早とちりだった。

成田国際空港が出来てからは、参拝客とともに国際的な観光客の誘致にも力を入れ「レトロバス」が走るようになったのだ。A と B の 2 ルートがあり、JR 成田駅を起点に表参道を通って成田山へ行くのは当然としても成田空港まで結んでいるのである。商店街も敏感で英語のメニューを出しているという国籍不明の店まで現れ、最近では国際門前町という名称すら生まれるのではないかと思われる。これに影響されて、最近では国土交通省が海外からの客のためのバスツアーも試行しているという。

(25) 千葉県・香取神宮

所在地：〒287—0017 香取市香取 1697 TEL 0478—57—3211

概要：創建は「神武天皇の 18 年」と香取文書に記されている関東最古の大社。御祭神に経津主大神(建御雷之男神)が祀られ、古来国家鎮護の神として皇室の崇敬が最も篤く、特に「神宮」の称号を以て祀られ名神大社として下総国の一の宮となっている。明治以後の社格制では官幣大社に列せられ、その後勅祭社に定められている。剣の神であることから、剣術家が多く信仰している。鹿島神宮と一対の神宮とされ、蝦夷征討の前線基地ともいわれている。また、中臣氏、後の藤原氏の氏神である。

香取大神を祭神とする神社は、奈良の春日大社や宮城の鹽竈神社など数多くあり、昔から伊勢の上参宮に対して下参宮といわれて広く崇敬を集めている。

神域は、大槻郷亀甲山とよばれ、老杉が鬱蒼と生い茂り、県の天然記念物に指定されている。その面積は 123,000 平方メートルで他にも境外地を持っている。

門前町：東関東自動車道の佐原インターチェンジから国道 55 号線に入り、香取神宮に近づくと、国道より広い道路が並行して現れる。それが門前町すなわち香取神宮への入り口である。国道との分岐点は広い駐車場(300 台)となっており、ずっと奥に向かって参道が続いているのが分かる。入り口には「歓迎」と書かれた大きなゲートが建っており、ずっと奥に朱塗りの鳥

居が見えるが、その間は両側に商店が並んでいる。入り口の亀甲堂、真ん中辺りの岩立本店、一番奥の吉川家本店など大きな店以外にもびっしりと商店が並び、その長さおよそ 200 ㍍ほどもあるだろうか。途中で国道へ出られる細い脇道が 1 本あるだけで、いやでも商店街を歩かされる仕掛けになっている。



香取神宮の門前町

正面奥の木々の中に朱塗りの鳥居が見え隠れしている。

興味深かったのは名物「厄除草だんご」と書かれた店の反対側には「厄払いだんご」と微妙に名称が変えてあることだった。また、一方の店には「御祈禱済み」と書かれていた。あり得ないことなのだが、香取神宮には見なかったことにしてもらって、お目こぼしに与っているのだろう。平日でもあり、それほどの人歩いていないのに、朝は 9 時前から夕方 5 時頃まで店が営業していたのには驚かされた。名物には、草だんご以外に七味、さつま芋菓子、佃煮、漬物、地酒、木刀などが目についた。

感想：香取神宮の門前町は、佐原の町の郊外といったような場所のため、周辺には人家が少なく、神社の門前に一画だけ孤立したようにある。しかし、高速道路のインターチェンジが近いのか国道 55 号線を走る車の数は多く、ちょっと休憩がてら香取神宮にお参りしてゆく人も多くいるのではないかと思われる環境である。そう考えれば、広い駐車場があったり朝の早い時間から夕方遅くまで店を開けていたりする理由も納得出来る。しつこい呼び込みはないが「どうですか」という静かな声は好感が持てる。しかし、「厄除」と「厄落とし」はどちらが参拝者の販売意欲を誘うのだろうか。微妙にキャッチフレーズを変えるあたり、お互いに熾烈な競争をしながら商売を続けていることが感じられた。

(26) 茨城県・鹿島神宮

所在地：〒314-0031 鹿嶋市宮中 2306-1 Tel 0299-82-1209

概要：創建は神武朝の皇紀元年、すなわち紀元前 660 年頃といわれている。御祭神は武甕槌^{みかづちのおおかみ}大神である。神代の昔、天照大神の命を受けた武甕槌大神は香取の経津主^{ふつぬしのおおかみ}大神とともに^{たけ}出雲国に向かい国譲りを成就し、皇孫の国たる日本の建国と建設に挺身し、関東開拓の神

として崇敬を集めている。社格は、勅祭社・旧官幣大社(現別表神社)・常陸国の一の宮・全国の鹿島神宮の総本宮となっている。剣の神であることから、剣術家が信仰。香取神宮と一對の神宮で関東最古の神社のひとつ。香取神宮と同じく、蝦夷征討の前線基地ともいわれ、中臣氏、後の藤原氏の氏神である。

この神宮樹叢・70 畝も茨城県指定の天然記念物になっており、奥参道はまさに神の森といえる荘厳な雰囲気を漂わせている。宝物館には、国宝の「直刀」がある。制作年代は約 1300 年前と推定される日本最古で最大の刀である。『常陸国風土記』に、鹿島神宮の神山の砂鉄で作ったとあることから、その剣であろうともいわれている。古くは本殿内に納められていた神刀で御祭神の神劍^{みつのみたまのつるぎ} 節 靈 劍 の名も伝えられている。ちなみに、劍豪塚原卜伝は鹿島流剣道の名人。

また、境内の外れには要石^{かなめいし}があることで有名である。これは鹿島七不思議の一として知られ、地震を起こすナマズの頭を押さえている石といわれている。古来「山の宮」、「御座石」という別名も持ち、根は地中深くに続いていて、幾ら掘っても掘りきれない石といわれている。かつてはこの石の前に本殿があったとも言い伝えられている。

門前町：鹿島神宮の門前町は 9.18 畝あるという。一体どこからどこまでいうのか分からないが、そんなに広いとは思えなかった。正門前から真っ直ぐ伸びる道路の両側が門前町を呈する商店街となっている。道路幅は比較的広く、伊勢の外宮の門前町を思わせる石張りの車道と歩道となっている。電線の地中化がなされていて明るいまち並みとなっている。平日ということもあるだろうが、人通りは今ひとつである。その理由のひとつに考えられるのは、商店が飛び石状態になっていることと、それらの商店も門前町に付き物ともいえる土産物店やレストラン・食堂は数が少なく、洋品店など一般的な商店街のようなまち並みとなっている。さらに進んで、途中から右折するのだが JR 鹿島神宮駅へ至る道路も門前町といえないことはないが、明らかに自動車のための道路という感じである。



鹿島神宮の門前町

境内にも 11 店舗がある。駐車場は参拝者用に 2 箇所あり、正門前の第一駐車場は有料となっている。神宮関係者用には別の駐車場があり参拝者用と区分されている。

感想：香取神宮の門前町を見てきた後で鹿島神宮の門前町を見ると大きな違いに驚く。香取神宮が田舎の門前町あるいは、かつての良き時代の門前町といった穏やかな風情を感じたのに反し、鹿島神宮の門前町は近代都市といった外観を呈している。石で葺いた道路、電線の地中化された広い空間、立ち並ぶ綺麗な店舗と見事なまでに完成したまち並みである。しかし、そこを歩く人は少ない。境内の売店では活気に溢れていたが、ここにそれは感じられない。お正月やお祭りの日などには、この広い車道いっぱいの人並みがごった返すのかも知れない。大きな催事の時だけ賑わえばよいのか、常にある程度の人が訪れた方がよいのか考えさせられる。

2-2 アンケート質問内容

① 参詣者用

門前町調査 アンケート

調査日時/平成 22 年 月 日 () () 時 ~ () 時

調査地点/ 南 門 東 門 勅使門 西 門

天 候/ 快 晴 晴 曇 小 雨 雨

気 温/ 暑 い 気持ちよい 涼しい 寒 い

1 どちらから来られましたか (お住まいは) ?

熱田区 名古屋市 () 区 愛知県 () 市・町

他府県/ 岐阜県 三重県 その他 () 県 () 市

2 熱田神宮へは何で来られましたか (交通機関は) ?

自家用車/ 駐車は (南 門 東 門 会館前 西 門)

地下鉄/ 下車駅は (神宮西 伝馬町)

観光バス 市バス 名 鉄 J R 徒 歩

3 目的は何ですか? (複数回答可)

お参り 観光・境内散策

その他 ()

4 何人で来られましたか?

男 () 人 + 女 () 人 + 子供 () 人の () 人

5 年代は?

20 歳未満 () 人 20 歳代 () 人 30 歳代 () 人

40 歳代 () 人 50 歳代 () 人 60 歳代 () 人

70 歳以上 () 人

6 熱田神宮に来られたのは何回目ですか?

初めて 約 () 回目

7 お参りの後で、どこかへ行く予定はありますか?

ない ある/ きまっている きまっていない

7 その会費は幾らですか？（お差し支えなければご記入ください）
月額 四半期毎 年額 その他（_____） _____円

8 昨年度または最近の主な活動をお書き下さい。

9 今後予定している活動や事業はありますか？
はい いいえ

10 その具体的な活動や事業はどんなものですか？（お差し支えない範囲でご記入ください）

11 その他、何でも気の付いたことをご記入下さい（裏面でも結構です）。

以上です。ご協力ありがとうございました。

③ 個人商店用

調査日時／平成 22 年 月 日（ ）

門前町アンケート
名古屋都市センター

* ここにご記入いただいた情報については、今回の調査研究の目的以外には使用しないことをお約束します。

* 該当する口欄に印を付け、（ ）内又は余白に具体的なことをご記入してください。

1 あなたのお店がここで営業を始められたのは、いつ頃からですか？
明治以前（ ） 明治・大正・昭和（ ）年頃 分からない

2 あなたのお店の最盛期は、いつ頃でしたか？
明治以前（ ） 明治・大正・昭和（ ）年頃 分からない

3 その最盛期に賑わった理由は、何だったと思いますか？
（ _____ ）

- 4 現在、あなたのお店の営業は順調ですか？
はい いいえ どちらでもない
- 5 あなたのお店の営業を順調に続けてゆくためには、何が必要（どうしたらよい）と思いますか？
- 6 あなたのお店は、今後もここで営業を続けてゆく予定ですか？
はい 分からない いいえ（ 頃までの予定）
- 7 あなたのお店の後継者はいますか？ はい いいえ 分からない
- 8 あなたの年代（年齢）は？
30代以下 40代 50代 60代 70代以上
- 9 あなたのお店は、商店街組合に加盟していますか？
はい いいえ
- 10 組合に加盟していないとしたら、それはなぜですか？
- 11 現在、組合は機能をしていると思いますか？
はい いいえ 分からない
- 12 これからも、組合は必要と思いますか？
はい いいえ 分からない
- 13 商店街の活性化に問題となった（又は現在もある）と思われるものはありますか？
ある ない 分からない
- 14 あるとすれば、それは何だと思われますか？
停車列車の減少 後継者の不足 線路横断の不可 大規模店の進出
その他（ ）
- 15 商店街の活性化に役立つた（又は役に立っている）と思われるものはありますか？
ある ない 分からない
- 16 あるとすれば、それは何だと思われますか？

熱田神宮の存在 JR 熱田駅の存在 名鉄神宮前駅の存在 名鉄パレの存在 区役所の移転 商店街の相互競争 その他 ()

17 この商店街を活性化させるためには、どうしたら良いと思いますか？

18 組合が決定したことには協力を惜しみませんか？

はい いいえ 分からない

19 その他、何でも結構です。ご意見があればご記入下さい。

20 あなたのお店の業種はなんですか？

飲食店 (食堂・レストラン・喫茶店) 洋品店 雑貨店
遊戯場 その他 ()

21 あなたのお店に関して、差し支えない範囲でご記入下さい。

店 名 (屋 号) _____

営業者 (商店主) _____

所在地 _____ 名古屋市熱田区

連絡先 (電 話) _____

以上です。ご協力ありがとうございました。

④ 住民用

平成 22 年 月 日 ()

門前町調査 アンケート

名古屋都市センター

* 該当する答にチェックをするか、() や余白に具体的事項をお書きください。

1 熱田神宮の近くに門前町があるといいと思いますか？

はい どちらとも言えない いいえ

2 門前町という、どんな門前町を考えますか？

商店が両側に並ぶ通り (例 長野県・善光寺や東京・浅草)

遊ぶ所や見て楽しむ場所などがある一画 (伊勢・おかげ横丁のような)

古い町並み再現などで、落ち着いた歩ける道 (長野県・馬籠宿のような)

その他 ()

神事・祭典の説明

斎行日時	神事名	概 要
1月5日 0:00～	事代主社祭 (初えびす)	<p>摂社<small>かみちかま</small>の上知我麻神社境内にある大国主社<small>おおくにぬし</small>と事代主社<small>ことしろぬし</small>の祭儀である。古くから、恵比寿大黒の特殊な絵像を譲与する。</p> <p>新春吉兆の福運を授かろうとする参拝者で賑わうが、一番札の信仰があり、これを受けようとひしめきあう様子は壮観である。</p>
1月7日 14:00～	世様神事 (特殊神事)	<p>年の始めにあたり、その年の豊凶を占う特殊神事である。前年の1月12日に「封水世様神事<small>ふうすいよだめし</small>」で清水を入れて東宝殿<small>いみかめ</small>(江戸時代以前は本殿)の床下に納めた斎籠<small>いみかめ</small>を末社・大幸田神社<small>おおさきた</small>の前に据え、欄直<small>ねまき</small>の検知のもとに、雁使<small>がんとし</small>が籠の封を解き、尺木<small>しゃくぎ</small>をとって水量を測り、微声で「減水何分」と称し、その年の雨量の多少、早魃の有無を占う祭である。</p> <p>多くの参詣者で取り囲まれた中で、密やかに行われる珍しい神事として知られている。</p>
1月11日 10:00～	踏歌神事 (特殊神事)	<p>一名「アラレバシリ神事」、俗に「オベロオベロ祭」とも称する。平安時代の宮中年中行事の一つであった踏歌節会<small>とうかのせうえ</small>行事が、いつの頃からか熱田神宮の神事に取り入れられたもの。年の始めにあたり、春がきざす大地を踏んで土地の精霊を鎮め、除厄と招福とを祈る。神事を行う場所は、末社・影向間社<small>えいむかま</small>(古くは政所)、本宮、別宮・八剣宮、末社・大幸田神社である。</p> <p>華やかな衣装を着けた神官が舞う様は、雅そのもので、かつて宮廷の行事であったことを彷彿とさせる。</p>
1月15日 13:00～	歩射神事 (特殊神事)	<p>一名「歩射会」、俗に「御的<small>おまた</small>」とも称する。起源は詳らかでないが、古来、朝廷で行われていた歩射の行事にならったものとされている。一種の豊年と除災とを神に祈る神事で、もとは当神宮の摂社・高座結御子神社<small>たかくらむすひみこ</small>で行われていたのを、元禄時代の頃から本宮に移したものと伝えられており、尾張国内の各神社で行われている同一神事の源流をなしている。神事を行う場所は、旧海上門内の広場である。</p> <p>神官の矢を射る前後の所作が当神宮独特のもので興味深い。</p>

		<p>また、歩射の義が終わるのを待って、拝観者が一斉に大的を目指して駆け寄り、古来、魔除になると信じられている大的中央の千木や的の細片までを奪い合う様は庄巻である。</p>
5月1日 10:30～	舞楽神事 (特殊神事)	<p>起源は詳らかでないが、平安期の初期にはすでに行われていたと伝えられている。熱田社家の1人であった尾張浜主が任明天皇の天覧の栄に浴したなど、その歴史の古いことがうかがわれ、恐らく宮廷以外では日本でも古い舞楽であるということがいえよう。神事を行う場所は、西楽所前に設けられた朱塗りの欄干の付いた舞台である。</p> <p>振鉾^{えんぼ}という舞に始まり、長慶子^{ちやうけいし}に終わる8番の舞樂が順次奉奏される様はしばし時を忘れさせる。</p>
5月4日 19:00～	酔笑人神事 ^{えいせうど} (特殊神事)	<p>「会影堂神事^{えいようど}」とも書き、俗に「オホホ祭」、「於賀斯祭」とも称する。天智天皇7年(668)に草薙神劍が皇居に留められたが、天武天皇朱鳥元年(686)に勅命で還座されたとき、社中こそって歓喜笑樂した様を今に伝える珍しい神事である。</p> <p>この神事は浄間の中で斎行され、特に神面を見てはならない神秘的なものと言い伝えられている。また、この神事には祝詞も神饌^{のりと しんせん}(お供え)もなく行われる。神事を行う場所は、末社・影向間社、神樂殿、別宮・八剣宮、清雪門の4箇所をめぐる。</p> <p>神官が半円形に取り囲む中、神前へ2名進み、装束の袖の下に隠し持った神面^{ちゆうめい}を中啓(末広)で軽く3度叩き、1度毎に「オホ」と微声で唱え、最後に全員が大声で3度笑って終わるが、その大らかな所作には拝観者もつられて笑い出すユーモラスな奇祭である。</p>
5月5日 10:00～	神輿渡御神事 ^{しんよとぎよ} (特殊神事)	<p>古くは「神約祭」とも称した。前日夜に行われる「酔笑人神事」と関連する神事で、神劍還座の際「都を離れ熱田^{みゆき}に幸すれど、永く皇居を鎮め守らん」との神託から、鎮皇門(現在の西門)に神幸し、遥かに皇居を望み、皇城镇護の祭を斎行するもの。</p> <p>宮司以下の祭員や神幸所役が古式に従い、きらびやかな斎服や装束を付け、本宮から出発した神輿を中心とする100余名の行列をつくり、表参道から19号線沿い</p>

		に進み鎮皇門跡で祭典を行い、ふたたび行列を整えて本宮まで還座する様はまさに一大ページェントである。
5月8日 8:00～	豊年祭 (特殊神事)	<p>俗に「御穀祭」、「花の擣」、「花の頭人」、「おためし」とも称する。1月7日の世様神事とともに農事に関係の深い重要な祭である。日本武尊が東夷平定の際に、道すがらあまねく人々に農耕、養蚕、培綿の技術を授けられた御徳を追仰する祭である。</p> <p>付随する行事として、数日前から参籠した神職が西楽所に俗に「おためし所」を飾り、陸田模型の畠所と水田模型の田所を、8日から13日まで一般に展覧する。農民はこの飾り物の出来具合によって、その年の豊凶を占う。</p> <p>飾り物は、非常に細かく出来ており、ユーモラスな所もあって、見る者を楽しませる。</p>
5月13日 11:00～	御衣祭 (特殊神事)	<p>起源は詳らかでないが、当神宮北の旗屋の地名が、約1500年前の雄略天皇の時、呉から朝廷へ奉られた漢織が後世この地に住み機綾といったのが、さらに旗屋と改められたと伝えられる。また、宮簀媛命が、旗屋の地で忌機殿に籠り神御衣を織られた遺蹟であるとの説もある。</p> <p>祭典は、早朝、機殿のある名古屋市港区築地神社から、奉賛会の手により御衣御料を捧持し海上を遡り、熱田区神戸の浜に向い、熱田神宮からの迎えとともに、「大一御用」の幟を先頭に本宮へ向う。本宮では、和妙(絹布)、荒妙(麻布)を辛櫃から取り出して仮の案(台)に置いてから、折櫃に納める。</p>
6月5日 10:00～	例祭 (熱田祭)	<p>一名「あつたまつり」と称され、俗に「ショウブ祭」ともいう。宮中から勅使をお迎えし、御幣物(神に捧げるもの)の奉奠、御祭文(中国風の祝詞)の奏上をいただく、熱田神宮で最も重要、かつ荘厳な祭典である。</p> <p>これに伴って、奉納行事が境内・境外の各所で行われる。花火、巻藁献灯、柔道、相撲、剣道、献茶、献花、能、棒の手、文芸、演芸などである。</p>
6月18日 10:00～	御田植祭 (特殊神事)	<p>摂社・御田神社の前で行われる五穀豊穰を祈る祭儀である。斎主の祝詞奏上に次いで、芙蓉の挿頭花を差し、玉苗を付した榊を手にした早乙女が優雅な田舞が奏せ</p>

		られる。
6月30日 12月31日 15:00～	おお ほうえ 大 祓 (特殊神事)	古来、6月の晦日 <small>うごもり</small> と12月の大晦日 <small>おおつごもり</small> に、万民の罪や穢れを祓った神事である。大祓の詞 <small>ことば</small> が奏上された後、齋串 <small>いぐし</small> で知らず知らずのうちに付いた罪・穢れを祓う。6月の齋串は、新鮮な茅 <small>ちがや</small> であるが、12月は太く短い幣串 <small>へいぐし</small> に紙垂 <small>しで</small> を付けた御幣 <small>ごへい</small> となる。
11月15日	七五三詣	神事とは異なるが、男子は3歳と5歳、女子は3歳と7歳とに当たる年の11月15日に氏神に参詣し、成長期の守護を祈るとともに、神からも地域社会からも人格を承認される人生儀礼のひとつである。熱田神宮では、新年の初詣に次ぐ多くの人出で賑わう。
12月25日 10:00～	御煤納神事 (特殊神事)	新しい年を迎えるために、忌竹という小笹で社殿の埃を掃う行事である。

参考資料：熱田神宮宮庁『熱田神宮』・『熱田神宮史料 年中行事編 下巻』

2-4 奉納・催事

開催日時	行事名	概要
1月6日	書初め大会	文化殿講堂で行われる。 (平成22年は、1月6日に第38回書きぞめ大会が開催され、愛知県内の小中学生、約1,700名が参加した。)
1月26日	防火デー消防訓練	文化財防火デーに合わせて、熱田消防署、白鳥消防団、熱田神宮自衛消防団が合同で消防訓練を行う。 (平成21年は、上知我麻神社を出火元に想定し、職員の参拝者の避難誘導、消火器やパケツリレーで初期消火訓練などを行った)
2月6日 「海苔の日」	新海苔奉納並配布	愛知県海苔問屋組合昭和会・愛知海苔生産者組合・愛知県漁業協同組合連合会による新海苔の奉納と参拝者に無料配布を行う。
2月上旬	小笠原流弓馬術演武奉納	小笠原流弓馬術礼法教場により、風を切って鳴る音が魔物を退散させるという鏑矢 <small>かぶらや</small> を射る「臺目の儀 <small>ひきめ</small> 」と数人の射手が横に並んで順番に矢を放つ「百々手式」とを奉納。(平成22年は、2月11日があいにくの雨のため文化講堂での開催となったが、多くの拝観者の見守る前で門人による「臺目の儀」と「百々手式」が奉納された。例年は齋館前で行われ、臺目の儀では、射手1名が先

		端にこぶし大の鐙の付いた矢を放ち、ヒューという鐙矢が風を切る音が境内に響かせる。次の百々手式では、色とりどりの装束を身にまとった射手が横一列に並んで次々に矢を放ち、最後は回転する木馬の騎上からのめがけて矢を放つ)
3月下旬	中日ドラゴンズ参拝	(平成22年は、3月23日に選手約50名が正門にバス2台で到着し、拝殿前で球団関係者と合流した後、御垣内で神前に玉串を捧げリーグ制覇と日本一を祈念した)
4月20日頃	春姫来宮	名古屋城本丸御殿の復元を目指す本丸御殿フォーラムの主催で行われる春姫道中の一行約200名が参拝に訪れる。 (平成21年は、4月19日に第15回春姫道中が開催された。参拝後は西門から次のパレード会場へ出発した)
4月中～下旬	熱田神楽奉納	熱田神楽保存会が保存継承している里神楽約40曲を奉納。祈祷殿長床。 (平成21年は、4月25日)
5月5日	写生大会	毎年、神輿渡御神事の行われる5月5日に参道を始めとする境内で行われる。
5月下旬	大注連縄張替え	例祭準備の一環として豊年講により大楠で大注連縄の張替え。 <small>しめなわ</small>
6月下旬～7月 拝殿前	横綱手数入奉納	大相撲名古屋場所前の手数入奉納。 (平成22年は、7月3日、相撲協会関係者と御垣内での参拝を済ませた横綱白鵬が太刀持ちに安美錦、露払いに旭天鵬を従え、手数入奉納を行った。この日は雨のため拝殿内での奉納となった)
7月7日前後 拝殿前	刀剣鍛錬・研磨等技術奉納	刀剣並技術奉納奉賛会が主催で行うもので、7月の鍛錬奉納には、拝殿前に仮の鍛錬所を設置し、鍛錬・焼き入れを、8月は技術奉納で、研き・ハバキ(鋸)の制作を行う。いずれも一般参観者に体験させてもらえる機会がある。12月には、完成した日本刀を熱田神宮に奉納。 (平成22年は、7月10日から12日まで刀剣鍛錬が行われ参観者が槌を振るう機会も設けられた。また、研磨技術等の奉納は8月22日に行われた)
9月20日	観月会	中秋の名月を前に、祈祷殿長床で行う尺八や神楽・雅

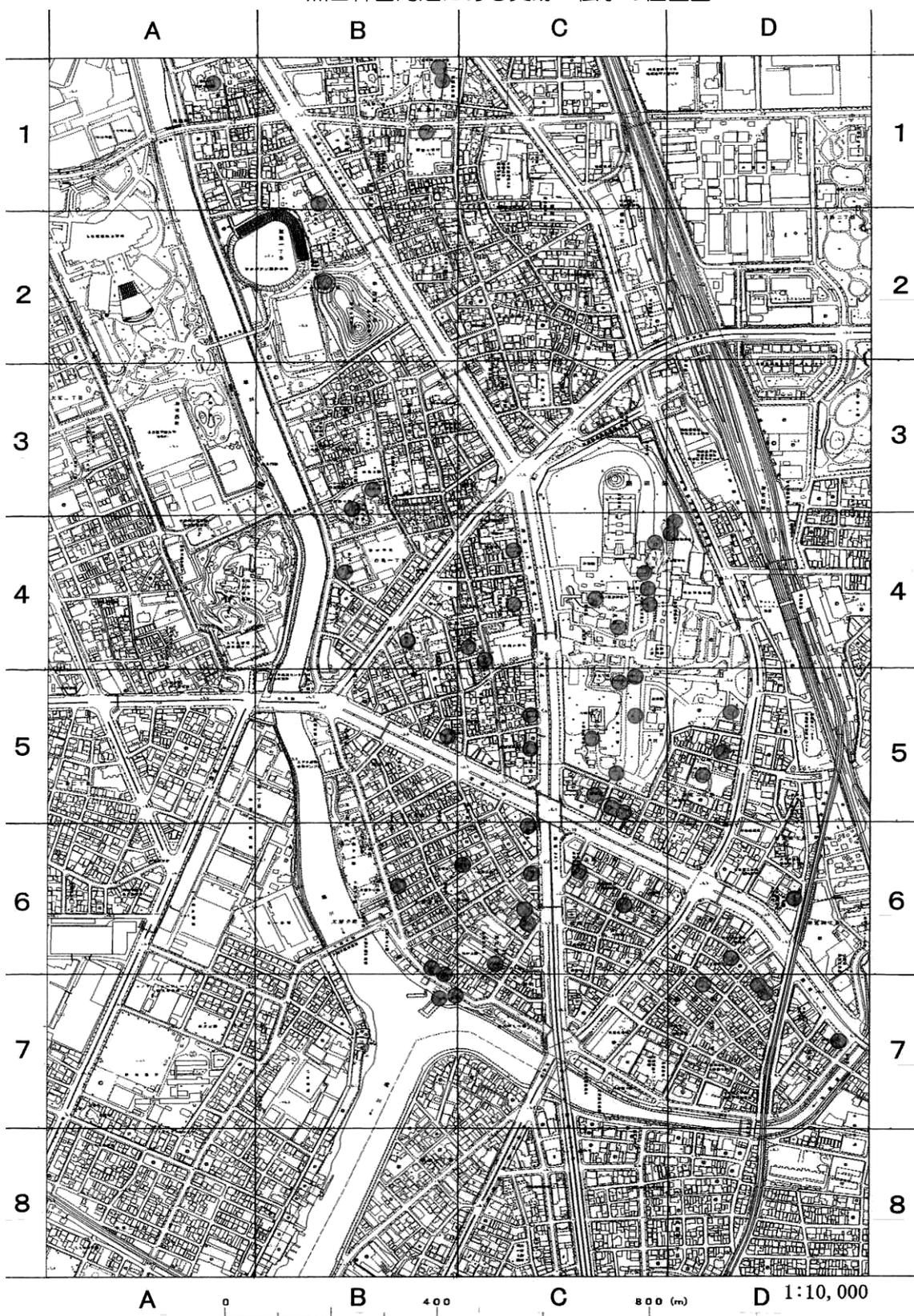
18:00~		<p>楽の演奏会。</p> <p>(平成22年は、9月20日午後6時から、第一部に「熱田の杜観月演奏会」として生田流箏曲松ヶ枝会による箏と尺八の演奏、第二部に桐竹会による雅楽と舞楽が演奏された)</p>
10月~11月下旬	掛魚奉納	<p>焼津神社氏子青年会が鮮魚の入った桶を担ぎ、第二鳥居から拝殿前までと海上門跡から神楽殿前の2回にわたり、参道を威勢よく駆け抜けて奉納。</p> <p>(平成22年は、10月25日に第31回を迎える焼津神社氏子有志による掛魚奉納が行われた。当日は、氏子有志が真っ白な装束に身を固め、第二鳥居から拝殿までを一気に駆け抜け、生きの良い魚を神前に供えた)</p>
12月25日頃	大注連縄奉納	<p>豊年講により大楠の大注連縄の調製と奉飾。</p> <p>(平成22年は、12月25日早朝から3時間ほどを文化殿講堂で講員約30名による奉製を行い、正午から御垣内参拝の後、太さ約10匁、長さ約10尺の大注連縄を大楠に奉飾した)</p>
12月30日	大鏡餅奉納	<p>豊年講により5俵取りと1俵取りの大鏡餅が奉納。</p> <p>(平成22年は、豊年講知多南部支部から5俵取りの大鏡餅が、豊年講海部支部・名古屋支部と半田板山御鏡講からそれぞれ1俵取りの鏡餅が拝殿に納められた)</p>

注：開催日時は、確定しているものが少なく、ここに記載したものは過去の日時を参考としたものであることに注意。

参考資料：熱田神宮宮庁『社報 あつた』平成21年冬(No.221)～平成22年秋(No.228)

2-5 史跡・伝承

熱田神宮周辺にある史跡・伝承の位置図



No	通 称 ・ 所在地 / 概 要（典 拠）
1	<p>高蔵結御子神社・高蔵町【1-B】 <small>たかくらむすびみこ</small> 熱田神宮の摂社。俗に高蔵神社と呼ぶ。祭神は高倉下命など。子育ての神として知られ、毎年6月1日の大祭は「井戸のぞき」で賑わう。井戸をのぞくと子供の虫封じになるという。（名古屋市教育委員会）</p>
2	<p>尾張連浜主の歌碑・高蔵町（高座結御子神社境内）【1-B】 翁とて侘びやは居らむ 草も木も栄ゆる時に 出でて舞ひてむ 浜主は熱田の伶人。 承和12年（845）正月8日、仁明天皇の御前で113歳の老齢を以って、自作の「和風長寿楽」を見事に舞い、大極殿に居並ぶ人々を驚嘆させた当代における舞楽の大家である。（高蔵結御子神社）</p>
3	<p>雲心寺・尾頭町【1-A】 曹洞宗。文政3年（1830）創建。本堂前の線刻地蔵は、室町時代の頃の作と推定される。（名古屋市教育委員会）</p>
4	<p>夜寒の里碑・夜寒町【1-B】 この辺りは、閑静で眺望が良く別荘地とされた。古地誌『厚覧草』などに夜寒の里と記され、今も地名が残る。歌は歌人磯部芦丸（号千船）が建てたもの。（名古屋市教育委員会）</p> <p>夜寒の里跡 尾張の歌枕の一つである「夜寒里」の所在地については諸説がある。 『張州雑誌』に「春敲門<small>しゅんかうもん</small>の北、森の辺<small>あたり</small>とか、本宮の森の北とか、各々の説未だ詳<small>つまび</small>らかならず」とあり、また、延宝6年（1678）の『厚覧草』と元禄12年（1699）の『熱田旧記』には大宮の北、高蔵の南とあり、現在の夜寒町あたりをさしている。 なお、夜寒の地名をとった「夜寒焼」は、辻鉦二郎が明治12年（1879）ころ現在の中区金山一丁目に窯を築き、もっぱら茶器を焼成していたものである。（名古屋市教育委員会）</p>
5	<p>青大悲寺・旗屋一丁目【1-B】 如来教本山。本尊は釈迦牟尼仏像。この地に生まれた「きの」は啓示を受け享和2年（1802）如来教を唱えた。県指定文化財の鑄鉄地蔵菩薩立像がある。（名古屋市教育委員会）</p>

6	<p>断夫山・旗屋一丁目（熱田神宮公園内）【2-B】</p> <p>東海地方最大の前方後円墳で、全長 151 ㍎、前方部の幅 26 ㍎、後円部の直径 80 ㍎、前方部の高さ 16.2 ㍎、後円部の高さ 13 ㍎の規模を誇る。ちなみに、断夫とは、夫亡き後、貞節を守った宮簀媛をさすなどもいわれている。</p> <p>前方部と後円部の間のくびれ部に「造り出し」と呼ぶ小丘部が西側にある。後円部は三段築成であったと思われ、一段目に須恵質と土師質の円筒埴輪を巡らしていた。</p> <p>この古墳は6世紀の始め、尾張南部に勢力を持った尾張氏の首長の墓と考えられている。</p> <p>昭和62年、国の史跡に指定された。（名古屋市教育委員会）</p>
7	<p>法持寺・旗屋二丁目【3-B】</p> <p>曹洞宗。芭蕉、林桐葉、若山牧水ら文人が訪れ句会や歌会を開いたことで知られ、句碑も残る。（名古屋市教育委員会）</p>
8	<p>白鳥御陵・白鳥一丁目（法持寺西）【3-B】【4-B】</p> <p>全長 74 ㍎の6世紀初頭の前方後円墳。日本武尊の墓といわれるが、尾張氏であろう。江戸時代に台風で一部崩壊し、石室が露出した。小田切春江の記録がある。（名古屋市教育委員会）</p> <p>法持寺の西に隣接する前方後円墳である。かつては法持寺の守護神や、明治時代には熱田神宮の管理にもなっていたが、現在は名古屋市の管理となっている。</p> <p>日本武尊が能褒野<small>の褒野</small>でなくなった後、白鳥になって東方へ飛び去ったことが『記紀』に記されているが、その大和の琴弾や河内の旧市邑だけでなく、宮簀媛命を慕う尊なら当然熱田に飛来したであろうという考えをかつての熱田神宮宮司・角田忠行が『熱田地陵墓考』に著してからは、命の御陵と言い伝えられている。</p> <p>『尾張志』に、天保8年（1837）8月の台風で御陵の上に大木が倒れ、墳墓の一角が崩れ、墳中の石廓から太刀、鉾、鏡などの副葬品の数々が発見されたことがあり、これから尾張の豪族の古墳であろうと推定された。</p> <p>また『張州雑誌』巻25には、御陵の上に松の古木があって、それを幡掛の松というところあり、様々な書物に記されたいわれなどがある。旗については、日本武尊が東征の折に愛智郡の江崎にさしかかると空から幡が降ってきたのを翁が取り上げ尊に捧げたので、尊は翁を幡綾とし、その村を幡綾村（現在の旗屋）と名付けたと記されている。</p> <p>陵内には、『古事記』の研究者として知られる本居宣長の「しきしまの やまとこひしみ 白とりの かけいりましし あとどころこれ」という歌碑（明治36年建立）がある。</p>

9	<p>楊貴妃伝説・熱田神宮境内【4-D】</p> <p>唐が日本侵略を企てていることを知った熱田神宮の祭神・天照大神が、玄宗皇帝を色香で誑かすため楊貴妃になって唐に渡ったという伝説である。</p> <p>楊貴妃は、安祿山の乱から逃れる途中で亡くなり熱田に戻る。白樂天の「長恨歌」によれば、楊貴妃を失った玄宗は楊貴妃を思い切れず、遣いの者を出して楊貴妃の行方を探させた。遣いの者は、楊貴妃が蓬萊の地に居るといふ噂から、熱田に来て東の門を叩き、楊貴妃に会って玄宗の思いを告げたという。この門が春敲門であるという。春敲門は朱鳥元年（686）に建てられた実在した門で、小野東風筆と伝える扁額が熱田神宮宝物館に保存されている。</p> <p>また、熱田神宮の古地図（亨禄古図）にも楊貴妃の墓が描かれており、昭和30年頃までその石塔の一部という欠片が清水社の近くにあった。実在のものとマッチさせたよくできた言い伝えである。</p> <p>さらに清水社の裏にある池の中に立つ三角の石が楊貴妃の墓石の欠片だといわれていることが、パワースポットとしての人気を高めている。</p> <p>なお、この伝説は鎌倉時代に著された『曾我物語り』の巻2に「玄宗皇帝の事」として記されていることから、相当に古くから言い伝えられていたことが分かる。</p>
10	<p>清水社・熱田神宮境内【4-D】</p> <p>祭神は罔象女神<small>みずはのめのかみ</small>で水を司る神である。伊弉諾尊、伊弉册尊の御子である。俗に「お清水さま」と呼ばれ、ここに湧いている水で眼を洗えば眼がよくなり、肌を洗えば肌がきれいになるという信仰がある。最近パワースポットとしての人気が高い。</p>
11	<p>土用殿・熱田神宮境内【4-C】</p> <p>神剣を奉安した御殿で、本殿の東側に相並んで鎮座せられていた。いまの神楽殿の東北隅である。様式は宝庫造、俗に井楼組<small>せいろくみ</small>の造で、桁行1間4尺4分、梁間3尺5寸5分、屋根は切妻・松皮葺<small>ひわたるまき</small>で箱棟である。</p> <p>永正14年（1517）將軍足利義植の造営と伝え、天文11年（1542）修造せられている。なお昭和46年（1971）古式のままにもとの地に復元せられた。</p>
12	<p>源頼朝生誕地と産湯の井戸・白鳥二丁目（誓願寺）【4-C】</p> <p>この地は平安時代末期、熱田大宮司藤原氏の別邸があったところで、藤原季範の娘由良御前は、源義朝の正室となり、身ごもって久安3年（1147）熱田の実家に帰り、この別邸で頼朝を生んだといわれている。</p> <p>亨禄2年（1529）別邸跡に妙光尼日秀、世にいう善光上人により誓願寺が建てられた。妙光山と号し、西山浄土宗の寺で、本尊は木造阿弥陀如来坐像である。（名古屋市教育委員会）</p> <p>この地は平安時代末期、熱田大宮司藤原氏（後の千秋家）の別邸があったところで、京の都に在住していた藤原季範の娘・由良御前は、源義朝の正室となり、身ご</p>

	<p>もって久安3年（1147）熱田の実家に帰り、この別邸で後に鎌倉初代将軍となった頼朝を生んだ。このため、この境内にある井戸は、源頼朝が産湯を使ったと言われるようになった。</p>
13	<p>ならずの梅・熱田神宮境内【4-C】</p> <p>この梅は『享祿古図』にも描かれている奇木で、花は八重である。一度も実をつけたことがないので「ならずの梅」と名付けられ、古くから有名である。</p> <p>『尾張名所図会』に、この木の梅の実を見つければ瑞福がある。また『厚覧草』には、このあたりを蓬が島とって、この梅の垣根のあたりで蓬草を見つければ祥瑞だということが記されている。</p>
14	<p>若山牧水歌碑・白鳥一丁目【4-B】</p> <p>「うす紅に 葉はいち早く 萌えいでて 咲かむとすなり 山ざくら花」の歌碑が宮中学校正門のすぐ右にある。校庭に芭蕉のすみれ塚句碑もある。（名古屋市教育委員会）</p> <p>牧水は、明治41年（1908）以後、この地にあった法持寺（月笑軒）を数回訪れ、短歌会にも出席した。</p> <p>その縁により、牧水亡きあと、昭和11年に門人たちの手によって、牧水自筆の書を転写して、この歌碑が建てられた。昭和20年の熱田空襲により、同寺は全焼したが、奇跡的にもこの碑は焼け残り、戦後、本校の開校に伴い、現地に移された。</p> <p>なお、この歌は本校校歌の中によみこまれている。（宮中学校）</p>
15	<p>西樂所・熱田神宮境内【4-C】</p> <p>もとは東西相對していて、東樂所、西樂所又は左樂所、右樂所ともいい、海上門を入ると左右に向い合っていた。貞亨3年（1686）五代将軍徳川綱吉の再建である。</p> <p>5月1日に行われる舞樂神事の演奏場所に使われたり、豊年祭に5月8日～13日に公開される「おためし所」が飾られる。</p>
16	<p>信長塀・熱田神宮境内【4-C】</p> <p>永祿3年（1560）織田信長が桶狭間出陣の際、熱田神宮に願文を奉して大勝したので、その礼として奉納した築地塀である。土と石灰を油で練り固め瓦を厚く積み重ねたもので、必要な多数の瓦は本宮北の地に窯を築き焼いたので、その土地の名を「瓦焼」というようになったと伝え、練塀の古式にならい、兵庫・西宮神社の大練塀、京都・三十三間堂の太閤塀とともに日本三大土塀の一つとしても名高い。</p>
17	<p><small>りょういかく</small> 龍影閣・熱田神宮境内【4-C】</p> <p>明治11年10月26日明治天皇が北陸・東海両道御巡行の途次、愛知県に臨幸あそばされた際に、県が便殿（休息のための御殿）として造築した建物であった。</p> <p>昭和7年、西区庄内公園に移され、野原真太郎氏が保存の任にあたっていたが、</p>

	<p>明治維新百年に際し同氏より維新関係資料約百点とともに献納せられたものである。なお、2階の御座所は当時のままに保存されており、1階は練成道場として使用されている。</p>
18	<p>^{まんどころ}政所・白鳥二丁目（熱田神宮西門の北西）【4-C】 かつて熱田神宮の祭礼に関することすべてを掌っていた。現在、この業務は同神宮に移り、そこに熱田神宮職員の官舎ができた。</p>
19	<p>七本楠・熱田神宮境内【4-C】 境内にはクスノキが多いが、そのうち特に巨大なものが七本あったので、俗に七本楠といわれる。ことに手水舎北の大楠は弘法大師手植えと伝え、樹齢千年前後の巨木である。数匹のヘビが住んでおり、シロヘビもいるといわれている。ヘビを神使として崇めお参りする人が絶えない。</p>
20	<p>本遠寺・白鳥二丁目【4-B】 曹洞宗。嘉暦年間（1326～1329）日澄上人が創建。戦災で焼失したが、仁王門の墓股・鰐口などが残る。（名古屋市教育委員会）</p>
21	<p>成福寺・白鳥二丁目【4-C】 曹洞宗。文化10年（1813）太平洋を漂流した督乗丸の船頭小栗重吉が建立した「船頭重吉の碑」がある。山門は四脚門で江戸中期のものと思われる。（名古屋市教育委員会）</p> <p>船頭重吉碑 堀川沿いにある問屋の1人小島屋庄右衛門は、督乗丸という船を持っており、その船頭を重吉といった。文化10年11月督乗丸は、尾張藩の米を江戸へ運搬した帰路、御前崎沖で台風に遭い、1年4ヶ月にわたる漂流をし、カリフォルニアのサンタバーバラ沖でイギリス船に助けられた。</p>
22	<p>龍之寺（龍之坊跡）・白鳥二丁目【4-C】 天台宗。戦国の頃、宗長、紹巴、宗牧ら連歌師による「滝之坊興行」で知られる。信長が幼時にこの寺で手習いしたといわれ、すずり石が残る。（名古屋市教育委員会）</p>
23	<p>佐久間燈籠・熱田神宮境内正参道両側【5-C】 家康の臣・尾張御器所の城主であった佐久間盛次の四男、大膳亮勝之が海上で台風に遭い、当神宮の守護を祈り、難を免れたことから、寛永7年（1630）にお礼として寄進したもの。なお佐久間燈籠は、京都の南禅寺と東京の上野・東照寺にもあり、江戸時代から三代燈籠の一つとして知られる。</p>
24	<p>二十五丁橋・熱田神宮境内南神池南東【5-C】 『尾張名所図会』や名古屋甚句で名高く、板石が25枚並んでいるところから二十五丁橋といわれ、西行法師もここで休んだと伝える。名古屋では最古の石橋という。</p>

	架橋時期は不詳だが、元々は旧参道に架かっていたが、昭和 30 年に今の場所へ移された。
25	<p>大手水鉢・熱田神宮境内愛知県神社庁前【5-D】</p> <p>愛知県神社庁の建物の前に置かれた大きな水槽は、六十ハツプから寄贈された石製の手水鉢で、多分、日本一の大きさではないかと思われる。余りにも大きいため実際の使用ができず、現在は単なる水槽としてしか使われていない。</p>
26	<p>清雪門<small>せいせつもん</small>・熱田神宮境内旧参道西側【5-C】</p> <p>もと本宮の北門と伝えられ、俗に不開門<small>あかまのもん</small>ともいわれ、かたく閉ざされたままである。天智天皇 7 年（668 年）故あって皇居に留らせ給うた神剣が、朱鳥元年（686 年）再び当神宮に収められた時、二度と御動座なきよう門を閉ざしたという故事による。</p>
27	<p>笠亭仙果出生地跡・白鳥三丁目【5-C】</p> <p>江戸末期の著名な戯作者。文化 3 年（1806）熱田中瀬に生まれた。（名古屋市教育委員会）</p>
28	<p>なごやへの道標・白鳥三丁目【5-B】</p> <p>「右名古屋道・左満へかす道」「波除石」と刻まれる。（名古屋市教育委員会）</p>
29	<p>太郎庵椿・熱田神宮境内八剣宮前【5-C】</p> <p>やぶつばきの一種。樹齢 300 年をこえる。11 月の末から 4 月のはじめまで淡紅色の花をつける。</p> <p>江戸中期古渡に住む高田太郎庵という茶人が愛好したというので、この名がある。</p>
30	<p>清正公力石・神宮二丁目【5-D】</p> <p>正山栄立寺境内にあり、名古屋城の築城の総奉行であった加藤清正が寄進したものと伝えられている。</p> <p>高さ 1.5 ㍍、幅 1 ㍍程の方形の巨石で、「往昔金城苑清正公力石」とある。</p>
31	<p>岡部又右衛門慰宅跡・白鳥三丁目【5-C】</p> <p>岡部家は代々熱田の宮大工であった。又兵衛以俊は安土城築城の時、総大匠司となりこれを完成した。その功により信長から「日本総天守棟梁」の称号を与えられた。（名古屋市教育委員会）</p> <p>平成 21 年（2009）に東映映画社で作られた映画「火天の城」の主人公。</p>
32	<p>円通寺・神宮二丁目【5-D】</p> <p>曹洞宗。12 月 16 日に防火守護、諸難消滅を祈願した火渡り神事が行われる。</p> <p>四間四方に積まれた大護摩の燃えさかる火中を行者に続き、信者が素足で渡る。（名古屋市教育委員会）</p>
33	<p>南門鳥居（正門）・熱田神宮境内【5-C】</p> <p>右の柱上部には、第二次大戦時に焼夷弾の破片が突き刺さった跡が残されている。</p>

34	<p>蔵福寺・神宮二丁目（蓬萊軒の前）【5-C】</p> <p>浄土宗西山禅林寺派。二代藩主光友の命で延宝4年（1676）時の鐘が設置され明治以降も撞かれた。明治40年廃止。鐘楼は消失したが、鐘は残った。（名古屋市教育委員会）</p>
	<p>蔵福寺の時の鐘</p> <p>七里の渡しの常夜燈横に建つ「時の鐘」は、元市場町（現 神宮二丁目）にあった蔵福寺に、延宝4年（1676）、二代尾張藩主・徳川光友の命により、鑄物師・水野太郎左衛門によって鑄造され、置かれていたものである。鐘楼は2間4尺（約4.8<small>尺</small>）四方、高さ4間1尺（約7.6<small>尺</small>）の高楼で、鐘は長さ5尺1分（約1.5<small>尺</small>）、直径2尺8寸8分（約87<small>釐</small>）、厚さ3寸2分（約10<small>釐</small>）である。鐘楼は昭和20年3月の戦災で焼失したが鐘は損傷も受けず現存し、現在、名古屋市博物館に保存されている。</p>
35	<p>林桐葉宅跡・神宮二丁目（蓬萊軒の南隣）【5-C】</p> <p>林桐葉は熱田の郷土で、貞享元年（1684）冬、『野ざらし紀行』の旅をしていた芭蕉を、わが家に迎えて蕉門に入り、また鳴海の下里知足を紹介するなど、尾張蕉風の開拓者となった。芭蕉もよく立寄って名吟を残し、『熱田三歌仙』もここで巻かれている。</p> <p>晩年は、元竹と号し、書道に熱中して俳諧から遠ざかった。正徳2年（1712）没した。（名古屋市教育委員会）</p>
36	<p>まつこ 松姫社・神宮二丁目【5-C】【6-C】</p> <p>熱田神宮の摂社のひとつで祭神は宮簀媛命だが、興味深い話が残っている。</p> <p>かつてここを流れていた清流で布を晒していた宮簀媛命に、日本武尊が通りかかり氷上への道を問われたが、聞こえない振りをして答えなかったという。この故事から、お参りをすると耳がよく聞こえるようになるという信仰につながっている。</p> <p>一説に、川辺で布を晒していた宮簀媛命に日本武尊が通りかかり、そこに久しくとどまった。その時、天から幡<small>はた</small>が降ってきて乎止与命の家の門前に立ったので、これを稲種命に与えて幡頭<small>はたがしら</small>とし、乎止与命には機綾<small>はたあや</small>という名を与えた。旗屋<small>はたや</small>という町名の起こりといわれている。</p> <p>また、一説に、宮簀媛命が、日本武尊の無事の帰還を天神地祇に祈るため門戸を閉じ親族の声にも耳を貸さなかったという。釘と底の抜けた柄杓を奉納して祈ると耳が聞こえるようになるといわれている。釘も柄杓も通りがよいものなので、耳も通りが良くなるというもの。長野県の諏訪大社でも、安産祈願に底の抜けた柄杓を奉納する習わしがある。</p>
37	<p>円福寺・須賀町【6-C】</p> <p>時宗、足利氏と関係が深い。六代将軍義教の連歌懐紙（県指定文化財）など文化財が多い。亀井道場と呼ばれ、免許を受け境内で狂言などを興行したという。（名古屋</p>

	屋市教育委員会)
38	<p>聖徳寺・大瀬古町【6-C】【6-B】</p> <p>浄土宗西山禅林寺派。本尊は阿弥陀如来。漁夫が海中から引き揚げたという聖徳太子像（県指定文化財）は漁夫の信仰を集めた。江戸初期、宮の渡しの常夜灯を管理。（名古屋市教育委員会）</p>
39	<p>影清社・神戸町【6-C】</p> <p>眼病の神として信仰が厚い。平清盛は平家滅亡後、熱田へ身をおくした。謡曲『景清』に熱田で遊女との間に一子儲けたとある。その子は景清が失明し病に倒れた時、遊里に身売りしながら父を看病したと伝えられる。（名古屋市教育委員会）</p> <p>平家の猛将、平影清の住んでいた所と言われる場所にある小さな神社である。影清は熱田神宮の大宮司季範の伯父だったとか、大宮司の婿だったとか色々な言い伝えがあるため、没落後、熱田に逃れてきて隠れ住んだと言われれば当然と思ってしまう。晩年、盲目となった影清に因んで眼の神様として信仰を集めている。</p>
40	<p>東海道道標・伝馬一丁目【6-C】</p> <p>旧東海道と旧名古屋・美濃路との分岐点。二基の道標が残る。一つは村瀬家の宅地内に移されている。（名古屋市教育委員会）</p> <p>ここ熱田伝馬町の西端は、江戸時代、東海道と美濃路（又は佐屋路）の分岐点で、重要な地点であった。この道標の位置（T字路の東南隅）は、建立当時（1790年）そのままである。四面には、次のように刻まれている。</p> <p>北 さやつしま（佐屋津島）</p> <p>西 同 みのち（美濃路）</p> <p>南 寛政2 庚戌年 <small>かんせい かのえいねん</small></p> <p>東 江戸かいとう（街道）</p> <p>西</p> <p>北 なこやきそ道（名古屋木曾）</p> <p>南 京いせ（伊勢）七里の渡し</p> <p>北 道</p> <p>是より北あつた（熱田）御本殿貳丁 <small>にほんどう じふ</small></p> <p>なお、三叉路の東北隅には、これより32年前（宝暦8年）に建立された道標があった。標示は、「京いせ（伊勢）七里の渡し」以外は、これと同じである。戦災で破損したが復元され、10 ㍍ほど北側にある。（名古屋市教育委員会）</p> <p>かつての神戸と伝馬の角にあたる南北両側にあった。南側のものは、道路整備により北側へ移設され、北側のものは元農商銀行（現愛知県警警ら隊の場所）建設に際し、隣家の村瀬氏宅の裏に移設された。</p>
41	<p>熱田魚市場・大瀬古町【6-B】</p> <p>熱田は魚の供給地として四百年来の伝統があった。尾張藩治下で問屋、仲買、小</p>

	<p>座の組織が市場を独占した。大正から昭和初期まで繁栄したが、今は面影がない。 (名古屋市教育委員会)</p> <p>東海道「宮の宿」に栄えた魚市場 天正年間(1573～)にはすでに魚問屋があり、織田信長の居城清須に日々魚介類を運んだといわれる。</p> <p>寛永年間(1624～)尾張藩政のもとに、木之免、大瀬子に4戸ずつ問屋ができ、市場が開設された。</p> <p>以来藩の保護により、近海はもとより遠国からも魚介が運びこまれ、毎日取引が行われた。(名古屋市教育委員会)</p>
42	<p>正覚寺・神宮四丁目【6-C】</p> <p>西山浄土宗。亀足山と号す。永享6年(1434)融伝上人の創建。曼荼羅寺・祐福寺とともに尾張三檀林の一つ。</p>
43	<p>中村宗十郎出生地跡・伝馬二丁目【6-C】</p> <p>名古屋出身の明治の歌舞伎の名優。立役、実事の開山といわれ、団十郎(九代目)と対等の待遇を受けた。(名古屋市教育委員会)</p>
44	<p>赤本陣跡・神戸町【6-C】</p> <p>宮の宿には武家・公家の宿泊施設の本陣が2軒あり、赤本陣・白本陣といった。赤本陣は神戸町の熱田奉行所北、南部新五左衛門の邸で約778平方[㍍]の広さがあった。(名古屋市教育委員会)</p>
45	<p>宝勝院・神戸町【6-C】</p> <p>西山浄土宗。重要文化財の阿弥陀如来立像がある。聖徳寺のあとを継ぎ、常夜灯の管理を明治まで務めた。(名古屋市教育委員会)</p>
46	<p>^{れいのみまろ}鈴之御前社(鈴の宮)・伝馬二丁目【6-D】</p> <p>もとは精進川の西にあり熱田神宮の参詣者のみそぎの場だった。戦後移転した。茅輪くぐりの神事がある。(名古屋市教育委員会)</p>
47	<p>西浜御殿跡・神戸町【6-C】【7-C】</p> <p>西浜御殿は承応3年(1654)尾張藩二代藩主徳川光友が造営したもので、東西36間(約65[㍍])、南北33間(約59[㍍])に及ぶ豪壮なものであったといわれ、幕府高官や公家、大名の客館として使用されていた。正殿は安政年間(1854～60)^{ならわ}成岩(半田市)常楽寺に移され、残る諸館も明治6年(1873)売却され跡形もない。門は現在、春日井市中央公民館に残されている。</p> <p>ちなみに熱田の浜の浮世絵などに見える城郭のような建物は東浜御殿の一部で、初代藩主義直が造営したものである。(名古屋市教育委員会)</p>
48	<p>旅籠(丹羽家住宅)・神戸町【6-B】【7-B】</p> <p>丹羽家は幕末の頃、脇本陣格の旅籠屋で、伊勢久と称し、西国各大名の藩名入りの提灯箱が残されている。</p>

	<p>正面の破風付玄関は、かつての格式の高さを残している。屋根に上がっていた^{うだち}卯建は戦災で破壊され、現在は袖卯建のみである。</p> <p>創建は不明であるが、天保 12 年（1841）の「尾張名所図会・七里渡船着」には当家のものと思われる破風付玄関のある旅籠屋が描かれている。昭和 59 年、市の有形文化財に指定された。（名古屋市教育委員会）</p>
49	<p>料亭（熱田荘）・神戸町【7-B】</p> <p>丹羽家のすぐ西にある。木造・二階建て・切妻造・棧瓦葺平入り・正面庇付きで、この建物は明治 29 年（1896）武藤兼次郎が建てた「魚半」という料亭であった。太平洋戦争中は三菱重工業の社員寮として、現在は高齢者福祉施設として利用されている。</p> <p>建造時期は新しいが、近世の町屋の形式を継承しており、旧船着場に面して建ち、先に指定された丹羽家（伊勢久）とともに、宮の宿の景観をしのばせる数少ない遺構の一つで、市の有形文化財に指定されている。（名古屋市教育委員会）</p>
50	<p>徳川家康幽閉の地・伝馬二丁目【7-D】</p> <p>松平竹千代、のちの徳川家康が天文 16 年（1547）8 月 6 歳のとき、織田信秀（信長の父）のため人質となって、この地熱田の豪族加藤^{のぶもり}順盛の屋敷に幽閉された。またこのあと、那古野城内天王坊にも幽閉されたといわれる。</p> <p>天文 18 年 11 月、竹千代 8 歳のとき一時岡崎に戻ったが、再び、今川氏の人質として駿府へ行った。（名古屋市教育委員会）</p>
51	<p>都々逸発祥の地碑・伝馬二丁目【7-D】</p> <p>寛政 12 年（1800）開店した鶏飯屋という茶店にお亀とお仲という下女がいた。「トドイツ ドイドイツ」の囃子の潮来節に似た節回しの歌で評判を得たという。（名古屋市教育委員会）</p>
52	<p>裁断橋と姥堂・伝馬二丁目【7-D】</p> <p>秀吉の家臣で、後に初代松江藩主となった堀尾芳晴の長男金助が、小田原の合戦に 18 歳で病死したため、母が亡き愛児を供養するために架け替えた裁断橋の擬宝珠（市指定文化財）の銘文が有名。この橋のすぐ近くに、オンバコを祀った姥堂があった。裁断橋の擬宝珠は、名古屋市博物館に保管されている。</p> <p>俗に「おんばこさん」とも呼ばれる。精進川を渡る街道には橋のない時代、出水すると溺死者もでた。この溺死者から衣類を剥ぎ取る老婆がいた。永禄の頃、溺死した幸順沙門から衣類を剥ぎ取ると、老婆は急に熱が出て死んでしまった。その後、老婆の魂が精進川のほとりをさまよい飛ぶので土地の人が哀れみ姥堂を建て、奪衣姿の座像を安置した。精進川が改修された後も姥堂は残されたが、戦災で焼失したので、現在の建物は復旧されたもの。</p> <p>裁断橋は、姥堂の近くの精進川に架けられたものだが、時代ははっきりせず室町</p>

	<p>末期といわれている。当初の裁断橋は、長さ 11 間半（約 20.7 ㍓）、幅 3 間（約 5.4 ㍓）の木橋で 4 本の親柱には擬宝珠があった。その擬宝珠には、和文と漢文の両方で文字が刻まれている。その内容は、小田原の役に 18 歳で参加し、あえなく戦死してしまった堀尾金助という息子を悲しんだ母親が供養のため、33 回忌に裁断橋を修築し、刻んだとある。それが名文であり、母性愛の象徴として有名になった。移設・復元された橋の脇には、石橋だったときの桁石が置かれている。</p> <p>ちなみに、堀尾芳晴の出身地、大口町の五条川には、裁断橋を復元している。</p>
53	<p>宮の渡し跡・大瀬古町【7-B】</p> <p>桑名への七里の渡し場があり藩の玄関として栄えた。寛永 2 年（1625）に犬山城主成瀬正虎が常夜灯を建てた。常夜灯などが復元され宮の渡し公園となっている。（名古屋市教育委員会）</p> <p>「七里の渡し」は東海道五十三次の中で唯一海路という宮の宿場の特徴であり、伊勢桑名への海路 7 里とともに、四日市湊へ渡る「十里の渡し」も黙認されていたと伝えられている。常夜燈のある船着場一帯が船の発着場であるが、後に東の東浜御殿付近から出発するようになった。</p>
54	<p>常夜燈と時の鐘・神戸町【7-B】</p> <p>七里の渡しの船着場にある「常夜燈」は、寛永 2 年（1625）成瀬正虎が創建したもので、最初は須賀浦にあったが、承応 3 年（1654）に現地に移された。これは船の往来・安全を祈って建設されたもので七里の渡しが夜間航行禁止となつてからは、夕方 6 時から朝の 6 時まで点灯して禁を守らせたと伝えられている。寛政 3 年（1791）の火災で類焼したが、成瀬正則が再建し、今日に至っている。</p>
55	<p>神明社・伝馬三丁目【7-D】</p> <p>かつては天道社といい「おてんとうさん」（太陽）を祀る庶民の神様だった。文禄 5 年（1596）の銘のある日待碑が社殿の下に埋められている。知多街道道標がある。（名古屋市教育委員会）</p> <p>お天道社（神明社）・伝馬三丁目</p> <p>太陽崇拜の痕跡（日待ち供養碑）が残る珍しい社である。国道 1 号線の陸橋工事により現在地に移設された。大きな日待ち供養碑は、地元の人々に御神体として崇められ、社殿の下に埋められていて、直接、拝することができない。</p>

出典：名古屋市教員委員会の説明板、名古屋泰文堂『史跡 あつた』、熱田神宮宮庁『熱田神宮』、他

2-6 名物（食べ物）

No	名称・製造・発売・出典・概要
1	<p>・きよめ餅 きよめ餅総本家 名古屋・熱田神宮東門前 電 052-681-6161</p> <p>熱田名物きよめ餅の由来</p> <p>熱田神宮は五穀豊穡、家業繁栄を祈ってお参りする人が、昔ながらの神域に引きも切らず続いて居ります。</p> <p>天明五年頃（江戸中期）、「きよめ茶屋」が設けられ、参詣の人々はここでお茶を頂いて疲れを休め、姿を正して神前にぬかすくのを習わしとしました。この茶屋に因んで「きよめ餅」を売出しました処、その格調高い風味が忽ち評判となり、「熱田詣りにきよめ餅」「名古屋土産にきよめ餅」と全国に名を知られ、参宮のお土産としてはもとより、お茶うけ、ご贈答品にも好適の銘菓として、あまねくご賞味頂くようになりました。 きよめ餅総本家主人敬白（栞から）</p>
2	<p>・藤団子 きよめ餅総本家 名古屋・熱田神宮東門前 電 052-681-6161</p> <p>① 藤団子由来記</p> <p>藤団子は、古来熱田の名物として就中名だゝるものである。尾張の大儒松平君山（1697-1783）は、嘗て此の藤団子を説明してねむしもちをもって藤の花を形作る故、藤団子といふとある。藤の花形といふのは、一寸背がいかねるが、輪と輪を五つ、上から下へ連ねたとしたら、成程藤の花房の形とも見られる。然なれば、初め、或は紫の一色だったかも知れない。それが今の如く、五色となった。むしろこの五色の方が、ゆかしい。何となればこの五色であることは自づから古来端午と重陽との二節句に用ゐて誰も知る薬玉の五色にからまる民俗信仰にも通ずる。薬玉の五色の糸は行疫兵乱忽ち止み、五穀豊穡疑ひなしの瑞兆によそへたりといふ、それを承けたちも思われる。宜なり、嘗てこの藤団子、おこりをはらふに効ありといわれた。尾張名所図会による藤団子が藤の花房より来たとすれば、或いは藤原氏が尾張氏に代つて熱田大宮司となつたころ（平安時代末）、藤原の藤に因んで藤団子といったものだったかも知れぬ。さすれば茲八百年に垂んとする古き銘菓である。</p> <p>この銘菓がすでに絶えて久しかったのを、銘菓復元に熱心なきよめ餅本家主人新谷氏が故実を探り、この銘菓の復活を図り、謹製、江湖に見ゆることとなった。五色の撩乱は、いはゆる除厄の効あるべく、風味の高雅は、おのづから神気爽涼、熱田みやげの名実を具へたりと信ずる。御茶菓子に玩味、敢へて大方に奨める所以である。 きよめ餅総本家主人に代りて 尾崎久彌誌（栞から）</p> <p>② 藤団子</p> <p>このおさがりは藤団子と名づけられ、古来より当神宮特殊神饌の内に「桑、□（食偏に立と口を縦に）、と（食偏に主）、□（米偏に還の旁）」等があつてその□の形状をかたどって作られたとも、また藤の花房の形に似ていることから由来したとも伝えられているお菓子で、古くから熱田の銘菓として賞賛されています。</p>

	<p>色は節句に用いられる薬玉の五色を現し、家内安全・五穀豊穡・厄除等の御神徳にあやかる大切な色として伝えられています。(昔の葉から)</p> <p>・十団子 □(糯?もち米)を以って日本風俗の家紋に用いる藤の丸というものの、形は1寸ほどの輪の如く製し、青・黄・紅の3色に彩り、糸を以ってつなぎ、3色とりまぜ10ばかりを一連となし、これを十タンコと名付け児童の玩具とす。然れどもその義は未だ詳らかならず。</p> <p>土俗の説に伝えていう、その昔、加藤何がしという者あり、これを製し始めるにあたり家紋である藤の丸の形に模したる故に藤団子と名付けたという。然るに駿州宇都の谷にも十団子というものあり。これは白き餅を梧桐子ほどに丸め数珠の如く糸にて貫き通したるものなり。これを以って考えるに彼の藤の花形によるの説は信用し難き。</p>
3	<p>・春敲門 きよめ餅総本家 名古屋・熱田神宮東門前 電052-681-6161 お茶どころ名古屋に銘菓あり、名づけて「春敲門」というーこれは、熱田神宮の神門のひとつ、東門の別名。</p> <p>書聖・小野道風の筆になる「春敲門」の額(神宮宝物館に現存)をかかげ、この名がある。“春は東から訪れる”めでたき意。</p> <p>銘菓「春敲門」は、特撰和三盆の製。紅白二種、小型で上品に、色ゆたかに、茶前によく、酒後によく、常に茶の間に欠かせぬ好適の銘菓。いく久しくめでたまわれかし。(葉から)</p>
4	<p>・七里の渡し 亀屋芳広 名古屋市熱田区伝馬1-4-7 電052-682-0025 東海道五十三次の宿「宮」は桑名までの海路七里を船で渡ることから「七里の渡し」とも呼ばれた。</p>
5	<p>・二十五丁橋 亀屋芳広 名古屋市熱田区伝馬1-4-7 電052-682-0025 熱田神宮境内内にある名古屋で最古といわれている石橋で、石の板が25枚並べられていることから名付けられている。</p>
6	<p>・^{だんじり}車楽 亀屋芳広 名古屋市熱田区伝馬1-4-7 電052-682-0025 大山祭といって、かつて中瀬町・須賀町などから背の高い山車が出された。</p>
7	<p>・あつたの杜 亀屋芳広 名古屋市熱田区伝馬1-4-7 電052-682-0025 熱田神宮の鬱蒼とした森は、訪れる人を和ませ、お参りに向かう人の気持を落ち着かせる効果がある。</p>
8	<p>・おほほ 亀屋芳広 名古屋市熱田区伝馬1-4-7 電052-682-0025 熱田神宮で、毎年、5月4日の夜に行われる笑酔人神事のことを「おほほ祭」ともいう。これは草薙神剣が熱田に還座したとき、社人がこそって喜び、笑いあったことに因んでいる。</p>

・創作銘菓案

9	<p>銘菓「熱田一番」(最中など)</p> <p>国中を1ヶ月30日間、交替して守護するとされる30の神の中で一番神は熱田神宮であることに因んで作られた名菓。</p> <p>神仏融合思想に基づいた法華経守護の三十神が著名。始め天台宗で、後に日蓮宗で信仰された。(『広辞苑』第5版)</p>
10	<p>銘菓「信長塀」</p> <p>信長塀に姿形の似ている(トッピングには山形のチョコレートを乗せて瓦屋根とした)ミルフィーユまたはバームクーヘン</p>
11	<p>銘菓「房信」(刀剣の鍔を模す)</p> <p>越前に住む房吉子なり、尾州熱田に來り居住あるいは清洲府、透極の上手也、太閤秀吉の頃後に駿州吹井に移住す。</p>
12	<p>銘菓「^{うしな}氏名が長命」(小刀を模す)</p> <p>熱田社家が土産に小刀を贈答品としたことが知られており、かつて小刀が熱田土産だったことが伺われる。そのなかで九鬼長門の書状写には「…氏命長銘之小刀巻本贈給…」とあり、「命」の最後の一面を長く伸ばして書いてさらに長命の感じを出すものが多くある(『田島家文書』、『馬場文書』)。</p> <p>当時の熱田特産品とみられる^{みやげ}宮筥の刃物のうちで、小刀の作者^{うしなが}氏命は熱田在住の刀工で、初・二代(寛永～寛文)あり、一般に「和泉守藤原氏命」と長銘に切るのは二代作とされるが、「氏命が長命」とのめでたい意に掛けている可能性もある(『田島家文書』)</p>
13	<p>銘菓「土器」</p> <p>古くは御器所村にて土器を製し熱田の宮に供せし、今はこの事無く、御器所村の工人後熱田に移り綾幡村にこれを製す。</p> <p>熱田にて手作りと呼ぶ土器手して押しひらめ中くぼく作りたる者也。日本紀釈日本紀に天の手^{たくり}又平^{ひら}口^{くち}盆^へというもこれ類なるべし。(『張州雑誌』巻第27)</p>

・復刻菓子案

13	<p>銘菓「^{おこしめ}起米」(煎餅)</p> <p>形は丸く、正月元旦から15日まで販売する。</p> <p>『塩尻』に、藤原明衡『新猿楽記』で美濃八丈にいう尾張において^{おこし}紅口は日本風俗の^{おこしめ}起し米と呼ぶなり。清人いわゆる歓喜団のその製『帝京景物略』を考えるに、今熱田の市場これを売る。これを「宮起し米」と、また津島の起し米はその味勝れみゆるにすなわち我が尾州これを製る。これ故明衡これを載す云々。</p> <p>又、曰く^{ぎよぎよ}口おこし米とする和名にもい出て久し、されどその製わが国のおこし米とは違いあり『帝京景物略』に載する歓喜団その製法わが国のおこし米と等しく</p>
----	--

	<p>伝わるにや。 <small>おこし</small>興米、黒川道祐の説にその製法粳米を熬（煎る・蒸す）□<small>しるあめ</small>飴を以って固めそれをあるいは長くあるいは円くこれを造る。これ粘固の中よりこれを挽興いうなりと云々。（『張州雑誌』巻第27 熱田土産）</p>
--	--

・創作（復元）料理案

14	<p>熱田鶏飯（定食・丼・弁当・お握り）と蜆汁</p> <p>かつて東海道五十三次が賑わった頃、宮の宿に近い東海道に並んだ鶏飯屋で、蜀黍の煮汁で炊いて鶏飯のような色をつけた飯に蜆汁を付けて出したものが大変な人気があったことに因んで、現代風にアレンジして復元した名物。</p>
----	---

2-7 土産物【復刻土産案】

No	名称・内容
1	<p>宮団扇（宮扇子）</p> <p>社家が生活に困り、熱田神宮の祭礼の時に参道に飾る笹竹を貰い受け、団扇として売り出し、一時は熱田名物といわれるほど盛んに使われた。持ち手が丸竹で短部の穴が詰まっているのが特徴といわれる。</p>

平成22年度 市民研究報告書

“熱田神宮に門前街を…”

発行 平成23年3月
名古屋都市センター
〒460-0023 名古屋市中区金山町一丁目1番1号
TEL 052-678-2200
FAX 052-678-2211
印刷 名港印刷 株式会社

この印刷物は再生紙を使用しています。

